
風の幻

矢野 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の幻

【Nコード】

N9470B

【作者名】

矢野 新

【あらすじ】

神の森に降り立ったのは風の民と言われる最後の生き残りの少年。その日、エルフの少女と出会った事で世界の運命は動き出した。

1・記憶

そこには、木々が遮ってなかった。すべての音が止まったように聞こえない。木々から射し込む光の中に1人の青年が倒れていた。

目を閉じているが、その顔立ちはまだ幼いと見て取れた。どこかの民の出なのだろう。見たこともない服装をしていた。

木々の間から射しこむ光は青年に一度も影を作る事はなく、若者を包み込むように地上を照らしていた。鳥の囀りも、小動物の動く音さえも聞こえなかった。まるで音をたてるのを遠慮でもしているかのように、その場所だけ時が止まっているみたいだった。

でも、そうでないと解るのは木々が風に揺らされている時だけだった。

ガサツ。

その沈黙を破った者がいた。その者は若者を見ると少し立ち止まり、躊躇っていたが若者のほうへと歩きだした……

かすかに人々の笑いあう声がする。それは幸福に満ちていて幸せそうなお笑い声だった。幻ではない証拠に目を覚まして、その声が途切れることはなかった。

最初に目に入ったのは、木で作られた天井だった。

体を起こそうとして、自分の体が痛みを訴えた。体を起こすのを諦めると、タメ息をついた。その時誰かの足音が近付くのが聞こえ、ドアが開く音がした。ベッドに近づいてくると、若者の顔を覗きこんできた。

「目が覚めたか？」

それは、1人の少女だった。今は頭が良く回らないけれど、髪が赤いことが分った。その少女は、あまり低くはないがよく通る声でそう訊ねた。若者が返事をする変わりに頭を動かした。少女が開いていた窓を閉めると、外からの笑い声が聞こえなくなった。

「お前はどつしてあそこに倒れていた？どつやらその服装から見ると、風の民のようだが…」

「……」

喋らない若者に、少女は眉を寄せた。

「お前…喋れないのか？」

それとも言葉が通じないのだろうか、と不安になっていると、

「いえ、…言葉はわかります」

「じゃあ、お前の名はなんと云う？」

「名前は…」

若者はそう言いかけて口を閉ざした。

「どつした？」

少女がそう問いかけても若者は答えなかった。いや、答えられなかったのだ。若者が黙っていると、

「お前、どつしたのと言つのだ？まさか自分の名前が解らないと言つのか？」

「…そのようです。何も覚えておりません」

少女は、考え込むように目を伏せた。

「風の民というのは？」

「風の民？」

「…風の民とは、空を自在に飛び、風を操る力を持っているようだ。血族以外とは血を結ばないと聞いたが…すべて空想のものだと思つたが、まさか実在しているようとはな」

ズキン。
今、頭に激痛が走つた。何か思い出そうとしたが、頭痛が起こり考えようとしてもだめだった。まるで思い出してはいけなかいかに。

「私は、ティア。この村の族長の娘だ。お前は…呼び名がないと不便だな…そうだな、シアンというのは？」

「シアン？」

「シアンとは、我々の間で賣き者という。お前は、強そうにはあま

り見えないからな」

「……」

確かに、そうだった。顔立ちが男らしいとは言いがたかった。少女
と言えばそれで通せそうだった。

若者 シアンが黙っている

「私はもう行かなければならない。後で人を呼ぶ」

基本的なところは覚えていようだ。

忘れたのは、自分のこと、自分に関する事。どこに住んでいて、
何をしていたのかという所はてんで思い出せない。完全な記憶喪失
ではないようだ。

体はまだ動かせなかったが、頭ははつきりとしてきた。

(この村の人達は…)

もしかすると、エルフの村かもしれない。

立ち代り、来てくれる者はみな耳が長く、髪の色も様々だった。し
かし、ティアほど髪の赤いものはいなかった。

(伝説だと思っていた…)

すべては、伝説と疑って信じてなかった。でも、いったい誰が？
ズキン。

また頭痛だ。どうして考えようとすると頭が痛むのだろうか。何か
大切なものを忘れている。でも、いったい何を？

何日かすると、体が動くようになった。

部屋の中は、とても粗末で小さかったが、不潔と感じることはな
かった。きれいに整えられているし、小さな窓だつてある。ベッドの
脇のところには小さな紫とピンク色をした花がある。最初は気がつ
かなかつたが、首をまわせるようになると、ベッドのそばにこの花
が小さなビンにさしてあるのを見た。前は元気だったが、今は少し
元気がなくなっていた。起きあがるようになると、部屋の中を見
まわしてみた。

シアンにとっては見たこともなかったから、目に付いたのだ。こんな珍しいものを見たのは初めてののような気がする。記憶があった時のことは知らないが…

起きあがれるようになる、身なりを整えさせられた。最初は身の回りの世話をしてくれていた少女がいたが、さすがに服の着替えは恥ずかしかったので、自分で着替えた。ドアをノックする音が聞こえて返事をした。

「どうぞ」

「着替えたのか？…自分で着替えるところを見ると、お前は位の高い者ではないらしいな」

シアンはティアの言葉にはっとした。

風の民…身分…

何だ？何を忘れている？

シアンの心の内を知ってか知らずか、ティアが用件を告げる。

「もう大丈夫だな…村の長と会ってくれ」

村の長とはもちろんティアの親のことだ。そういえばこの村に来てから一度も長に会っていなかった。

いくら起き上がれなくて、会うのも無理だと知っていても何日も同じ村にいたというのに今さら会うなんて少し気が引けた。

（何か言われてもしかたありませんね…）

そうやってシアンが考えこんでいるとティアが外へ出るようにとシアンを促すと、先に出ていった。

シアンが外に出ると、ソウエルの光が眩しくて一瞬よろめいた。

外にはティアの姿はなく、変わりに一人のエルフが立っていた。小太りな女のエルフだった。そのエルフはシアンに後からついてくるようにと促すと、先に立って歩き始めた。シアンは後からついて行きながら、考え事をしていた。

（深き緑…清らかな水の流れ…）

木々が多く、家々も木で作られていた。レンガなどで作られている

ものはみなかった。

(まさに、ここは…)

不可侵の地のようだ。すなわち変種族とはエルフの事。

シアンには記憶がなかったが、同じソウエルに加護を受けているのだと解った。たぶん、ここは自分と同じ空の下にあるのだ。

(たぶん、辺境の地…)

美しいエルフ達の村にシアンは驚嘆の色を隠せなかった。

どこを見回しても、シアンが見た事もない景色ばかりだった。

そこで、シアンの思考が止まった。記憶がないのにそんな事を言える訳ないのにと、呆かれた。

一つ、少し離れた場所にあるその家は周りの家より大きかった。ここが族長の家なのだと一目見て解った。

小太りなエルフが中へ入れてくれた後、そのエルフは家の外へと出て行った。何か仕事が残っているのだろう。族長とは一言三言話しただけだった。

シアンは赤色に金糸で縁取られている絨毯の上に座っている人を見た。いや、それはエルフだった。

白い髭が口元をおおっていて目元は老人らしく目下が伸びてきた眉のせいで下がっていた。その目は紫色で、シアンをじっと射ていた。「どうぞ、お座りになってください」

しわがれた声は、弱々しくなく、凜としていた。さすが族長というところか。

「失礼します」

用意された布張りの綿の上に座ると、シアンはつい正座をしてしまった。

「そなたは風の民だそうだな」

「はい。…そのようです」

シアンは内心記憶がなかったから不安だった。

何か聞かれて、応えられなかったらどうしよう…

「おお、すまぬ。そなたは記憶を失っているそうじゃな」

「はい」

「どうして、この地へ来たのかも覚えておらぬそうじゃが、真かのう？」

「はい。どうしても思い出せません」

そこで、族長は考え込んだ。いつのまにか族長のすぐ近くにティアが座っていた。

族長は顔を上げると、紫の瞳でシアンを見た。思わずシアンは背筋を伸ばす。

「そういえば、私の名を言ってなかったな。私はこのエルフ族の長、アゼンじゃ。見ての通り、後先わずかな年齢だがの」

「……」

シアンにはどう応えたらいいものか分らなかった。

ティアが何か言いかけようとしたが、アゼンが目で制すると、口を閉ざした。

「さて、シアンとやら。“ムーンバーサス”を知っておるかの」

「いえ、存じません」

「月神殿のことじゃ。その月巫女から聞いた話じゃが」

そこでアゼンはいったん口を閉ざし、

「そなたが来る事は予言をされていた事なのじゃ。風の民この地に訪れる……とな」

「……」

風の民とはシアンの事でここへ来る事は予言されていた事……

「シアンとやら、そなたの事を予期せぬ客ではなかった。予言がなければあの場所にそなたは今も倒れていた」

「……」

シアンは助けられたという事を自覚した。

「ありがとうございます……この恩は一生忘れません。助けていただいてなければ、私は死んでいたでしょう」

アゼンはしばらく髭をさすっていたが。

「いや、そなたは……」

「…………？」

シアンが不思議に思っただアゼンが喋るのを待っていると、

「実は…そなたは風の民、最後の生き残りなのじゃ」

「！」

シアンは自分の耳を疑った。

「…それは我等には予言されなかった事なのじゃ。風の民が絶滅に追い込まれることを」

シアンはただ目を見開いて、アゼンの言葉を聞いていた。

「…族長様。あなたはなぜ、それを…」

シアンはやつとそれだけを口にした。

アゼンは首を振った。

「我らには予言を託されなかったのだ。風の民が滅びゆく事を後から…知った」

だから。

「…………」

シアンにはそれ以上何もいえなかった。

「今日は収穫祭じゃ…よかつたら見ていってくれんかの」

外はいつの間にか日が暮れようとしていた。

もうすぐ祭りが始まるのか、集まっている人たちがあちこちに見られた。

シアンはただ、ぼーっとそれを見ていた。

子供の笑い声や犬の鳴く声が聞こえた。

(…………)

耳を押さえてもそれらの声は聞こえていた。

(僕が風の民、最後の生き残り…？記憶がない…思い出せない…………)
シアンは頭を抱えて、うずくまった。

「どうすれば…」

「こんなところにいたのか」

突然部屋に誰かが入ってきた。シアンが顔をあげた。ティアだった。

「…父は、嘘を言うような人ではない」

「解っています…記憶が、記憶が無いんです」

「……」

ティアはシアンに触ろうとしたが、やめた。どんな言葉も慰めにはならない。

立ち上がると、シアンから離れた。

「そなたがここに来たのはただの偶然ではない。…何か運命のようなものを感じる」

シアンが顔を上げるとティアは夕日のほうを見ていた。

「この村に…何か起きるかも知れんな…」

その呟きは、シアンにむかって言った様ではなかった。

人々のざわめきが風につれて聞こえてくる。

笑い声…怒鳴る声…楽しそうな…それは幸福そうだった。

そこでふと、シアンは思いを巡らしていたのを止めた。

人…黒いもの…声…笑い声じゃない…あれは確か…緑…木………？

「どうした？大丈夫か？」

はっとして顔を上げると、ティアが心配そうにシアンの顔を覗き込んでいた。

「顔が真っ青だ…もう休んだ方がいい」

「いえ、大丈夫です。せつかくですからお祭りを楽しみます」

シアンはいいと言って遠慮したのに、ティアが案内をしてくれろと聞いた。エルフ達がティアに声を掛けたり、果物をくれる事もあった。エルフ達がいろいろな珍しい果物や動物の肉を祭壇の上に供えていた。そして、祭られているのは

「ザガズ神だ」

ティアはそう言いながらザガズ神を仰ぎ見る。

「総てのものにして唯一の神…つまり一日を無事に過ごせたことに対する感謝の気持だ」

シアンはじつとザガズ神を見た。光石で光っている姿は、神々しく、

総ての生命の右手には“生命”丸い金色の玉を持っている。そして左手には“刻”を表す大きな時計を持っていると言う。ザガズ神はその姿は人間よりも他の種族、エルフなどに近いという。そうティアが説明してくれたから耳を見てみたが、良く解らなかった。

「お姉さま」

近くで子供の声が出た。振り返ると、ティアのそばに黒髪の子供のエルフがいた。

「姉さま。今日は最後の日です。準備を」

「そうか。ティン分かった。今から準備をする」

シアンは意味が解らないまま二人の会話を聞いていると、ティアがシアンを見た。

「すまぬな。私は用事があるから、シアンはティンの後についていてくれんか」

「ええ。解りました」

「では、また後で」

そう言うと、族長の家のほうへと歩いていった。

「シアンさま」

ティンがぺこりとおじぎをした。

「こちらへどうぞ」

「我が神ザガズ神よ、すべての名において生命を今日、この時見守っているそのことに深く恩栄するとともに感謝する。我らは、ザガズ神を唯一の神とし、生涯愛を賜うことを懇願する。我らの生命はザガズ神にあり。今、ここに愛を賜うとともに大地の実りを捧げる」
他のエルフ達にあわせて、シアンも慌てて頭を下げた。ティアが片膝を立ててザガズ神の前に座ると、手をあわせて何か呟いた。

その姿は女神かと思えるほど神々しかった。薄い布を何枚も重ねて身につけた物は美しく、髪は高く結い上げていた。他にも耳飾りや腕輪などをつけていた。首から下げているのは、貝殻と山鳥の羽根に紐を通したもので海と山を表していた。その姿は誰もが見惚れず

にいられなかった。この世のものとは思えないほど、ティアの姿は美しかった。

やがて、ティアが立ち上がるとエルフ達は顔をあげた。そして、エルフ達に向かってこう言った。

「我がザガス神に祈りを」

その声は凜としていてかがり火としてたかれる松明の爆ぜる音以外、静かな広場に心地よく響いた。エルフ達はもう一度頭を下げた。シアンも同じようにした。全員が顔を上げるのを待ってティアは告げた。

「今、この時をザガス神に感謝しながら大地の実りを祝おう」

すると周りにいたエルフ達が手に持っていた果物、果実酒、動物の肉などを持って、人々へと手渡していった。

「そなたも、召し上がるとよからう」

顔をあげると、ティアがシアンのそばに立っていた。シアンは前列の端の方にいたのだ。

「ええ。せつかくだからいただきます」

シアンはまだエルフの服を着ていたが、明らかにエルフ達とは違うその雰囲気は隠せない。だから、エルフ達から奇異の目を受けていた。そんな時、シアンは肩身が狭かった。今はみんなご馳走に夢中でシアンを見ていなかったが。

「どうした？やはり気分が優れないのか」

ティアがかがみこんでシアンの顔を覗きこんだ。

「…あ、いえ」

シアンは思わず顔を引っ込めると、違うほうに顔をそむけた。

ティアは怪訝な顔をしていたが、ティンのほうへと向き直った。

「お父様は？」

「無理のようです。ここまで来るのも動けないようです…」

「そうか」

ティアは座るとシアンの杯に果実酒を注いだ。

「あつ姉様」

「よい。お前もわたしの酒を飲んでくれ」

そういうと、シアンのほうへ差し出した。ティンにも注ぐ。

シアンは「ありがとうございます」と受け取った。

「…今、外の世界は均衡が崩れつつあると聞いている。この収穫祭もいつまでもつ事が…」

「何か問題でも？」

「収穫の数が減ってきているのだ。我らエルフにとって食べる者と
言えば、自然から取れるもの。つまり、この森にあるものが無くな
れば、我らの絶滅は免れない」

「……………」

「第五代暗期に比べればまだましかもしれないが、もしかすると、
また暗黒の時代が繰るとも限らん。…問題は今の王と、森の滅亡か
もしれない」

「今の王？」

ティアの顔が曇る。

「今の王は人間だと言われている…」

シアンが少し驚いた。

「今の王とはすなわち、ケルヒス「アドロス」ハーシエ8世だ。今
の時代王というものはどこにでも必要だろう？ 統治者がなければ、
国は混乱し滅びる。だから王は必要なのだ」

そこでティアはため息をついた。

「この森は…」

いつまでもつのか。

人間にとって、エルフとは異種であるから共存は無理かもしれない。
理解を求めても満足のいく答えは得られないだろう。

ただ、絶滅するのをじっと待つだけなのか。

王とは、世界を治める者であり、統率者である。その王の命令とあ
ればエルフたちは絶滅を強いられるだろう。

エルフたちはこの森から出られないのだから。

「……………」

「おお。すまない。せつかくだからそなたもご馳走してくれ」

「はい。頂きます。あのう…」

「何だ？」

「前々から聞きたかったのですが、どうしてそこまで僕にしてくれるんです？外から来た者なのに…」

ティアは首を振った。

「そなたが来る事は予言されたことであつたらう？だから予言されていることだから、何も邪険にすることもあるまい…ただ」

「ただ？」

そこで言葉を止めたティアにシアンはもつと尋ねたかったのだが、それ以上待てども何も言わないので口を閉ざした。

（ただ… 僕がエルフでは無いから…か？）

祭りも終盤にさしかかると、祭壇の前に木を組んだものに火が点けられた。それが点くとティアが松明を持ち火を点け、前に進み出た者に火を移した。

そうして火が伝って全員に松明がつくと祭壇に向き直った。

「ザガズ神よ。この一日に感謝します」

そういうと、松明を高く掲げザガズ神へとむけられる。

エルフたちも高く掲げた。

祭りも終わろうとしていた。

エルフたちが家に戻る途中、ティアに呼び止められた。

川のある場所についてくるように、と言われついて行った。

川のせせらぎは暗くて底が見えない。松明の光はここまでは届かなく、アル・ヒイティアとラグ・ヒイティスの光でぼんやりと川が見えた。松明の光は明日まで消されることはないようにしている。それで祭りが終わるのだ。

「話って…なんですか」

一向に喋ろうとしないティアにシアンはそう切り出した。何となく

言われる事は解っていたが…

「……」

ティアは何も言わず、ただ川を見ていた。

「話というのは他でもない。シアンの事だ」

「……」

今度はシアンが黙った。

「そなたはいつかこの村を去るだろう。しかし、外に出たとしてもどこへ行く？町、村にいったところで何が得られるか。自分の家へ帰るのか？しかし…」

「解っています。僕も考えました」

ティアの言葉をシアンがさえぎった。

「自分の家はもうないことぐらい……それに最後の風の民とあつたら村を襲った者たちに殺されかねません。…しかし、この村にいつまでもいる訳にもまいりません」

「そなたはどうしたいのだ」

「え？」

「そなたはどうしたいのかと聞いているのだ」

「僕は…」

川に映る月があまりに鮮明なので思わず目を閉じた。

シアンの心はアル・ヒィティアとラグ・ヒィティスのようにひどく不安定だった。

「風の民はなぜ襲われたのでしょうか。そして皆、逃げようとはなぜしなかったのでしょうか。なぜ、僕だけ…」

気がつくくと、涙が零れていた。

目が覚めてから初めて流した涙だった。

止めようとするが、止まらなくなり目をこすった。

ティアはそれ以上何も言わず、黙っていてくれた。側に居てくれたのが嬉しかった。

まだ、5、6歳くらいの少年が祭壇の近くにある炎の前になっ

た。炎の防人として、ここの森の少年たちは自ら炎の防人になるうとする。大人ではなく、小さな子供がするのはこの森をずつと子々孫々伝えていく、それが子供たちだ。という意味からである。

しかし、子供がやるといっても簡単なものではない。炎を絶やさぬようにとはもちろんの事、木が燃えすぎて煙があまり立たないようにしたり、消えないようにするのもこの防人の役目だった。

少年はじつと立ったまま炎を見つめていた。と、何か夜空にキラッと光るものを見つけた。

(ん？あれは…？)

星ではない。星はあんな光り方しない。しかも下に落ちてくる…？そう思っているうちにそれは降りて来て、ザガズ神の真上に落ちた。

(……！)

ティアが先に家へと戻ってもシアンはまだそこに立っていた。

今、頭ははつきりとしていた。

後で、翌々考えてみれば、あれはとても恥ずかしい事だった。女のエルフに、しかも族長の娘…に泣いているのを見られたなんて。

(笑われるかも…)

穴があつたら入りたい気分だった。

と、その時広場の方からざわめきが聞こえた。

(なに？)

炎が絶えず燃えている方へと視線をむける。

行こうかどうか少し迷ってから、シアンは歩きだした。

広場に着くと、防人の少年が祭壇の上を指差しティアが短い階段を上ろうとしていた。

そばにティンの姿があつたが族長の姿は無かった。エルフたちが少し集まっている広場はやけに広がった。

真夜中なので偶然、目にした者しかこの場所にいなかった。

ティアがザガズ神にかかっている物を取った。

それを持って降りてくるとエルフたちがティアを囲んだ。シアンは

後ろで見ていたが、エルフ達の声が聞こえてきた。

「これは…もしかして……」

「いや、そうでは……」

色々な声が混じっていたが、何せ声が小さいので余り聞こえなかった。

すると、ティアがだつと走り出した。慌てて後を追いかけたティンの黒髪が炎にあたってはつきりと見えた。

「これは……」

族長はそう口を開いたまま固まった。

「長！」

男のエルフの一人が叫んだ。騒ぎを聞きつけてやってきたのだ。

「まさか、伝説に聞くあの……」

その時、バンツと扉が開いた。家のなかにいた皆が一斉に振り向いた。

「あ……」

シアンはみんなの視線を受けて立ちすくんだ。

ドアの近くに座ると、俯いた。

「それで、これはどこにあったのじゃ？」

「はい。炎の防人の少年がこれを見たそうです」

防人の少年は前に進み出ると、族長に敬礼した。

「お前がこれを見たのか？」

「はい。恐れながらこの僕…わたしが見たのは空から星のように光りながらザガス神の上に落ちてきたところですよ」

防人の少年がそう言うと、集まっていたエルフ達がざわめいた。

「ふむ……」

族長はうなつて黙り込んだ。

「恐れながら族長、このことは月神げつしんからのほうからは……」

「いや、何も聞いておらん」

シアンはまだ事の起こりをよく理解していなかった。

「風の民…」

そう言葉を漏らした族長にシアンはどきりとした。

思わず族長を見るとアゼンがじっとシアンを見ていた。

皆はざわめいてひそひそと囁きあった。

「シアン」

アゼンの横にいたティアが頷いた。

そこでシアンは仕方なく族長の前へと進み出た。

アゼンは重たそうに口を開いた。

「そなた、シアンよ。風の民としてそなたがこの村に居るのは周知の事。みな誰もがこの村によその者が来る事が無いので、どうすればいいのが良くわからないのじゃ。気分を害さないでくれ」

シアンには族長の言いたい事がわからなかったので、何も言えなかった。ただ頭を下げただけだ。

アゼンはすつと、シアンの前に手のひらの中の物をシアンに見せた。

「これは“風のイエーラ”だ」

「風のイエーラ？」

シアンが鸚鵡返しに尋ねると、族長は頷いた。

「またの名を収穫の神。我が村にこんな言い伝えがあるのだ。

白き風の民 やがては伝説へと変わる 幸福と主を齎し その背には見えぬ真白き翼 絶望と恐怖から我らを救いたもう、とな。まさかと思っていたが…」

「では、族長」

「うむ」

シアンは何が何だか解らないままエルフ達の言葉をとめどなく聞いていた。

「風の民、シアン様。どうぞ、この村をお救い下さい」

と、村人達が一様にシアンに頭を下げた。

「ええっ!？」

「私からもお願いいたします」

族長からも頭を下げられてシアンはほとほと困ってしまった。

自分の家へと向かいながらシアンは先程までの事を思い返していた。あの時ティアが族長をなだめていなかったら、今もずっと頭を下げられていたかもしれない。

ハア……

運良く村人のエルフ達に会うことなくシアンは歩いてきた。といってもシアンのほうが避けて川のほうから通っていたのだが。

(伝説の風の民……でも僕は記憶がない。頼りにならない)

シアンがそんな事を考えながら辺を歩いていると、双子月が揺れた。

「そなたは、ここが好きなのだな」

シアンが振り向くとティアがいつの間にか側に居た。

「ええ。心が落ち着くので」

シアンはそう正直に答えた。

「そうか。私もここが好きだな」

(そう言えば……)

「あの……」

シアンが恐る恐るティアの顔を見た。

「なんだ？」

シアンは唾を飲み込んだ。

「あの……前の事は誰かに……」

その言葉を聞くと、切れ長の目を見開きティアは吹き出した。

「あ、あのう？」

そのまま笑い出してしまったティアに真っ赤な顔のシアンは戸惑いながら声を掛ける。

「いや、すまぬ。そなたは顔だけではなく、中身も女みtainなのだ
な」

「……」

シアンは黙り込んだ。女みたいだと言われて嬉しい筈がない。

「すまない。あまりにも反応が可笑しくて」

シアンはもつとふくれた。

やつと笑い終わると、ティアは真剣な顔をした。

「安心しろ。誰にも言っていない。…同じ境遇だったら私も泣いていたかもしれん」

「……」

「しかし……」

ティアはシアンの側に立った。

「そなたも大変だな。記憶喪失といい、伝説といい…すまぬな。皆悪い奴では無いのだが」

「解っています。先程はありがとうございました」

「え？ああ、別に気にする事ではない」

ティアは一息ついた。

「まだ、心は決まっていないのか？」

「…ええ。あのまま時間が過ぎてしまつて。なんだかムダに思えてきます」

「ムダか？」

「え？」

シアンは顔をあげた。

「今、この時間は無駄だと思うか」

「……」

何故か解らないがティアの姿にどきつとした。

「…いえ、無駄ではありません。こういう時間も必要です」

「月は暗い夜を照らす絶えまない愛の光…エルフ達には必要不可欠のものだ。こよなく優しい光を我らに与えてくれる。お前はどうか？この2つの月の光をどう思う？」

「月の光……」

そんな事考えてもみなかった。ただ太陽の光には感謝していたけれど、月の光は暗い夜道を照らすといつても、あまり夜道を歩かない。「確かに、月の光は神秘的で好きですけど……」

どうして、そんな事をティアが聞いてくるのかシアンには解らなかった。

「そうか…」

そう言うと、ティアは何かを決したように川の中に映っているアル・ヒィティアとラグ・ヒィティスを見続けた。

目が覚めると、日がかなり昇っていた。どうやらだいぶ寝過ごしたらしい。

ベッドの上でボーツとしていると、昨日の事が夢の中の出来事のように思われた。ベッドから起き上がり、用意されていた衣服に着替えた。いつも誰かが用意してくれているのだ。小さな机の上に置いてある食事をシアンはいつも不思議に思いながら食べる。

外へ出ると、川のほうへ向かった。

途中でエルフ達が「こんにちわ」と挨拶してくれる者もいたが、ひそひそとシアンのほうを見て、何か囁きあっていた。

(はあ……)

心の中でため息をつき、ティアは皆から質問攻めにされているかもしれない、と思った。

川辺へ着くと、川岸に足を立てて水をすくった。とても冷たくて、気がよかった。

顔を洗うと、持ってきていた布で顔を拭くと顔をあげた。

するとともに胸に手をやった。

そこには青紫陽花色のペンダントハイ・ドラゴンがあった。

じっと見つめていると、ソウエルの光に反射してきらつと光を放った。

シアンにはなぜ、このペンダントが自分の首にぶら下げられているのか知らない。記憶が無いから思い出そうとしても思い出せないのだ。

何か大切な事を忘れている。でも、体が思い出すのを、記憶が戻るのを拒否している。

(っ……)

声にならない悲鳴をあげると、頭を抱える。

《……だ》

(え?)

ドクン。

心臓の鼓動が早くなった。

《……》

口の中がからからに乾いて頭に血が上るのが分かった。

(なに?何なんだ?)

声が聞こえる。でも、何を言っているのか分からない。
理解できない。

《はやく逃げるんだ!!》

ドクンッ…!

はっと顔をあげた。

目の前は相変わらず、清い色のシアンの瞳のような水が流れている。いつの間にか目を閉じていたらしい。目を開くと、少し太陽の光が眩しかった。

ペンダントを服の下にしまいこむと、立ち上がった。握っていたペンダントが汗ばんでいた。立ちくらみがして足元がよろめいた。シアンは少し、フラフラとしながらも自分が寝泊まりしている家へと戻った。

シアンは昼食もそこそこに、ティアが用意してくれた本を開いていた。しかし、本の内容は頭の中に入れてこなくて少し苛々としていた。先程の事ばかり気になって、心が落ち着かなかった。

とんとん。

ドアがノックされて、シアンははっと顔をあげた。

「どうぞ」

ドアを開けたのはあのいつも世話をしてくれている、小太りなエルフだった。

「失礼します」

部屋の中に入ると、机の上にある食器を片付け始めた。

シアンはしばらく見ていたが、思い切って聞いてみることにした。

「あの…」

「何か？」

「その…昨日の事件についてあなたは何か聞きましたか」

小太りなエルフは少し手を止めて

「いえ。私も噂では聞きましたけれど、私どもにはよく事の次第を知らされませんでした」

「そうですか…」

エルフは少し微笑み食器を持ってドアの取っ手に手を掛けた。

「では」

そういうと頭を下げ部屋を出て行った。

シアンはそう聞いても、ティアの元へと行くのは躊躇われた。ましてや、族長にだって…

ポーっとして、手に持っていた本を閉じると窓へと目をむけた。

もう、笑い声は聞こえなかった。あの幸福そうに満ちた…

(…お母さん)

ふと、顔をあげると辺り一面緑色のものがたくさん目に入ってきた。
草…草原か。

(お母さん)

もう一度声がした。…子供の声。

(フェータル。どうしたの)

子供の目の前に、女の人が現れた。声も聞こえる。

(…ひっく。あのね、アクトが目覚まさなくなっちゃたの…)

子供の声は涙交じりだった。

女の人は草を掻き分けやって来た子供を、子供の胸に抱き抱えられている動がなくなつた子犬ごと抱きしめた。

(アクトはね、遠いお空の向こうに行っちゃったの。そこはね、とても幸せがたくさん溢れているところなのよ)

子供が顔をあげた。

(…本当?)

女の人は優しく微笑んだ。

子供はその笑顔を見ると、泣くのをやめた。

(だからね、泣く事は無いの。アクトは幸せなのだから)

そこで、子供は笑った。それはまるで天使のような微笑みだった。

(うん。わかった。アクトは…幸せなんだね)

女の人は優しく子供を抱きかかえると、立ち上がった。

(アクトのお墓を一緒に作ってあげましょうね…)

(……………)

ガッシャン。

何かが割れる音がした。

時刻は夜半過ぎ。双子月がぼんやりとした日だった。

人影はゴソゴソと辺りを探り、必要な物を何かの袋に詰めていた。

やがてしばらくすると、誰にも気が付かれ無いように静かに外へ出てドアを閉めた。

そして物置へ行くと、弓矢を一つ、矢筒を何個か手に取った。

その人影は、また辺りを探り何か手に取った。そして物置小屋を出ると外へと駆け出した。

一度も振り返らなかった。

アクト……? ?

なんだろう? 夢だろうか。

でもどこか懐かしい… たぶん、とても大切な……

あの微笑み、あれは……

(……………)

…誰かが、思考を邪魔してる…?

「起きろ」

そこでシアンははっと目を開けた。目を開けて驚いた。

辺りは真っ暗だった。いつのまにか眠ってしまったらしい。驚いた

のは、この暗い中人影があつた事である。

「…ティアさん？」

少し掠れていたが、声は出た。

「早く出かける用意して。誰も起きて来ないうちに」

シアンは暗くて良く見えない姿を探した。

「え？そんな事言つてもこんな時間に何処へ…」

その時、少しの光が目についた。それは夜光虫だった。

その光を頼りにティアはここに来たらしい。立ち上がると、シアンは訳の分からぬまま、用意し始めた。

そこで我に返る。

「…どうして、ティアさんがここに？」

相変わらず間の抜けた少年である。ティアはそれに構っている暇は無かった。

「いいから、早く用意を」

シアンは用意をし終えると、立ち上がった。

「どこへ行くんです？」

しかし、ティアは黙つたまま先に外に飛び出した。シアンもつられて外へと出た。

そして、その夜。エルフ族の娘とアドリブルの森に来た風の民の少年は、エルフの村からいなくなった。まるで、脱兎の如く……

2・彷徨

湖の真ん中に建つ月神殿。歩いて入るなら湖の辺にある掛け橋を使うしか手は無い。静かなこの場所は小動物たちも憩いに来る。

時に肉食動物が来る事もあるが、ここでは食物連鎖の鎖も関係ない。すべての動物に安らぎを与えるこの場所はとても神秘的だ。

日が空にある時も、建物内は静かでひっそりとしていた。

湖に反射したソウエルの光に、眩しそうに目を細めながら歩いているのはこの神殿に仕える巫女だ。

今は太陽の光に構っていられなかった。急ぎ足で月神の居る部屋へと急ぐ。

神台の前では一人の月の民が手を組んで祈りを捧げていた。ドアを開けて入ってきた者に目をくれることもなく一心に手を合わせている。

「司様」

巫女はうやうやしく礼をし、神台に歩み寄った。

「予言通り、エルフ族の娘と風の民の者が村から消息を断ちました」
そこで月神と呼ばれた者は顔をあげた。

「そうですか」

立ち上がり、今入ってきた巫女を見る。

「やはり、予言は外れていませんでしたね。月の導きは必ず…いいえ、今更何を言っても始まりません。それでエルフの者達は追っ手を？」

「はい。そのように申しておりました」

月神は祭壇に祭つてある月神像げっしんを見上げた。

「どうか、月の導きにあいます様に…」

「少し向こうに川がありました」

シアンがそう言った。

声を掛けられたティアは顔をあげた。

「そうか。すまないシアン」

そう言ったきり、口を閉ざした。立ち上がると切り株にのせていた荷物を手に持った。

フードをはずしていたため、見事な鮮やかな赤い髪が太陽のソウエルの光に当たって反射した。深い色のアメジスト紫水晶の瞳も赤い髪に引けを取る事は無かった。むしろ、彼女の美しさを引き立たせている。

「いいえ。僕に出来ることがあつたら何でもおっしゃってください」

ティアはシアンにあぜやかに微笑みかけ、髪を一つに纏めた。

シアンは少し顔を赤らめながら先を歩いて行った。

川の辺に來ると、荷物を降ろした。水の中に手を入れ、それをすくった。飲める事を確認すると飲み始めた。それぞれに、喉を潤すと、腰に下げていた皮袋に水を入れ始めた。

「……………」

シアンは今迷っていた。

どうしてティアはあの村を出てきたのだろう。自分だけならともかく、どうして族長の娘のティアが…

実は、シアンはまだ何も尋ねていなかった。聞く事が憚れたし、向こうから話してくれるのを待ってもいた。しかし、これ以上鵜呑みにする訳にはいかない。

皮袋の蓋をぎゅっと閉めると、

「あのう……………」

とうとう切り出した。

「何だ？」

「どうして村を出たんですか」

沈黙になった。

「……………」

ティアは皮袋の蓋を閉めると立ち上がった。そして、すたすたと歩

き出した。シアンも慌てて後を追った。

「あ、あのう……」

やっと追いつくとティアは立ち止まった。

「…そなた」

「…え」

「シアン。そなたはあの村にはずっと居られない」

「…?」

シアンはティアの言いたい事が分からなかった。

「…実は、私も村から出るように予言されていたのだ」

「…!」

そこで、ティアは振り返った。

「どうして…別に予言されていたとはいえ、あなたまで村を出る必要はなかったはず…」

「……」

シアンは驚いていた。言葉が途切れ途切れなのも分かった。

「シアン。私の村はこのままじゃいずれ滅びる事になる。外からの物資を頼りにする事もできない。それに…」

「それに?」

ティアは首から掛けていた物を、シアンに手渡した。

「これは…」

(似てる)

と、最初にシアンはそう思った。

自分が持っている物に形が似ていたのだ。あの時は大勢の人に囲まれていたのと、遠目であまりよく見えなかったので、どんな形でどんな色なのかという事まで分からなかった。

「それは風のイエーラ。風を司る…ティードン神の象徴。それがザガズ神の上に落ちてきた。その意味がわかるか」

シアンは首を横に振った。

「ザガズ神は一日を象徴する神。その神に風のイエーラ…そしてシアン」

「え？は、はい」

いきなり名前を言われて驚いたシアンにかまわず、ティアは話を続けた。

「風の民、最後の生き残り。伝説ではない。やはり事実なのだ」

(…?)

シアンは益々訳が分からなかった。

「世界に何かが起きようとしているのだ…それも世界を動かすほどの。人間達はまだ何も気づいていない。感じている者は動物達のように敏感な者達だけ。今、世界は崩壊へと向かっている。風の民が滅ぼされたのも一つの表れ」

そうか、だからエアドアスの森も食料が無くなっていつてるのか。シアンはそう思いついた。

ティアはシアンから風のイエーラを受け取ると、首にぶら下げた。

「異端の者ほど、廃絶されていくのだ…我々も廃絶されていく…」
風の民を滅ぼされたシアンにはその気持ち痛みほど分かった。

「…だから、私は村を出た。我々が世界が滅ぼされて黙って見ている訳にもいかない。最初は種の存続だけだったが…シアン、世界はそなたを必要としている」

「…え？」

シアンは意味がよく分からず、瞬きをした。自分の耳を疑った。

「残された希望…」

(……)

シアンは目を開いたまま、固まった。

「…シアン？」

ティアがシアンの目の前で手をひらひらさせると、シアンははっと我に返った。

「しっかりしてよね。世界の救世主なんだから」

「何で口調、そんな風になったんですか」

「え、私？」

「…あなたしかいませんよ」

がさがさと膝の丈ぐらいまである草を歩きにくそうにしながらシアンはティアを睨むように言う。

「…あれね、父がうるさいの。次の族長なんだから、態度から変えなさいって。私はあんな喋り方好きじゃないから今すごい開放されているって感じが…」

「それより！」

シアンは言葉をさえぎった。

「…なに？」

ティアが不満げに言った。

「僕、知りませんでした。あなたが僕と年がそんなにかわらないなんて…ずっと、年上だと思っていたし…それに何よりも」

シアンは震えていた。悲しいのではない。

「僕が救世主って何ですか？」

そう言い、肩で息をした。

「だから、さつき言った事よ」

あっさり言われて、シアンはショックを受けた。

(そんな…)

ふらりと、よろけると木にもたれかかった。

…本当？…そんなわけじゃないですね。僕が世界を救うなんて

(確か、ティアさん一緒にエアドラスの森から逃げたんだっただからそれはただの建前かも…)

シアンはぎゅっと目を閉じると、立ち上がった。ティアの言った事は本当なのだろうか？

次の日、シアンが目を覚ますと体のあちこちが痛かった。

空の向こうが白みかけている。隣を見るとティアがいた場所は空だった。どこにいったのだろう。と辺りを見回すと、

「起きたの？今、起こそうと思ってたところだったの」
後ろから声がした。

「おはようございます。朝、お早いですね」

「ええ。なんか身に付いちゃって」

シアンは袋から小さな布を取り出すと、ついでに乾燥食品を取り出した。

「朝食を食べる前に顔を洗ってきたら？向こうで洗える」

シアンは、川のふちに腰を屈めると、清い水の中に手を入れた。

(これで、何日目だろう…)

毎回、毎回同じ夢を見る。

どこにいても。

エルフ達の村にいた時だって。

何度夜中に目が覚めただろう。何度、夜中にうなされたらうか。

(何なんだ？ 一体、何故同じ夢を何度も何度も…)

頭が痛くなる。咽がひりひりする。頭が割れるかと、思った。

記憶をなくしたのは、なぜなのだろう… 記憶が無くなったのは何か思い出してはいけないことがあるから？

思い出せない。何もかも。

戻ってみると、ティアは朝食の用意をしていた。

「あ、あのう…」

ティアはああ、と気づいたように言った。

「火があるし、せつかくだから料理しちゃった」

見ると、焚き火の上に覆い被さるように石が置いてあり、その上に何か麦でできたような、薄く引き延ばしたような物が乗っていた。

「あんまりした事ないけど…でも、食べれない事は無いと思う。私はこの程度しか作れないから」

そう言うと、照れたみたいに笑った。シアンはそれを受け取ると、手に持った。

「いただきます……」

本当はすごく心配だったのだ。あまり料理をした事が無いと聞いて、それに、

(少し焦げてる…)

だけど、ここで食べなきゃ、一生顔をあわせられない。かも知れない。怒ると怖そうだし…

シアンは思いきって齧ってみた。

すると、香ばしい木の実が口の中一杯に広がった。この平麵みたいなのだって、弾力があってとても美味しかった。

そこでシアンははつとした。ティアがじつと見ていたのである。

「あ、あのすごく美味しいです。どうやって作ったんですか？」

するとティアは照れたようにはにかみながら、答えた。

「それはね、エルフ族直伝の作り方だから教えられないんだけど、アカチヤの実を入れるとすごく生地が柔らかくなるの。あんまり自信なかったからそう言ってくれとすごく嬉しい」

満面の笑顔でティアはこの上なく幸せそうだった。まるで料理を作る事を生きがいにもしてるみたいだ。

こんな事が無ければお互いにこうやって同じ物をあの村で食べていたかもしれない。偶然の出会いだけど、友達としていられたかもしれない。

旅なんか出なければ良かった。

欲を言えば、あの村に今もいたかった。

何度か低い丘を越え、木々が遮っている所を通り、山々の谷間を通っていくと、段々と森が少なくなってくる。

脱走してから6日目の朝だった。

さすが、辺境の地だけあって、この森には目に見えない色々な仕掛けが施されていた。ティアがいなければ一日ともたずに野垂れ死になっただろう。族長の娘という事だけあって、殆どどの仕掛けを覚えているんだそうだ。

「新しいのとか、増えたのとかは解らないけれど、殆んど皆同じよ
うなパターンなの。だいたい場所が分かれば後はそれを解いていく
の。それにこの辺りじゃ少なくなってきたいるしね」

「でも、それは魔動でできているのですのよね？解いてしまつと僕
達の居場所まで、分かつてしまつのでは？」

「うん…もちろん。でもそうしないと、余計に捉まってしまうの」
「…」

ティアは翳していた手を下ろすと、うな垂れた。

「…でも、こんなのでは種の絶滅は免れない」

「……」

その時ふと、シアンは思った。

ティアは、あの村から出たことが無いと言っていた。じゃあ、もう
戻ることは無いのだろうか？

もしかしたらそういう掟があつたかもしれないし、決められたこと
を破るのは罪になるかもしれない。

じゃあ、ティアは…

ティアは一族に戻れないことを覚悟で、この旅にでたというのか？
見えない敵を求めて。

（一体何なんだ？敵って）

人間なのか？それとも悪魔なのか。

これは神様が、決められたことなのか。異物は地に環れと…
どうして、滅んだんだ？

親も…いたのか、顔さえ思い出せない。

その前に、思い出さないほうがいいんだろうか。種族を滅ぼされた
ことなど、忘れてしまった方が…

ティアは今、どう思っているんだろうか。

恐いだろう。恐怖し、不安でたまらない。

自分は…自分の大切なものを全て失ってしまつて、何もかも無くし
て。記憶をなくし、恐怖から目を逸らして。

（でも、これは）

逃げている。現実を認めたくなくて。

自分の心は弱い。なぜ、こんなにも弱いんだろう。すぐに、逃げようとする。

記憶がなくても、以前の自分はこんな感じだったのだろう。

いつも人の顔をうかがって、自分から行動しようとしないう。いつも何かにおびえていて…

「…ン」

そこで、はっとした。

顔を上げると、ティアが心配そうに見ていた。

「ごめんなさい…早く行きましようか」

「シアン…私、思うんだけどシアンはその、一族が滅びたのを認めたくなくて記憶をなくしたんでしょ？」

「……」

「何もかも…大切なものや、いろんな人たち…親や兄弟や恋人のこと…楽しかった分、慈しんだ分、無くした時がどんなに恐いか私にはわからない。お父さんは厳しいけど、いつも笑っていてくれたし、お母さんもとても大切だし。ティンだって大好きな弟よ。でも…もしかしたら明日、いや、今すぐにもなくなってしまうかもしれない。今、こうしているうちにも、エルフ達が、すべて消えてしまうなんて…私も、同じかもしれない。シアンみたいに記憶をなくして逃げ出すかもしれない。失った時のことなんて…」

それ以上、言葉は続かなかった。

ティアがこんな弱音を吐いたのは初めてだ。それほど、追いつめられているのだ。

「ティ…」

その時、突風が吹いた。

「うわっ…？」

あたりの木々はざわざわと揺れ、木がしなった。

「何だ？」

その時、シアンの目の前に何か白い物が飛び込んできた。

(ぶつかる?)

シアンは、とつさに顔を庇ったが、何の衝撃もなかった。
気がつくと、風が止んでいた。

《その方…、風の民だな?》

(え?)

シアンは顔を上げると、目を見開いた。木の枝に止まっていたのは
白い大きな鷲だった。

それと同時に、シアンは心の中で思った。

(…見たことがある?)

何故か、落ち着かなくなり胸がざわざわとした。

白い大鷲…

「あなたは、もしや…」

ティアが同じく食い入るように鷲を見ていた。大鷲はティアの方を
見る。

《そなたは、エルフ族だな?…左様、そなたなら知っておろう。私
はこの地に生き、この世のものではないとして存在している、リー
ヴァンという者だ》

(この世であつて、この世ではないもの…?)
すると、白鷲は頭を突き出した。

《ふう…やっと、動いたのか。もっと行動を早くすべきだった。そ
うすれば、滅ばぬ種族も滅ばなかった…》

「……………」

「…お言葉ですが、リーヴァン様。そんな以前から世界に異変が起
きていると?今動いてもだめなのですか?」

じっ、とリーヴァンはティアを見た

《…遅い。何もかも遅すぎた。今、世界は動いている。悪いほうに
な。…そなたたち、これからどこへ向かうのだ?》

「まずは、ケ・アスクの町へ向かおうかと…」

《それから?》

「……………」

リーヴァンは目を閉じ、しばらくしてから口を開いた。

《北を目指せ。すべてはそこから始まっている。そして…すべての終わり。風の民よ》

「は、はい？」

《記憶の中に、秘められた力が封じられている。…おそらく、何かを発動させないようにするためだな。私にはわからん。一体何なのかはな…すべては、北の地へ…》

最後のほうは、つぶやきに近い声で、かすかに聞き取れた。

（発動？何が…）

一体、何を封じられているというのか。記憶の中に。

《…エルフの娘よ。あなたは…この森から出で、世界に何が起るのを見届ける覚悟はあるか？すべてを失っても》

「……リーヴァン様…」

《すべては、そなたを頼りにしている。風の民よ、そなたの記憶、過去…の中にすべての真実がある》

「」

シアンは、ぎゅっと目を閉じた。

《星は死ぬ。何かしない限り。とにかく時間がない。風の民よ、北を目指せ。私は行かねばならぬ。また会う時には、力になれるようにしよう》

そういうや否やリーヴァンは、風を巻き起こし遥かなる高みへと消えるように飛んでいった。

「…北を目指せ、か。まったく、みんな勝手よね」

「……」

「さ、行くこう。あまりぐずぐずしてられないわ」

森を抜けると、なだらかな丘陵が続いた。

この辺を抜けるとき、急ぎ足で抜けた。あたりには木陰は無かった。ティアは、黙りながら先を歩いている。シアンは声をかけるのが躊躇われ、何も言えずじまいだった。

やがて、木の群生している場所にたどり着き、ひとまずゆっくりと歩くことにした。

もうすぐ日が沈もうとしていた。草原が茜色に染まって、まるで燃えているみたいだ。手をかざし、太陽を見た。

（この光景、どこかで…）

かすかに覚えている。以前にもこんな、こんな場所を見たことがある…あれは、何処だったのだろうか。

草原が、赤く燃え…

「シアン！」

呼びかけられて、シアンははっとした。見ると、ティアが遠くからシアンを呼んでいた。

シアンは慌てて、ティアの後を追った。

「つまり、それはシアンの記憶が戻れば全て解決ってわけでしょう？」

「さあ。僕にはどうなるやら…」

「ちょっと！しっかりしてよ」

ティアは慌てて、声をひそめた。

「…じゃあ、今すぐに思い出せたとしたら後は北を目指すだけではないんでしょ？でも、北へ行つてすべて思い出さなかったらどうなるの？」

「……」

ティアは、ため息をついた。

「今こうやって、押し問答していてもだめね。時間の無駄だわ。とにかく寝ましょ」

「…ええ」

しかし、横になってもシアンはなかなか寝付けなかった。ティアの言った言葉がどうしても気になって仕方なかった。

（北の大地…）

ティアにも、そこには何かがあるのか知らないのだと言う。いくら託

宣を受けようとも、何も分からなかったそうだ。

(怖い…)

シアンは震えた。

(すべての記憶を取り戻したら、僕は…)

もう、ぼくではなくなるかも知れない。無理に記憶が戻ってきて、忘れたかった事まで思い出してしまつて自分が壊れてしまつかもしれない。もう二度と自分ではなくなってしまうかもしれない。

(そんなの思い出さないほうがいい)

世界がどうなるかと知るものか。

なぜ、僕にかける？なぜ、みんな僕を求めている？風の民の末裔だから？最後の生き残りだから？

いったい、僕になにが出来るんだ？
がさつ。

不意に聞こえた物音にシアンは顔をあげる。

始めは風かと思った。しかし、物音は少しずつ近づいてくるように感じる。

「ティアさん…」

声はほとんど呟きに近かったがそれで十分だった。

「来た…みたいね。早く用意して」

地上に注ぐ双子月は雲に隠されていて、光は自分の手がかるうじて見えるくらいだった。

(次の月が出てくるまで…)

「シアン、こつち」

ひそひそとした声が、気づかれないようにと祈りながらわずかな光を頼りにして、闇の中を滑るように走り出した。

足音がすぐ後ろに聞こえるような気がして、何度も振り向きそうになった。

いや、実際には聞こえていたかも知れない。何もかもが闇の中で先が見えなかった。シアンはふと、心の中に疑問を浮かべた。

何故か、似ていると思った。自分の今の状況が。どこかでこの恐怖を覚えた事がある。あれは一体、何だったのだろうか…？

突然、森を抜けた。

もう完全に森を抜けたらしい。辺りにはなだらかな丘陵が続くばかりで、影は無かった。

「シアン、早く」

ティアが促すと、シアンは草を踏みしだいた。木影の無い薄明かりを隠れるように。

「何とか、逃げ切ったみたいね」

喘ぎながらティアは汗を拭った。

「そう、みたいです」

辺りには何も影になるような物は無かった。ここにいれば、見つかるかもしれないが一番安全な場所でもあった。

「…前々から思っていたんですけど、どうしてこんな隠れながら移動するんですか？」

「……」

「追っ手だつて…一体、何なのですか」

「……」

ティアは口を開こうとはしない。

「ティアさん」

少し声を荒げてシアンは急ぎ立てた。

月が隠れる。雲が光を覆ったのだ。緑色のものが外套を通して触れる。風が吹くと、微かに葉が擦り外套も強い風に吹かれた。

白銀の髪が風になびく。それは夢物語のような淡いものみたいで胸を締め付けた。

ティアはしばらくじっと見つめてから、口を開いた。

「…私は、あの村にいて幸せだった。あの村を出るまでそんな事を考えもしなかった。家族、家、そして村人…昔から言われ続けていた。『お前は、この村をやがては引き継ぐ。だから、お前はお前が

大切だと思つたものを守れ』最初は、それが当たり前だと思つていた。大切なものは全てだと思つてた。自分を囲む全ての人々…その人たちを守つていくのは自分だと」

「ティアさん……」

「だけど、あの時、風の民が滅ぶと月神に告げられた時、私は正直言つてどうでも良かった。何故なら、次に滅ぶべきなのは自分たちなのだと思つたから。異端のものが滅ぶべきなのだ。隠れるように、人々の目から逃げるように生きていて何になる？なぜ、それで生きていけるといふの。しかし……」

その時、ざわめいていた風が変わつた。下から吹き抜けるように、まるで風に意思があるかのように暴れ出した。

「これは……」

草が飛び、風が哭く。雲の動きが早くなり、光が出てくる。地上に降りていた光がわずかだったのが、辺りの物が見えるほど明るくなつた。

「シアン…これは……」

しかし、シアンは視線を虚空に向けていた。

「呼んでいる…？え、間違い？」

何かを呟き、視線を彷徨わせる。

その時、風が収まつた。何も無かつたかのようにあたりは静かになる。双子月もまた雲に隠れた。

「一体何だったの、今の……」

まだ状況が良く飲み込めず、呆然としているティアの声など耳に入る様子もなくシアンは思考を巡らしていた。あきらかに自然の風とは違つた。自然になるはずがない。あんな意思があるような風なんて。

「シアン、ねえ何なの？今は」

「……」

しかし、一向に喋る様子は無い。

「シアンてば」

シアンはふと我に返ったようにティアを見る。

「どうしたんですか、ティアさん」

「どうしたんですか、じゃ無いでしょう？話し掛けても何の反応もないから、立ったまま寝てたのかと思ったじゃない！」

「すみません。ティアさん」

そこでティアはシアンの様子がいいつもと違う事に気がついた。

「そういえば。シアンは風の民だったわね。何もそんな事億尾にも出さなかったから忘れていたけど。今のってやっぱり……」

「……確かに僕は風の民です。伝説の通りだとすれば。だけど、僕は何も思い出せない……今の声だって……」

「声？なんの」

しかし、シアンは構わず続ける。

「僕は、自分の事だけで精一杯なのにどうしたら他の人々を救えるんだ？無理だ……」

「シアン？」

「風が嘘をつくはずが無い……」

「……え！？シアン？」

最後に聞いたのはティアの声だった気がする……

3・標雪

「猛き山」の名のとおりハスベルク山は来るものを拒む、と云われていた。

標高は差ほど高いわけでもなく、他の山々と比べればたいして変わらない様に見える。が、しかし一歩足を踏み入れるとそこはまるでこの世の行き着く果てのようにすっかり様変わりする。

地面が所々脆くなっている所もあり、崖が多く人間が足を踏み入れるのは、それは死を意味する。

しかし、その山には人ならぬ者が住んでいると真と密かにそう、囁かれていた。

「セクターー！」

子供のようなその独特な声に、声を掛けられた本人は振り向こうとはしなかった。

「…」

セクト、と呼ばれた者は妖精族の者だ。薄羽蜻蛉のような羽がある。

「セクト、なんでそんな木の上にいるんだよー！」

ピィピィ。

セクトの目の前には狐鷲の雛鳥が餌を欲しがって口を開けている。

セクトはいつもこの辺を遊んでいたので、狐鷲の親がいない間をぬって雛鳥を見にきていたのだ。雛鳥のほうは何も知らず、ただ餌を求めている。

「おーいつセクターー聞いているのかー？」

自分だつて上まで飛んでこれるくせに、こないのは狐鷲の親鳥を怖がっているからである。

「風が変わった…？」

「ねえ、オラクル。もう戻りましょうよ」

「そうだな」

しかしオラクルは動かない。茶色の瞳の女の子は相手の反応に諦めてため息をついた。相手は朝からずっとこんな調子なのである。

話し掛けてもずっと上の空で、何を言っても「ああ」とか「うん」とか生半可な返事しかない。付き合いの長い、相手の性格をいくらか知っているアマベルとしては、オラクルに反応を求めたほうが馬鹿だと思った。

やれやれ、と腰を落としたアマベルは辺りを見まわした。自分達が居るのは、木立がまばらに植えられている町から少し離れた小高い丘の上だった。

なぜここにいるのかと言うと、オラクルがいきなり「風が…」と言いつらフラフラとここへ来て、そしてここに座っているからである。

アマベルはそんなオラクルをほっとく訳にもいかずこうやって着いて来たのだ。

（こんなのほってつたらどうなるか、分かったもんじゃないわ…）
太陽がオレンジ色に染まり始めても、オラクルには動く気配は無かった。

ただ、こうやって座っているだけだ。

（そろそろ、帰ろうかしら…）

そう、考え始めたときオラクルがいきなり立ち上がった。

「来た…」

何が？と聞く間もなく突然の突風に巻き込まれる。

（なに、これ……）

息苦しくなり、反射的にかばっていた腕の隙間からオラクルを見る。オラクルは何もせず、ただ立ち尽くしている。

「オ……………」

名を呼ぼうとして息が詰まった。と、突然に風がやんだ。また辺りは静かになった。

（なんだったの、今の…）

オラクルはただ目を見開いて「風の…」と呟いただけだった。

ぼんやりとした頭で、天井を見上げる。野宿ばかりだったから天井という物を見起きたのは何日ぶりかである。

(ここは…?)

頭を片手で押さえながら体を起こした。と、その時シーツに何か重みがあった。見ると、ティアの頭があった。シアンが体を起こしたから、赤い髪がシーツにこぼれた。

驚いて、思わずまじまじと見てしまった。端正な顔立ちが何だか幼く見える。ティアの寝顔を見たのは初めてのよような気がする。いつもこんな風に他人に安心したよような顔を見せている所を、シアンは見たことが無かった。

いつも、キリキリとしたあの表情しか知らない。本当に笑っているところでさえ…

「起きたの？」

突然声をかけられ、シアンは我に返ると驚いた。少し開いたドアから入ってきたのは妖精族の子供だった。

「そのおねえちゃん、すっげー心配そうだったよ…にーちゃん？」

ティアが言っていた。妖精族もまた人ならぬ場所に住んでいて妖精には羽が生えていて飛翔する事ができると。確かにその子には、薄羽蜻蛉のような羽が生えていた。

そこでシアンは自分の手がティアの頭にのせている事に気づき、慌てて引つ込めた。思わず頬が赤くなる。

ずっと、そばに…?

「ねえ、君って妖精だよ。なんで僕はここにいるのかな」

「…驚いた」

「え？」

おいらたち

「妖精族のことしらねーのは人間だけだと思ってた」

シアンは訳が分からず、眼を瞬たかせた。

「…だって！そんな白銀の髪の間人、聞いた事無いよ。兄ちゃんてやっぱり…」

「…風の民よ。それがどうかしたの？」

突然聞こえた声にシアンは内心動揺していた。

「ティアさん、起きてたんですか？」

「ううん。今、目覚めたところ」

ティアは顔をあげると、

「シアン。あの子にお礼を言わなきゃ。シアンが倒れてから私達を連れてきてくれたのはあの子なの」

シアンは妖精の子へと視線を戻した。

「ありがとう、僕たちを助けてくれたのですね。お礼が遅れてしまいました」

「いや、いいよ。君らもゆっくりしたいだろうし、何もそんなに急ぐ事も無いだろう。そんなに気兼ねすること無いよ」

見るといつの間にか、妖精の子の親が部屋に入ってきた。シアンは慌てて立ち上がろうとしたが、妖精の子の親が押し止めた。

「見ての通り、私達は妖精だ。私はクリオス。こちらは妻のアーリ。この子は私たちの子のセクトだ」

アーリが頭を下げた。シアンも下げる。

「僕は、風の民のシアンです。助けていただいてありがとうございます。僕達は…」

シアンはそこまで言ってから何と云えばいいのか解らなくなった。まさか世界を救うたびをしています。何て言えない。

「私はティアです。私たちはあの森でワダツキナを探りに行こうと思っていました」

薬草の名をティアは口にした。ワダツキナは効力が高く、滅多に採れない珍種である。

「…あの辺りにはワダツキナは生えていないよ。時期も少しずれているしね。採るのなら時期が少しはやくないと。エルフ族長の娘、ティアちゃん」

ティアはきつとクリオスを睨みつけた。

「エルフ族って言うのは隠せないものだよ」

「私達をどうするつもりですか？ エルフ達に言いますか」

「そうだと言ったら？」

「……」

二人は睨みあったまま動かない。

クリオスは一つ息をつくとき、表情を変えた。

「……言わないよ。世界を救う旅だからね。そんなの妨害できないよ」

「……」

「本当さ。私達にできることならなんでもする所だ」

そこで、ティアは表情を緩めた。

「……解りました。助けていただきありがとうございます。でも私達は急がなければなりません。お礼は必ずこの旅が終わった後に……」

「君達、今から次の町へ向かうと言ってもあと4日以上は森の中を歩かなければならない。それでもいいのかい？」

「ティアさん」

ずっと心配そうに見ていたセクトは期待と羨望の眼差しでティアを見つめる。ティアは躊躇っていたが、

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

すると、「やったー！」セクトが大喜びし、クリオスに怒られた。

狭い世界しか知らなかったセクトにとってはティアの話す言葉を夢でも見ているような気持で熱心に聞いていた。ティアはあまり話すのは得意なほうではなかったが、セクトがあまりにも夢中になってきいてくるので、ついつい答えてしまっていた。

クリオスに早く寝なさい、といわれるまでセクトはずっとシアンたちへべつたりだった。

「子供はどうしてあんなに聞きたがるの？ そんなにおもしろい話だったかしら」

「……こんな狭い世界にいてもつまらないんだと思います。あの子には、羽がありますから……」

「……」

「……………」

沈黙が続いた。

「シアン」

「ティアさん」

声が重なった。

「……………」

「……………」

そこでティアがため息をついた。

「いいわ。私から言うわ。あの風はいったい何だったの？」

「…僕にも分かりません。ただ、あの風から声が聞こえたんです」

「声？」

「ええ。最初はいろいろ混じっていてよく聞こえなかったけれど、中に強い、声があつて“呼んでる”とか”すべてが間違い“…とか。それだけ、はつきりと」

「呼んでいる…？」

「さあ、僕にもさっぱり」

ティアが考え込んでいたが、ふと

「風が風の民を呼んだ…？」

そう洩らした。

「でも、間違いとは何でしょう？」

二人とも黙り込んだ。

月の光が部屋の中まで入ってくる。外は静かだった。

夜風に吹かれて、草草が音を鳴らす。それ以外は何も聞こえない。

シアンは見えない風を見つめた。

(誰よりも自由な風が泣いている…)

シアンにはそう見える。何も変わらない風は、なにも表していないように見える。だけど、シアンには分かるのだ。

風が怯えているのを。

「どうして、ティアさんは村を出たんですか」

「え？」

シアンがティアの瞳をまっすぐに見つめた。清らかな水を称えたような水色の瞳が濃いアメジスト紫水晶を見る。

ティアはどきどきしながら、やっとの思いで視線を逸らす。アル・ヒイティアとラグ・ヒイティスの所為だろうか。シアンが別人のように見える。

「…私達の村の救済に出るため。だけど、私はあの村から出たかったのかも知れない。次の族長だからと言って、私を違う目で見ていたあの村から。幼いからそれが響いた。あの村は私を縛るための鎖でしかなかったのかも知れない… 私はあの村の子ではないのだ」
「……」

シアンはさして驚かなかった。薄々感じてもいた。

「父もあのティンも私の本当の家族ではない。父はも教えてくれなかった。私がそれに気がついたのは、物心ついてからだった」

ティアは気づいているだろうか。昔の事を話すと、口調が変わるのを。

「それで追っ手が」

ティアが何者なのかを知っている族長は、ティアを外に出すことを拒んだのだ。

「でも、月神の予言でいつ、という事は知らなかったのですか？」

「月神とて万能では無い。先の予言を見ることはできても、日にちを断定する事はできない。… 未来は変えることができるから…」

… 未来を変える …？

「なぜ、私を族長にしようとしているのかは解らない。本当の族長はいるのに」

ティアはその水晶のような瞳を伏せると、幼い弟の事を思った。

ティアは椅子から立ち上がると、シアンの瞳を見た。シアンの瞳は揺れていた。

「兄ちゃん、風の民でしょ？すっごーい。初めて見たわ」

「ねえねえ、風を呼べるって本当？見てみたーい」

「はねないのに空とべるなんていいな」

「あ、あの…」

シアンは妖精族の子供に囲まれて、うろたえていた。

「ありがとうございます。私たちを泊めてくださって。ご馳走までいただいてしまって、本当になんと言ったらよいものか…」

「いえ。私たちにできるのはこれぐらいです。どうかこの世界をお救いください」

「そんな…それに救うのは私ではなく… シアンです」

シアンのほうを見ながらティアは言った。シアンは子供たちに質問攻めにされている。

「では」

そう言っただけ立ち去ろうとしたティアに

「待って。これを持って行って」

アールが何か手渡した。それは布袋に包まれた食料などであった。

「え、でも」

「いいんです。私たちも世界が元に戻るように願っているんです。クリオスが請け負った。アールが柔らかく笑う。

「ありがとうございます…世界が元に戻るよう、努力します」
ティアは出そうになる涙を必死に堪えた。

妖精族の村人たちに見送られながら、シアンとティアは出発した。

「そういえば、セクトに会ってなかった。お礼を言いたかったのに」

「じゃあさ、お礼の変わりにおいらを連れて行ってよ」

突然声が聞こえたので、反射的に振り返った二人は驚く。

「セクト！」

声が重なった。

「にーちゃんとねーちゃん、息がぴったりだなー。恋人同士？」

シアンがティアと顔を見合わせた。

「にーちゃん、なに動揺してるの？」

「べ、別に僕は動揺なんか…」

「シアン！とにかく行くわよ」
ティアがシアンの腕を引っ張る。
「あっ どこ行くのー？」
「ねえ、シアン飛んでよ」
「ええ?!」
「風の民でしょ？飛んでよ！」
「僕、飛び方解りません。それにあの子だって空飛べますよ」
「じゃあどうやってあそこまで来たのよ？あの子より早く飛んだら何も問題無いでしょ？」
「んな…」
無茶な、と言いかけたシアンはティアに睨まれる。
「とにかく、やってみてよ」
「別にあの子がいてもいいじゃないですか？」
「あんなの、お荷物にしかならないじゃない」
「にーちゃん達、腕組んで恋人みたい」
ぎくつとした二人は慌てて腕を離す。
「セクト、お母さんが心配しているでしょう？早く帰らないと」
「お母さんにはもう言っておくよ」
そこで二人はまた顔を近づける。
「だから、言っただじゃないの。早くしてよ」
「僕、どうやって飛ぶのか知りませんが」
だんだん足早になる。
「普通に飛べばいいのよ。普通に」
「普通って…」
草がさがさいって耳に煩く響く。余計に苛々する。
「あんたを助けたのは誰よ？あのまま放ってたらあんた死んでしまつてたわよ。その私を助けてくれないわけ？」
「そんな事言われても…」
ティアは苛々と草を踏みしだく。
「男でしょ？はつきりしなさい」

「……………」

シアンは不満そうな顔をした。だけどティアはわざとそれを無視した。

いきなり立ち止まると、シアンを真正面から見ると。

「大丈夫。シアンなら飛べる…必ず。だって風の民でしょ？」

シアンはそれに意を決したようだ。

「わかりました。やってみます」

手を離すとティアは笑った。

「信じてるから」

「はい」

シアンはティアを抱き寄せると、走り出した。

「あーっ、待ってよー」

後ろからセクトの焦ったような声が聞こえて来た。

その時代には平安は一時の夢でしかなかった。

知る者は、異端と言われた者。愚鈍な者は、世界の理に合った者。

世界に異端者と言われた者が、敏感に世界の危機を感じていた。

事実は見えず、嘘は虚像でしかなかった。

人間達は何も知らず、危機など知らない。しかし、世界は確実に動いていた。神々でさえ、動きゆく世界に追いつけなかった。

「ねえ、何やってんの？」

後ろからセクトの声がする。気が付くと、足が地についてなかった。

眼下には木々が後ろへと流れるように見える。

(…………… 飛んでる!?)

シアンは驚きよりも感動を覚えた。

嬉しくて、思わず手を離しそうになった。が、手に抱いていた重みを感じ、あわてて抱えなおした。

一生懸命シアンにしがみついていたティアははっと下を見た。

「あの子は？」

シアンは後ろを振り返った。しかし、セクトはそれほど離れていなかった。

「なんであんなに速いのー?」

「違います僕らが遅いんです」

風のせいで、耳が聞こえにくく、叫ばないと聞こえない。

余裕つばいセクトに対し、シアンは必死だった。

「お、重い……」

「失礼ね!! 私はそのなりに重くないわよ!」

「……………」

自分一人だけで精一杯なのに、ティアまでいると……

(落ちるな。間違いない)

だが、記憶を失くしてから初めて飛ぶにしては、できた方だと思う。と、シアンは思った。

(どこかで、こんな事が……?)

頭で覚えていなくても、体が覚えているのだ。自分が、風の民なのだを知る。

「シアン!!」

ティアの声に我にかえった。

「……もうすぐ海!!」

目の前には、空と同じような限りなく広がる広大な海があった。

(もう、だめだ……)

シアンはほとんど墜落に近い形で落ちた。

「シアン」

誰かに名前を呼ばれた。目を開けるとティアがシアンの顔を覗き込んでいた。

「ティアさん」

シアンは、ボツィとする頭を振った。

「にーちゃん、やっぱり空飛べるんだー。いいなー羽根なしで飛べてー」

セクトの声がする。シアンは思い出した。と、いきなりティアに腕を引っ掴まれた。

「どうすんのよ!?!結局くっついてきちゃったじゃない!」

「そんな事言われても」

「ねーちゃんたち、やっぱり恋人なの?」

しかし、ティアとシアンは聞いてなかった。

「もうすぐにも出発しましょう。海だから逃げるチャンスはあるはずよ」

「無理ですよ。体力が持ちません」

「ねえ」

ぎくつとした二人は、ゆっくり振り向く。

「ねえ、早く行こうよ。おいら待ちくたびれた」

シアンは慌てて、

「ティアさん、もういいんじゃないですか?ほら、もう戻りにくいだろうし…」

「何言ってるのよ?私は嫌よ!」

ティアは、まだ諦めない。

シアンはため息をついた。

「いいじゃないですか、ティアさん。あの子は妖精族だし、色々役に立つかもしれせんし」

そう言うと、にっこりと笑う。ティアは、シアンの人を疑わない性格を呪った。

「どうなっても知らないからね!」

泣きそうになるのを堪える。ティアのそんな態度に驚きながらシアンはまた、ため息をついた。

「じゃあ、早く行こうよー」

勝手にセクトが決める。

日はちょうど真上にある。さすがにこのまま海を越えていくわけにもいかず、近くの村へ行くことにした。

セクトが言うには、この辺には妖精族の村以外ないが「猛き山」ハリスベク山の向こうには小さな集落があるという。

「でも、おいらも聞いたただだよ。本当にあるか知らないよ」

歩いて、6日で山の麓。飛ぶなら1日ぐらいか…

「つ、つらい…」

ついつい口をついて出た言葉に、ティアに睨まれる。

「今からなら明日の朝になる前にいけるわ。さっそく行きましょう」

「だけど…」

シアンは、行きたくなさそうに口ごもる。

「こんな所にいたいのか？シアン。このままだと野宿になるわよ？」

「……………」

これには、さすがにシアンも従うしかなかった。

人を寄せつけない場所として知られる、ア・マデイス島は、地図にもならない小さな島で、縹珊瑚に囲まれていた。それに絶壁に囲まれ、空を飛んでゆくもの以外入るのさえ困難な場所だった。

(あの海の向こうに…)

夢がある。そして悪夢も。

波の音がして、かすかに海独特の匂いがする。

立ち上がると、草が音をたてた。木々が風に揺れる。一見、穏やかに見えるそれらは、何も無いように見える。

しかし、それらは敏感に感じ取っている。世界の危機を。それに小動物の物音さえしない。まるで眠っているかのような。森が死んだように静まり変えている。波の音がやけに大きく聞こえる。

(……………)

シアンは目を閉じた。しばらくしてから目を開くと、先にいったティアとセクトを追いかけた。

そこは村というより、さびれた廃墟だった。

三人は呆然と立ち尽くしてしまった。

「……………」

風に吹かれて汚れた布切れが飛ぶ。

「どこが村なのよ……」

セクトはギクツとして、

「だっ、だっっておいら聞いたただけだもん。おいらここがどうなっているかなんて知らねーもん」

しどろもどろそう答えた。

シアンはただ立ち尽くして、周りを見まわした。

「……」

ティアがそれに気づき声をかけた。

「どうしたの？シアン」

セクトも振り向く。

「にーちゃん？」

「…人間はこの辺にはいませんよね？」

その言葉にティアもセクトもはつとした。

「そっいえば……」

「風の民以外にも滅んだ種族が？」

セクトが「え？」という顔をした。

「滅んだのは、何年か前ぐらいね…一体、何の村だったのかしら？とにかく入ってみましょう」

さびれた村の中は、到底人など住んでいたとは思えなかった。

「…一体、何があつたのかしら？村一つ滅ぶほどの事なんて」

ティアが訝しみながら先頭を進む。次にシアン、飛びながらセクト、と続いた。

家の屋根が剥げ落ちたり、抜け落ちたりしていた。家の壁も所々穴が開いてたり、中には崩れ落ちているのもあつた。

「だいぶ昔みたいね。ここ最近のものじゃないわ……」

ここの種族たちは本当に滅びたのか？それとも村全体で移動をしたのだろうか。どちらにしる、この光景は見てて嫌な物だった。

「とにかく、休む所を探さないと」

そう言った時、セクトが

「あそこは？まだきれいなほうだと思っよ」

そう言っ指さした先にあつたのは、周りの廃墟と化した家々と比べ少し大きな家だつた。

崩れかけてはいたが、雨風を凌げるぐらいはあつた。

「ここなら大丈夫そうね。しばらく休めるわ」

そう言いながら先に入っていったティアは足をとめた。

「ティアさん？どうしたんですか？」

シアンが肩越しに尋ねる。

「あ、あれ……」

見ると、部屋の中央ぐらゐに何か人のような物が倒れている。

「あれは？」

シアンはそれに近づぐ。

「シアン！」

ティアが呼び止めようとした。

シアンは倒れていたものを起こそうとして、その手を止めた。

「にーちゃん？どうしたの？」

倒れていたのは、男性でまだ若年という感じがした。その顔はまだ生きていて、ただ眠っただけに見える。服装は珍しい物だつた。シアンは、手を組み合わせると、静かに祈りの印をきつた。

「これはもしかしてハンスー族……？そうか、ここはハンスー族の村だつたんだ」

セクトがまだ信じられないように言つた。

「ハンスー族？」

振り返らず、シアンは聞いた。

「よく昔話として聞かされた、あの種族……」

まだ呆然としている。

「昔話の種族？」

ティアはシアンの言葉など耳に入っていなかった。

「まさか、物語の種族が生きていたなんて……」

「……」

シアンは死体に視線を戻した。

外傷的な傷は見あたらなかったが、衣服がところどころ裂けていた。東方の衣装だろうか？似たような物を本で見たことがある。

ハンスー族？

「でも、この町がハンスー族のものだとは僕にはどうしても思えませんが。だって、町が滅びたのは、だいぶ前ですよね？」

「…確かに。そうね。町が滅びてからだいぶ経っているみたいだね。服がそれほど古びていない…」

「それをすぐに見抜くとはさすがだな。風の民よ」

突然家の中から声が聞こえた。

反射的に、顔を上げたシアンとティアは立ち上がった。

セクトがシアンにしがみついた。

「だ…誰？あの人」

シアンにも答えられず、ただ黙って男を睨みつける。男の放つ気が、何とも悪様に感じられる。尋常ではなかった。

殺意を感じる。

と、人さし指で、手を組んで横たわっているハンスー族の男を指さした。

「その男はエルフの女が言った通り、ハンスー族…だった男。すこし前に滅んだがな」

男の声は太く、地獄の底から響いてくるような声だった。

ティアが男を睨みつけながら、腰から短剣を引き抜く。シアンを庇うようにして立つと半歩前に出た。

「お前…人間だな？」

「え？」

思わずシアンが声をあげる。男は端に唇を寄せた。

「その通り…だが、それを知って何になる？」

男は少し離れているにもかかわらず、大きく見える。威圧感に押しやられてしまう。深くフードをかぶっていて顔は良く分からない。

セクトも驚き、思わずその男を見る。初めて見たものに驚きの色を隠せなかった。

「シアンを…どうするつもり？」

「ふん。そんな小物で私を殺そうというのか。憐れな…」

男はにやりと笑いながら言った。

ティアはそつとシアンに耳打ちした。

「私が奴を引きとめておくからセクトと一緒に逃げて」

「えっ」

そう言つと、ダツと駆け出した。

引きとめる間もなかった。

「セクトっ！」

後ろにしがみついていたセクトを外に放り投げる。

セクトは外へと転がり出、はずみで頭を打った。何が起きたのか一瞬解らず頭で理解するより早く、中で爆発が起こった。

顔をかばっていた男は、腕をおろした。

「逃げたか…」

しかし、声の調子は残念そうではなかった。

周りの物は、見るも無残な木々のはしくれだったものが所々落ちて
いる。日の光が木の柱だけとなった場所に降り注いだ。

しかし床に眠っている男には、今の衝撃でつけられたような傷はな
かった。

どうやら、とつさに防御印を結んだらしい。

「くくっ 封印を施してあるのにこれだけ使えるなんてな…」

男は歡喜していた。

「すぐには殺さぬよ…！」

そう言つと笑い声だけを残して、その場から消えた。

気が付くと、空に浮いていた。無我夢中でしたがみついていた。

「シアン…」

何と声をかけたものか解らず、そのまま黙る。昨日も夜通し飛び続けたのに、かなり無理をしている。荒い息づかいが不安にさせる。

だが、どれほど疲れきっていて、気を失っても風は主を地に叩き落とすことなど無い。だから前、気を失った時怪我などしなかったのだ。風の民は風に愛されし種族なのだ。風が傷つけることはない。セクトも黙ったきりだった。風の音が沈黙の代わりに流れる。すると、風が変わった。潮が混じった、柔らかな風に変わる。海が見えた。

ティアは慌てた。

「シアン！海が……！」

言葉はそれ以上続かなかつた。目の前に地上から突然現れた獣のような物に驚いたのだ。

ティアは短剣を構え直した。シアンがこのまま、突つ込むのは目に見えている。ティアの声さえ耳に入らない。

シアンが片手だけでティアを支え、右手を前につきだす。それより早く、人型に似た醜く爛れた獣が口から炎を吐く。

シアンはとっさに手を引つ込め、逃げようとした。だが、間に合わない。

炎が目の前まで迫る。

だが、炎とシアンの間には薄い壁みたいな物が現れた。その薄い壁は炎を受け止め、消失させると自らも消えた。

シアンは目を瞬たかせた。

「セクト……」

すると、セクトが腰に手をあて踏ん反り返えった。

「おいらだって、妖精のはしくれだい！」

シアンは緩みそうになった頬をはつとさせる。

「セクトっ 後ろ！」

だがセクトが後ろを振り返るよりも先に二度目の炎がセクトを襲った。シアンが印を結ぶより早く、炎がセクトを襲った。セクトは悲

鳴をあげながら落ちて行った。
眼下には絶壁がある。

(くっ…間に合わない!)

シアンは何とか両手で印を結ぶ。ティアに回された腕がきつくなっ
た。

だが、そうするより早くまた炎が吐かれた。

「シアン!」

ティアが叫んだが、間に合わなかった。

炎の直撃をもろに受け、シアンが気絶する。ティアは狙い定めて、
獣の目を狙い短剣を投げつけた。獣が奇妙な悲鳴をあげる。

シアンが、風に加護を受けられなくなった。しかしそれでも風がシ
アンを守ろうとする。

シアンは無意識のなかで、腕の力を強めた。

「…族長」

床に膝まずいたエルフ族の男は、族長の言葉を待った。しかし、ア
ゼンはなかなか口を開かない。

「……」

集まって来たエルフ達も憚って一様に押し黙っている。ドアの隙間
から風が漏れ出て音が鳴る。

「確かにティアは、この村より外の事を知らぬ。だからこそ秘密を
隠し通せた。しかし…やはり解るのであるうな。周りの態度が他と
違うことに。私はティアに外の世界を知ってほしくなかった…」

「族長」

「外の世界を知らなければ、自分の本当の事を知ることには無いのだ
からな」

アゼンは目を閉じ、ため息をついた。

「まあ、風の民があるから最初から連れ戻すのは無理だがな…とに
かく、我らも世界の理に従うしかない」

族長がそう言い終えると、木の枝に止まっていた白い鷹が飛び立つ

た。

深く、深く、落ちていくような気がする。感覚が分らないのに、何故か落ちていると分かる。何も聞こえず、何も見えない。ただ、空を飛ぶ感覚とは違う、淀みを感じていた。

「にーちゃん」

子供の声でした。

シアンは閉じていた目を開いた。

「セクト…？」

目を上に向けると、水が漂い、魚が泳いでいた。幻想的な世界……
そこで目まぐるしくシアンが回転した。

「え…ここは？」

そう言つと、勢いよく身を起こす。体が悲鳴をあげた。

「つ…つ」

声にならない声をあげる。

「にーちゃん！」

セクトが心配そうにシアンを気遣う。シアンは苦痛に顔を歪めながらも、笑って見せた。

「大丈夫だよ。それよりここは一体…」

「なんか海の底にいるみたい。おいらも良く分らないけれど」

そうセクトが言った所で、シアンは何があつたのか思い出した。

あの魔物に襲われて、海に落ちた…

「テイアさんは？どうしたんですか」

「わかんない…おいらも見えていない」

セクトはうな垂れた。

シアンは周りを見回した。辺りは日の光を吸収した砂で暗くない。

辺りには何も無い。果てしなく砂丘が続いている。

遠い所は、霞んで見える。頭の上では、海水が漂う。魚が幻想的に泳ぐ。

「助かった…？」

見ると足元には矢筒や、矢束などが散らばっていた。

「これ、ティアさんの…！」

皮袋も落ちていた。思わず辺りを見回してみたが、求めている姿はもちろん見えない。

「ティアさん！」

呼んでみたが返事はない。シアンは一抹の不安を感じた。

「にいちゃん、あれ！」

シアンはセクトの叫んだ方を見て目を見開いた。それは、幻想としか言いようの無い海の中に漂い、ゆつくりと流れていた。

（な、なんだ？）

セクトが飛べないからびよんびよん飛び跳ねながら言う。

「すっげー縹珊瑚の卵だ！。初めて見たーっ！」

どうやら、セクトにも聞いた事のある物らしい。

「縹珊瑚？」

「うん。じっちゃんに聞いたんだ！思ってたより、すっげー！」

セクトは目を輝かせて、嬉しそうに跳ねる。どうやら飛べたら取りに行こうかと考えているらしい。

シアンも思わず見とれた。波間に漂う縹珊瑚の卵はゆつくりと、泳ぐ。あれだけある卵も生き残るのは、わずか数個だという。だから、岩礁があるこの辺りに繁殖するのだろう。

その珊瑚はゆつくり静かに漂い、しまいには何処かへと降りる。まるで、それは……

（雪みたいだ…）

シアンには雪というものは知らないが、本に載っていた文献によると、雪は白かった。きつとこんな感じだろうか、と感じた。

縹珊瑚は、白ではなかったがまるで雪のようにゆつくりと降ってくるように、見えた。

縹色の、雪……

太陽のソウエルの光にあたって反射した。それは、小さな生命の輝

きだった。

「ほほう。空をゆく者がこんな地へ来るとは…珍しいこともあるものじゃ」

突然響いた声に、シアンは我に返った。

後ろを振り返ってみると、なんとセクトよりも背の低い老人がいた。ティアも一緒にいた。

どうやら移動の術を使って、現れたらしい。縹珊瑚に見とれていたシアンは気がつかなかった。

「ほっほ。今年はやけに多いのう。もしかすると風の民を歓迎しているのかもしれないのう。ほっほっほ。長生きはするものじゃ」

「じーちゃん、誰？」

シアンはセクトの存在を忘れていた。

「こらっ、セクトっ」

しかし、セクトは一向に構わず老人を見下ろしている。セクトの方が背が高いのでそうなってしまふのだ。

「かまわぬよ。私はアリバ・ハノクラじゃ。ここに住んではや60年くらいかの…ほっほっほ。風の民と、妖精の空去くもの達よ、よく来た。心から歓迎するぞい」

シアンはかがんで、老人と視線を合わす。

「アリバ・ハノクラさん…僕はシアンです。あなたが助けてくれたのですね？ありがとうございます」

「いやいや、わしは何もしとらんでの。助けたのはあの縹珊瑚達じゃ。おぬしさんらは運がいいのう。それとも運のお導きかの……」

シアンは目を瞬いた。よく意味が分からなかったのだ。

「とにかく、私の家に来てくれんかの。何かおもてなしをしたいの
でな」

4・忘却

「ほい、これでいいじゃろう」

「うわーい。じいちゃん、ありがとうー!!」

元の形に戻った羽根に大はしゃぎしているセクトを、アリバ・ハノクラは目を細めて見た。

アリバ・ハノクラにしてみれば、孫が喜んでいるみたいなのだろう。嬉しそうだった。

「ありがとうございます。ここまでしてくださるなんて…」

「ほっほっほっ。若いのが気にする事でないの。な〜に、こんな所滅多に誰も来ないからの。構わぬよ」

こぢんまりとしたその部屋は、いかにもこの小さな老人らしくムダなものが無かった。閑散としていて、寂しいといえば寂しい。

「老いていくと、いらんかった物も愛着が沸く…それが嫌いでの。いらぬ物はもう捨ててしまったんじゃ」

寂しいのは、ここにいる事ではない。忘れられていく事が何よりも辛いのだ。

「ほっほっ。わしを覚えているのなんて、あんまりいなかろうて。

こんなおいぼれを覚えていてくれるのは、物言わぬあの生き物たちじゃ」

「そんな…」

しかし、アリバ・ハノクラは目を細めて笑っただけだった。

ふかしていたパイプを口から離す。

「そなた達は、運がよかったのう。ちょうど産卵の時期に落ちて…いやはや、これも運命かもしれん」

シアンは、まだ漂い続ける縹珊瑚を見上げた。ガラス窓を透りこしに見えるそれらは、黒っぽく見えた。

アリバ・ハノクラの家は海の中の深い所にある。年中、海の中にあるものだから柱とか錆びるはずなのに、錆びているどころか、元の

形のままだった。これも魔法だろうか。
かなりの実力者とみえる。

(この人…)

「アリバ・ハノクラさんはどうしてこんな深い海の底に住んでいるのですか？」

アリバ・ハノクラは口から煙を吐いた。

海を泳ぐ魚が縹珊瑚を口に吸い込んだ。何の音もしない、とても静かな場所だった。ソウエルの光は優しく、こんな深い海の底まで光をなげかける。

ソウエルは総において等しい。

「……こんな深い所に住んでいるとな、自然と海に抱かれている気がするんじゃない。静かで、まるで自分が自分じゃないみたいで。それがたまらなく好きなんじゃ」

そういうと、皺を寄せて笑った。

(アリバ・ハノクラ…)

必ず、何かあるはずだ。あの老人は何か隠している。

(あの魔力…)

ただならぬものを感じる。

今晚はアリバ・ハノクラの好意で彼の家に泊まる事になった。

「…シアン、起きてる？」

夜、うとうととしてしているとティアが小さな声で呼んだ。

「ええ。…どうしたのですか？」

ティアが身を起こした。布の擦れる音がした。

「あの人…アリバ・ハノクラのこと、昔どこかで聞いた事があるのよ」

シアンはどきつとした。

「それ、本当ですか!？」

「うん」

セクトのうなる声が聞こえて、シアンは声が大きくなっていった事に

気が付いた。ティアがシアンを外へ出るように促した。

「たぶん、あの第5代世界暗黒時代の事だと思っの。前、話したでしよ？リ・アトティスがわずか14歳の少年に敗れたって」

「ええ」

「あの時、ケルヒスⅡアドロスⅡハーシユ8世がり・アトティスを敗ったのは、あの王子だけでなく、“アリバ・ハノクラ”という魔道師が助力してリ・アトティスを敗ったというの…確かそういう風に聞いた事があるわ」

「…！」

やはり、あの老人はただ者ではなかったのだ。

「なんで、そんな人がこんな所に…」

「それは、私にも分らないわ。それに私だって聞いただけで…もしかしたら」

「もしかしたら？」

ティアは顎にやっていた手をおろした。

「いいえ。…何でもないわ」

「ありがとございました。いろいろお世話になって」

「ほっほっほっ。構わぬ。…そなた達、がんばるのじゃぞ。世界の命運はお主たちにかかっておるんじや」

そう言って、握っていた手を離れた。何だか名残惜しかった。セクトなんか涙ぐみそうな顔をしている。

「では……」

「おお、少し待たれよ」

そう言うと、ポケットから縹珊瑚の卵を出した。

「それって…」

「ほっほ。悪いと思ったが、一つ欲しくての。失敬してきたんじや」
左掌にのせ、右手を翳した。右手から白い光が生じ、それが縹珊瑚の上に降り注ぐ。

次の瞬間には、縹珊瑚は違う形のものへと変形していた。

「すっげ…」

セクトが呆然としながらそれを凝視した。シアンも驚きながらそれを見つめた。

「ほっほっほ。エルフは空を飛べぬと聞いたのでな。これを使うといいじやろう。ただし、わしの魔力が持つのは海より向こうの大陸までじゃからの。気をつけるんじゃ」

それは、縹色の馬だった。いや、正確には馬の形をした縹珊瑚だった。

ティアはアリバ・ハノクラの手を取りエルフの礼をした。

「ありがとうございます…！」

それ以上言葉にならなかった。

「…では」

そう言うと、海を見据えた。風が集まってくるのが分る。

「気をつけてな…」

「はい、ありがとうございます」

後ろを振り返りながら手を振る。

あの地にはその昔、伝説とされていた種族たちがいたのじゃ。それを発見したのは、狡猾で残忍な奴らでの。その種族たちを見つけた奴らは、執拗にその種族たちを追い、とうとう死に至らしめた。村に火を放ち、抵抗するものを惨殺などして全滅に追い込ませた。そして、その種族たちは滅ぼされたと云われた……

それってまさか…

そうさな。わしの推論が正しければ……

「シアン！」

シアンは我に返った。

「な…何ですか？」

「前、ぶつかるよ！」

シアンは慌てて止まった。目の前には見上げるほどに大きな岩が海から突き出ていた。

「シアン何してるの？ 早くしないと日が暮れちゃうわよ」
ティアが叫んだ。

「あ…ごめんなさい。ちょっと考え事をしていました」
「どんな考え事だよ、にーちゃん。早くいこうよー。 おいら疲れ
たー」

「そうですね…」
そう言うとティアをちらりと見た。ティアは少し焦っているように見える。

(昨日のティアさんはどう思ったのでしょうか…)
何も思っていないはずは無い。自分自身に関わる事だから… アリ
バ・ハノクラは滅ぼした者達の事を知らないと言う。シアンの心臓
が早く脈打ち、言いようの無い不安に襲われた。

アリバ・ハノクラは何かを隠しているのだ。何なのかと訊ねられ
ば答えることはできないが、多分真実を黙っている。と、その時セ
クトが叫んだ。

シアンははっとしてセクトの方を振り返った。

「どうしました？」

セクトは前方を指差した。

「あ、あれ…」

心なしか声が震えていた。シアンもセクトの指さした方を見た。空
の遠方に無数の黒い塊が見えた。

(あれは…)

最初雨雲かと思った。しかし雨雲ではなかった。シアンが記憶して
いる限りは。その証拠にセクトも震えている。その黒い無数とも思
える影はとても速く、こちらに迫ってきていた。

「あれは この前の奴らかしら」

ティアがそう言った。セクトは泣きそうな顔をしていたが、構える。
ここは、海の上。隠れる事も逃げるところもない。海の…
そこで、シアンは叫んだ。

「ティアさん、セクト！海に潜って」

ティアとセクトは同時にシアンを見た。二人とも

「え？」という顔をしている。

「セクト、ティアさんを頼みます」

訳が分らないままセクトとティアは海に潜った。その時、セクトがティアに結界をはる。シアンはそれを見ると、前に向き直った。

影だと思っていた物がもう肉眼で見えるまでになっていた。気味の悪い、邪鬼のような姿に蝙蝠のような羽を背中につけ、声をあげながら飛んでくる。ものすごい速さだ。

シアンは心が静かになっていくのが分った。風に加護を受けているシアンは勝手に落ちることは無い。自然の我が儘に振り落とされる事は無い。何故なら、シアンは風の民であって他の種族とは生まれながらにして違うのだ。

地を這う者達の羨望を集めた種族。

伝説とされていたこの世に唯一人の…

シアン、そなたは死んではならぬ、決つして。そなたが死んではどうにもならぬ。シアンよ、

魔物達の声が大きくなり、生き物たちが怯えているのが分る。風に伝わってくる。嫌な臭いが風にのって鼻につく。真紅の血に飢えた魔物達の目が光る。

…生きる覚悟はあるか？

胸に掛けていたペンダントをぎゅとにぎる。肌に馴染みすぎていて目が覚めた時に気がつかなかった物。多分、小さな頃から首にぶら下げていたのだろう。あまりにも肌に馴染んでいた。

何故だか分らないけれど、これがあると落ち着く。心が安らぐ。

青のハイ・ドランジ。

(…僕はまだ死にません)

死ねない。

まだ、やらなければならぬことがある。

一息を吸うと、集中した。体の中で魔法力が組み合されていく。風が激しく哭く。そして、両手を前にかざした。

「すべての名において 生きとし生きる者たちよ 我が偉大なるテイーデンの加護を受けぬ者たちに清浄を与えよ 今 一条の矢を放て」

「フレミュ」

突然声をかけられ思わず振り向いたフレミュに月司は微笑む。

他の種族から託宣を命された時は予言をし、時読みをする時も力を受け継いだ者がする。力を持つ者が月司となる。

力を持たないものが司となれば双守は力を無くし、予言をできなくなってしまう。月神の怒りに触れ力を授る事ができないかも知れないのだ。

「何をそんなに祈っているのです？」

フレミュは立ち上がった。

「はい…この世界の平和と安らぎを」

司は手を組んで、フレミュの横に立つ。

「風の民…今や世界の示標とされた幻の種族。しかし、これこそが現実です。それが世界の存続を賭けた戦いに巻き込まれるなんて…最後の生き残りとなってしまったのに、さらに追い討ちをかけようとし…」

そこで司はふっと悲しそうな表情をした。

「私達は何もできないのですね …」

「月司……」

司はアリティア像を仰ぎ見る。

「…この世界が滅ぶのをまだ視ません。それは、まだ希望が残され

ている事なのだ、私は信じています。決して、この世界が滅ぶことの無いように…悲しみが残らないように」

後から後から零れ落ちる涙を拭おうとせず、必死に月神は祈り続ける。

フレミュにはなんと声をかけたらよいものか分からず、ただ立ち尽くしていた。

と、その時気が遠くなるような、頭の奥が手で掴まれたような衝撃を受け、ドサツと月司が倒れる。

「月司！」

なんとか頭を振り、こみ上げてくる吐き気を押さえた。体を揺すられて、気がついた月神は立ち上がった。

「今は…」

「…すぐに過日視をしましょう。一体、何が起こったのか」

「はい」

フレミュは頷いた。

「水の逆さ月、アル・フィティアとラグ・フィティスよ、ここに水盤が光り、波紋を広げながらある情景を映しだす。それはシアンが呪を唱えたところだった。」

「これは」

司は驚いたように目を見開いた。

「どうしました？」

後ろに下がっていたフレミュは司にそう尋ねた。月神はそれには答えず、フレミュに違う事を言った。

「この双守の巫女達を呼びなさい。それと…いいえ、構いません。全ての月神の民達をここに呼びなさい、急いで」

フレミュはこれには

「なぜ？」とは聞かずに一礼をすると、急いで部屋を出た。フレミ

ユは月司がこんなことを言う時は、何も言わずただ指図されたままに動く。何か火急の用事があるからだ。月司を補佐し、助言する事

もある。そんなフレミュを月司は心から信頼していた。月神は水盤に目を戻すと、水盤に映っている虚像を消した。

「司殿、一体何が視えたのです？」

まだ若き月守の長、アテハアンが尋ねた。月神は手を組み祈りの形を取ると、一礼した。

「先ほどの膨大なこの星のエネルギーの波動を感じました。何かあったのか先ほど過日視をしたところ、風の民が放った魔法力にこの星のエネルギーが引つ張られたのです」

「それは… なんと」

双守の民達も先ほどの衝撃を知っている。何か不安を感じていた。

「この星のエネルギーを引き出す事のできる種族などいません。しかし、今は世界の存亡を賭けた切迫した事態です。たぶん、神々たちが唯一の希望に力を与えたのでしよう。しかし、風の民に世界が動くほどの加護を与えて、神々たちは動いていません。…いいえ、動けないのだと思います」

「神々が？そのようなこともあるのですか？」

「おそらくは」

集まり来た双守の民達がざわめいた。

アテハアンが進言した。

「先見は…？予言はないのですか？」

「しました…何度も。しかし、いくら先視をしても水盤には何も映らないのです」

双守の民達は口を閉ざした。いよいよ不安が大きくなる。静けさがその場に広がった。アテハアンが絶望的にため息をついた。

「もう、終わりだ……」

何もかも。

「…まだ希望が残っていないわけではありません。私達は風の民がこの世界に平安をもたらしてくれる事を祈りましょう」

黒く、血に飢えた化け物。世界を滅亡させるために、誰かが生み出したのか。

神々の動きを止め、この世界に何をしようというのか。どうして滅ぼそうとするのか。

異種達は…知らない。

人間達は気づいていない。この世界の危機を。日常が当たり前だと思っっている。そして、異端者達は世界の滅亡を敏感に感じとっている。そして、行動を起こしている。…戦っている。当たり前前の日常を取り戻すために。

「ほっほ。風向きが変わったの」

アリバ・ハノクラは口元からパイプを離した。

魚たちが一瞬恐慌を起こしたが、すぐに元に戻った。

アリバ・ハノクラもそれを感じた。それは、高い所から飛び降りる感覚とよく似ていた。あの言いようもない不安が身を苛む。しかし、アリバ・ハノクラはパイプを口につけふかしたただけだった。アリバ・ハノクラは手に光を生じさせ、それを見つめた。

生きる覚悟はあるか？

（わしが言えた事でもないのにのう…）

偉そうな事を言ってしまった。人目に付くのが嫌でこんな辺境の地にまで来たというのに。人間でありながらここに来た。パイプをくわえて物思いに耽る。

風の民の事を思った。

一見、少女にも見間違えるような顔で、優しそうで穏やかに見える。間が悪いと言えば悪く、人には決して嫌な顔ができない、そんな役回りをしそうだった。

（そんな所までもそっくりだのう）

顔だけではなく、性格さえも。シアンが初めてここへ来た時、内心

アリバ・ハノクラは動揺していた。奴がここにきたのだと。しかし、一目でその違いははっきりと分かった。面影が似ていたが、そんな筈はないと思った。なぜなら若すぎるからだ。

あの若さのままでは、時間じかんが止まったままだ。それに奴は…

（本当に死んだのか？）

パイプをふかす。

手の中にあるものを見つめる。それは白い、純白とも言えそうな鳥の羽根だった。

風の民ともあるうものが滅びたのか。伝説は一夜にして終わったのか？

「今、お前が見たら何と言つたろうな。お前の息子が世界を救おうとしているなんて…」

しかし、それに答える声はない。

海の中に潜っていたティアとセクトにも爆発音は聞こえた。

あれだけ大量の魔法力をシアンが持っているなんてティアには信じられなかった。爆発した時、魚だけではなく岩までも震えた。活火山が目覚めたのかと思った。

魚たちはすごい速さで泳いでいった。だが、それはすぐに元に戻った。

「にーちゃん：大丈夫かな」

セクトが心配そうに、そう漏らす。ティアも不安だった。

あんな膨大なエネルギーを発したらシアンだってただではすまない。ティアはいても立ってもいられなくて縹珊瑚の馬の脇腹を蹴った。

「あっ…ねーちゃん」

セクトも後を追う。

（シアン…）

世界がかけた唯一の希望…

村を出たのは、あの束縛から逃れたかったのも事実。シアンを助きたい、一人にさせたくなかったのも事実。

出会ったころのシアンは儂くて、今にも消えそうだった。記憶が無くて一人で。

どんなに不安だっただろう。見知らぬ地というのは。ティアは泣きたくて、たまらなかった。

しかし、ティアはどうして泣きたくて堪らないのか分からない。その意味を知らなかった。

たまらず叫んだ。

「シアン」

海上に出た瞬間、ティアはものすごい臭気を鼻にした。思わず嘔吐しそうになった。

波間の所々に黒い固まりが見える。頭のない物や、内臓物が飛び出しているものもある。ティアはこらえきれず口元に手を当てた。胃がむかむかとし、頭の奥が鋭く痛む。これは余りにも……

(酷い……)

いくら自分達の命を狙っていた化け物達でも、思わず顔を覆った。ティアは吐き気をこらえて、少し高く上がった。黒と赤色に染まった海はなんともいえない様子を表していた。それはまるで地獄絵図のようだった。ティアは周囲を見回す。

(シアン…シアン、どこにいるの)

ティアはシアンの姿を探す。しかし、目的の姿はみつからない。

辺りには、目を覆いたくなるほどの光景が広がっている。海が赤と黒に染まっている。

と、ティアは眼前に海から突き出た岩をとらえた。シアンがぶつかりそうになったあの岩だ。ティアはこっちから影になっている方へとまわった。シアンはそこにいた。

白銀の髪が陽光にあたって反射した。人一人が座れるほどの岩場にシアンはうずくまっていた。ティアは縹珊瑚の馬をシアンに近づけさせた。シアンは顔をあげない。

「…シアン」

小さく呼びかけてみたが、しかしシアンは動かなかった。ものすごい

い臭気に口元を押さえようともしない。

ティアは一瞬ふらつとしたが頭を振って気を取り直すと、縹珊瑚の馬を岩場ぎりぎりにまで近づけ片足だけをおろした。シアンに手を伸ばす。

「ティアさん……」

手が届くか、届かないかという所で小さくシアンに名を呼ばれた。

思わず手を止めたティアはシアンの顔を覗き込んだ。

「シアン？」

シアンは顔もあげず、ただ手を伸ばしてきた。

「シアン、怪我したの？」

ティアは訳が分らず、ただシアンの手を握った。と、その時シアンの頬が濡れていることに気が付いた。

「どうしたのシアン……なんで泣いているの？」

シアンはぎゅっとティアの手を少し痛いほどに握る。

シアンの手は、体格は少女のように華奢でたおやかのように感じられるが、ティアよりも関節は太い。弓矢をはじく種族としては、指が強くなければならないが、そんなティアの手を振りほどけないほど、シアンの手の力は強かった。

振りほどけない。

その事実がティアに赤面させた。だが、ティアは不安になってきた。

「……ティアさん。僕は生命を奪いました……自分の為に」

「違う。シアン、シアンは……」

「何が違うのです？命を奪ったことには変わりはないんです。いくら血に飢えた魔物だと言っても……」

「……」

「僕は……」

ティアはいらつとした。

「シアン！そんなに悩んでいてどうにかなるってどういうの！？やっつてから後悔してたら何か解決するの！？」

シアンは驚き、思わず目を見開いてティアを見返した。

「なんで、世界の救助者はこんな奴なの！？いじいじして、些細な事悩んで…はあ、これじゃこの世界も先が思いやられるわ」

シアンは思わず表情を緩ませた。

「…そうですね」

「分った？ならさつと」

その時、ティアの体がバランスを崩し、シアンに倒れこんだ。シアンは思わず腕を広げ抱きとめた。

血生臭さにあてられたのだろう、倒れそうになったのだ。

「ご、ごめん…」

ティアは、ぱつと身を離れた。シアンは少し残念そうな表情をした。ティアはそれを疲労と見てとったのが、

「はやく、世界にこんな事が起こらなくなるように一緒に頑張りましょ、シアン」

私がいるから、とは言葉にしないで言った。

シアンは頷いた。

「白き清浄なる光に今蘇らん 聖なる光よすべてに等しくソウエルの元に目覚めよ」

あたりの海面が白く輝きだすと、海に描いた魔方陣が光り、海に漂っていた黒と赤のドロドロとしたものは、浄化された。だが、目を刺すような光ではない。

聖なる光。悪しきものを浄化するための浄光。

「にーちゃんすげーな……」

セクトがしみじみと言った。しかしティアは浮かない顔だった。

（あの魔方陣は）

シアンが戻ってきた。

「いきましよう……早く」

なんだかシアンは辛辛そうだった。魔法の放出と言う事もあるだろうが、別のところにもあるようだ。

（やっぱりつらいんだ）

そう思うと胸が痛んだ。

「ねえ、にーちゃんどうやったたらあんな魔法使えるの?」

セクトはシアンの自分に関する記憶がない事を知らない。

「分かりません。なぜか体が覚えていて…」

「どういう事?」

セクトは、シアンの曖昧な返事に疑問を覚えた。

「僕は、自分に関する記憶がないんです。エドリアスの地に落ちてから……」

「それ本当!？」

「ええ」

セクトには信じられなかった。シアンが記憶をなくして、あんな高等魔法を扱えるとは思わなかったのだ。

「どうして記憶がないのに、あんな…あんな事ができるの?」

「さあ…僕にも何でか……」

「それでも、すっげーな、にーちゃん。おいら、あんなの使えっこないよ」

この時代、魔術というものを扱える種族は限られていた。人間が知らない種族のほとんどの大半が魔術を使っていた。元々扱える種族たちは、自己身を厭わない限り魔術を手放そうとはしなかった。なぜなら、魔術をもつことは権威を示すものでもあったからだ。種によつて違うが、そのかの力は偉大であったという。

(あの魔法は知っている…記憶を無くしているはずなのにどうしてシアンはあんな膨大な魔法を使えるの?)

そこでティアははっとした。

(あの時の…魔法師から逃げる時、シアンが魔法を使った。シアンは元々あんな魔法を使えたんだわ。でなければ、あんなものすぐに使えるはずない…)

ティアはシアンに聞いてみようかどうか、迷った。どうしてあんな魔道力を放てるのか。

呼びかけようとして、その時一陣の風がティアたちを襲った。

(この風はもしかして…)

と、目の前に白い鷹が現れた。波もおさまった。

「リ、リーヴァン様…」

シアンの咄嗟に出していた左手にのった。

《風の民よ》

「はい、どうかしたのですか？」

シアンは少しどきどきしていた。《そなた…魔道を使ったな？》

「え…は、はい」

シアンはびくびくしながら返事をした。しかし、リーヴァンはそれ以上魔術を使った事について咎めはしなかった。

「わー、白い鷹？本物？すっげー」

ティアが慌ててセクトを黙らせた。

「こら！」

《身を守る為ゆえ、発動した魔力に何人か気づいた。魔道に敏感に察知して風の民よ、そなたを狙いにくるぞ。気をつけよ》

「くるって…誰がですか？」

《私にもわからぬが見たであろう？あの醜く爛れた魔物達を…！あれは所詮雑魚にしかすぎぬ。もっと気の強い、死と恐怖に満ちた陰険なる気が北の方から漂ってくるのだ》

「……」

リーヴァンはその金色の瞳をゆっくりと伏せた。

《何か大きな邪悪な気を感じた。何があった？》

シアンは一つ息をついた。

「人間がこの大陸に…」

《人間？》

「ええ、僕を狙って」

シアンは奥歯を噛んだ。あの時の事を思い出すと、恐怖だけではなく苛立ちを覚えずにはいられなかった。確かに恐怖を感じたが、それ以上に相手にまったく歯が立たなかった事のほうがシアンを苛立たせた。

ティアはそんなシアンを初めて見た。いつもおっとりとしていてそういう事にはてんで無関係に思えたが、シアンにも風の民としての誇りがある。もっとも、風の民はシアンだけだが…

《人間：アリバ・ハノクラもこの地に住んでいる》

シアンはその言葉にはっとした。

「アリバ・ハノクラさんは、どうしてこんな辺境の地に住んでいるのですか？」

《私は知らない。始めはこの地の者達はアリバ・ハノクラが来た事にも気がつかなかった。しかし、奴の魔法力はそうそう隠しきれるものではない。すぐに気づいた》

「アリバ・ハノクラさんは、前、ケルヒス＝アドロス＝ハーシエ8世を手助けしたと聞きました」

《…奴は、他の人間とは違う。どちらかと言うと我々のほうに近い。自分の分身を作り出して外に出る事など造作も無い事だろう》

「じゃあ」

《そつだ。奴は神に等しい力を持ちながら傍観している。奴は封印などされなかった。ここ数年、外に姿を見せなかったからであろうが…》

「でも、どうして今動き出さないのにケルヒス王子のときは手助けしたのでしょうか。早く第5代暗期を終わらせたかったからなのでしょうか」

《5代暗期は人間達の手で終わらせねばならぬ事だった。神（我ら）が手を下せば、歴史が変わってしまう》

「……」

《奴がなぜ静観をしているのかは知らぬが、もしかすると自分には何もできないのだと思っているのかもしれない》

「え？どういう意味ですか」

《…我々にも封印が施されたのだ。何者かの手によってな…気づかぬうちに、それも最悪な方法で。でなければ、私は偽りの姿などしていない…！》

リーヴァンはその時の屈辱を思い出したのか、体を震わせた。

「い、痛い…！」

シアンが痛みを訴えたので、我に返ったリーヴァンは慌てていつの間にか込めていた足の力を緩めた。

《すまない》

そう言うと、嘴をシアンの左腕に口づけをするようにそつと触れさせた。

すると腕から流れていた血が止まり、傷は跡形も無く癒された。

《そなたの血を求め、動き回っている輩どもを排除すればそなたの命を狙われる心配も無い。なぜ、風の民のそなたが選ばれたのかは知らぬが、我々にはもっていないものをそなたは持っている…魔道を使うときには気をつけられよ。そなたには星のエネルギーを魔動力に変換できるようにしてある。小魔道などならば何ともないかもしれぬが、大規模な魔道はそなたを蝕んでしまう》

シアンも、この星も

リーヴァンはティアの方に首を動かした。じつと見つめると、一度瞬きした。

ばさっ。

リーヴァンがシアンの左腕から離れた。あたりの風が強くなる。波は荒れ、突風が吹きつける。翼神のひと打ちで、風が哭く。

《風の民よ、この旅はそなたにとって辛いだろう…だが望みはそなたしかないのだ。我らの運命を変えてくれ、風の民よ》

そう言うと、空の彼方へと飛び去った。シアンたちはその姿が見えなくなるまでそこにいた。もつとも差ほど時間はかからなかったが。

何日か飛び続けたある日、小さな無人島に飛び降りた。しかし、シアン達は落ち着かなかった。

「…もつこの島は小さくても人間達の地図に載っているわ。油断ならないから気をつけて」

「その地図どうしたんですか？」

「え？これ？」

セクトがティアの手からぱつと掴み取る。

「わーこれが人間の地図ー？よくわかんない」

しかし、手を離そうとはしない。

「わたしたちの住んでいた島も人間たちに知られると、ここに描かれる筈よ。そうね、たぶんこの辺かしら」

ティアは地図のとある一角を指さした。

「ええ！？おいら達、こんな小さな島に住んでたの？」

セクトが心底驚いた声を上げた。

「そうよ。私達の島はとても小さくて、とても古いわ。だから古代の種族が多いのよ」

シアンは初めて地図というものを見た。すっかり夢中になっていて、さっきティアに質問をしていた事を忘れていた。

「ティアさん、もしかしてこれ……」

「ええ、そうよ。お父様のところからもらってきたの」

ティアはにっこりと笑いながら言った。

「それって泥棒ーじゃ……」

「うっん、違うわ」

ティアはきつぱりと言い切った。

「これは世界救済の為に必要な道具よ！！」

そういうと、地図をセクトから取り上げた。

「私達が今いる所はこの島……そして、リーヴァン様が言っていた北とは……ここ、ロディア・ヒールイドね」

「“ロディア・ヒールイド”？」

「マテス語で“滅びの影”という意味よ。その名の通り、極寒の地で日のあたらない大地と言われているわ。そして、そこではここから魔術が届かないの。何の力を持ってしても。でも、あの大陸に魔道の力が限りなく、溢れているそうよ」

シアンは、頷いた。

「なるほど、神々にみはなされた地か」

しかし、ティアは首を振った。

「いいえ、そうでもないわ」

「え？どうということですか？」

ティアはじつとシアンを見つめる。シアンはその険しい表情に眉をひそめた。

「ティアさん？」

「……………あなたの家があったところよ、シアン」

シアンは自分の耳を疑った。

「今…何んて」

「へーえ、お兄ちゃんってそんなところに住んでたのかー。ふうん、やっぱり普通とは違うんだ。あの鳥もなにかいつてたし…」

そう言くと、それつきり口を閉ざした。どうやら眠ったらしい。ずっと、空を飛び続けていたから当然と言えば当然だった。

焚き火の炎が爆ぜた。シアンはそれを水のように透きとおった瞳に映しながら、ティアをみた。

「それ本当なんですか？ティアさん」

「“先視”をしたのだから間違いないわ」

シアンは信じられないという顔をした。

月神の先視は外れた事はない。今までそれで託宣を受けていた宣言は正真正銘本物だ。力が落ちている事もない筈だ。その託宣によって、命を助けられた事がティアたちには何度かある。

シアンが北の地から現れると。予言が外れることはなかった。

「僕はどうしてそんなところから…？」

ティアはシアンの手をとった。

「そうよ、シアン！！なにか覚えていないの？ここまで来た道のりとか、どうしてエアドラスの地へ来たのか…」

「僕は……………」

シアンの瞳が揺らぐ。ティアの真っ直ぐな瞳には今、シアンだけ映っている。シアンの水色の瞳も真剣だった。しかし、瞳が揺れる。時が止まったように辺りは静まり返る。双月のアル・ファイティアと

ラグ・フィティスの光が優しく地上に降り立つ。どちらも三日月だった。

二人は見つめあったまま、動かない。二人は相手の息がかかるほど見つめあっていた。まるで、相手の中の自分を見るかのように。

「おや、これはお邪魔してすみません、かな？」

と、いきなり声が聞こえた方へ、二人は反射的に打たれたように顔を向けた。

そこには何と、尻尾のある人間が二人を見ていた。

5・始風

ティアとシアンは慌てて体を離すと、突然来た人間に驚いた。

「ティアさん。ここは無入島じゃなかったんですか？」

「そうだったんだけど……」

「この島はつい最近フィリップ族によって占拠したんだ……それより
そう言うと、尻尾のあるフィリップ族と名乗った男はシアンにつか
つかと近づいた。いきなり目の前に立たれて驚いているシアンに、

「君、可愛いね。すっげー俺好み！」

顎に手をかけ、顔を上向かせた。顔を近付ける。

シアンはア然としている。ティアも同様だ。

「よかつたらさ、今晚……」

それ以上言葉は続かず、男は頭を抱えた。ティアに後ろから思いき
り殴られたのだ。

「いって……」

「あのねえ〜シアンは男なの……」

すると、フィリップ族の男はまじまじとシアンを見つめた。

「嘘だ……」

「嘘じゃないわよ！」

フィリップ族の男は相当ショックだったらしかった。

「……すっげーかわいいのに……しかも俺好み……」

フィリップ族の男は心底残念そうに呟いた。

「わかった？ わかったならさっさとどっか行きなさいよ」

「……嫌だ！ 俺は諦めない！」

頑固として譲らない男にティアはイラツとした。

「なに言っているのよ！ シアンからも何か言っちゃって！」

シアンは少し困ってから、

「僕、そんな趣味ありませんから」

そう言うと、にっこりと笑う。ティアは額を押さえた。

(やっぱ、かわいい…)
そう思われたのも無理はない。

「俺、フィリップ族のネオってんだ。この島に来たのは、つい一週間程前だな」

「どうしてこんな所にいるのよ？」

ティアはさっきの事をまだ気にしているらしく、言い方に棘があった。ネオはそれを気にすることなくサルのような尻尾を揺らす。

「移動してきた、ていうか何か逃げるみたいにしてこの島に来たんだ…」

「誰から？」

「俺はよく知らねーけど、なんか急だったな」

ネオは腕組みをし、尻尾をゆらゆらと揺らす。シアンは黙ったきりだった。

「あ、お前らの名前は？」

「僕はシアンです。ティアさんと、そこに寝ているのはセクトです」
ティアはふんつとそっぽをむいた。これにはさすがにネオもむつときた。

「どうして、こんな所にいるんだ？ティアはエルフだろ」

「それは…」

ティアは口ごもる。こんな見ず知らずの男に自分達の目的を言っているものかどうか迷っているのだ。

「追われているってもしかすると…」

シアンが代わりに口を開いた。

「なんだ？」

「……異端者廃絶」

「異端…なんだって？」

「ネオたちの種族は、みんなそんな姿なんですよね？」
そんな姿とは、尻尾があることだ。

「ああ、それがどうしたんだ？」

あまり低くない声でそう尋ねる。その声には少し焦りが含まれているように聞こえた。

「もしかしたら、異端のものを追いつめる事は別の何かがあるのかもしれない」

ネオは訳が分からずティアを見た。ネオはたまらず口を挟んだ。

「何なんだ？お前ら何を知っているんだ？」

ティアもシアンも口を閉ざした。顔を見合わせる。

「なんで黙るんだよ」

ネオが喚くが、二人は口を開こうとはしなかった。

「私達にもよく解らないの…いえ、知らないと言った方がいいわ」

「お前らは一体どこに向かって、何をしようとしている」

「…私たちは北を目指しているの」

ティアはため息とともに吐き出した。

「なんで、あんな極寒の地へむかうんだ？」

ティアはきつ、とネオを睨んだ。

「あなたには関係のない事でしょう。それに別にどこ行こうが私たちの勝手でしょう？」

ネオは口をつぐむ。なんだかんだ言っても女には弱いのである。

「でも…」

ティアはため息をつくと、

「ごめんなさい。怒鳴ったりして。でも、私たちは見ず知らずの人にいきなり自分達の目的を話せるほどの余裕なんてないの」

ネオはティアの台詞に引つ掛かりを覚えたが、あえて口には出さなかった。

「解った。色々な事を聞いて俺も悪かった。そうだよな、言いたくない事だつてあるよな」

ティアとシアンはほつと胸をなでおろした。

「そういう訳だから俺も連れて行ってくれ」

「……は？」

ティアとシアンは同時に口をポカンと開けた。

「だって、そんな中途半端なままでいられたら俺、すつきりしないし。それになんて影の大陸へ行くのか気になって仕方ないだろ？」
ネオは一人でしゃべり続けている。ティアとシアンは開いた口が塞がらない。

(冗談じゃない……)
心底そう思った。

二人は落ち着けないまま、睡眠を取る事にした。何日か、空の上にしたせいですぐに深い眠りに落ちることができた。

ネオは種族達の所へと戻って行った。
村に来るように、とは言わなかった。村の者達は追われた事により他人に過敏になっていた。ネオはただ気をつける、とだけ言った。
双月のアル・フィテアとラグ・フィテスは、柔らかな光を地上に投げかけていた。

結界を解いた後、出発しようとしていたところにネオが現れた。
セクトは「誰？」という顔をして、ネオをじっと見ていた。いや、睨んでいたというのが正しい。なぜなら……

「俺はまだ諦めてないぜ。シアンが男だったの嘘だろ。俺を追っ払いたいつて言う手口で……」

「ティアねーちゃんだって、女だよ」

「ティアもかわいい。けれど、シアンはもっといい〜！」
「僕、男です……」

シアンが反論するが、誰も聞いていない。
ティアは後ろの会話が耳にまったく入ってなかった。シアンに呼びかけられた事にも気がつかなかった。

「どうしたんですかティアさん？気分でも悪いんですか」

「シアンなんでもないの、ただ……」

あの日、リーヴァンがティアをじっと見つめていた。リーヴァンがティアを見ていたのは訳があるはずだ。

だが、リーヴァンは何も言わなかった。あの金色の瞳は全てを知っ

ているかのようだった。その事がティアを余計に不安にさせ、細められた金色の瞳は哀しい色を湛えていたように見えた。

「ただ？」

ティアは首を振った。

「ううん。なんでもない…ごめんなさい」

「そうですか？」

ティアの態度にシアンは少し心配になったが、それ以上は何も言わなかった。

「とにかく、俺を連れて行ってくれよ」

ティアとシアンは同時にため息をついた。が、セクトはネオのことを気にいっただらしくしきりに引っ付いていた。そして例によって例のごとく、ティアとシアンは顔を見合わせた。

「どうするんですかティアさん、あのネオって人もついてきたら、空での移動はできないのではないですか？魔動力も感じませんし、それにセクトが懐いてしまってますよ」

「あら、今回は気が合うのねシアン。私もそう思っていたところよ。縹珊瑚の馬だつて島に着いたら消えちゃったし」

「そうですよね。いくら島続きだからってさすがに海を渡らないと行けないし」

「な〜に二人でこそこそしてるんだよ」

シアンとティアはぎくつとしたが、

「ねーちゃんたち、やっぱり恋人なの？」

嬉しそうに話すセクトの台詞にさらに顔を沈めた。

「あ〜昨日だつてなんか二人で見つめ合っていたし…俺が声をかけなければどうなっていたやら」

「え〜 なにそれ〜??」

二人はそれを聞くと昨日の事を思い出したのか、耳朶まで真っ赤にして同時に顔をそむける。

「違います！昨日のは…」

「違うわ！あれは…」
二人同時に叫び、同時に黙る。そして顔を背ける。それを見てセクトが目を輝かせながら、
「やっぱり、そうなんだ」
と、二人が口を挟む間もない。シアンとティアは途方にくれ、情けなくなった。

「さすがに、ティアさんが魔法で空を飛んでいくとなると、かなりの魔動力を消費します。僕が運べば何とかなるかもしれませんが、さすがにあと一人増えるというのは」

シアンが言いにくそうに言葉を濁めるとネオは
「わかった」
えらくあっさりと言った。

ティアはその言いように眉をひそめたが、シアンはほっとしたように胸をなでおろした。それを見てセクトが不満の声を上げた。

「え〜？」
ティアが「うるさい」と耳を押さえる。がネオが言った事に一同は固まった。

「俺、後で海を渡っていくから待っていてくれよな」
ティアとシアンはわが耳を疑った。

(今…)
(なんと…?)

しかし、ティアとシアンの表情が変わった事に気がつかずネオは続ける。

「だってよ。やっぱり気になるだろ？最後まで付き合っぜ」

「最後って…」

「あんた…」

最後まで何も今始まったばかりではないか。

シアンとティアが啞然としていると、ここにもう一人脳天気な妖精がいた。

「本当？ネオにーちゃん！」

「おう。セクト。だから待っとけよ」

「うん。待っとく！」

（遠足じゃないのに…）

それを見ながら二人はがつくりと肩を落とした。

ネオと別れた後、三人は旅立った。勝手に約束を押しつけられてティアは嫌な顔をしたが、何も言わなかった。

「本当に待っておきます？ティアさん」

「冗談じゃないわよ。これ以上荷物を増やすわけにはいかないわ。とにかく私たちには時間がないのよ」

そのお荷物はネオとの別れを惜しんでいたが、笑顔でこう言った。

「必ず待っていてよね。にーちゃん、ねーちゃん」

二人は（もうどうにでもなれ）と投げやりになった。

リーヴァンはシアンたちと別れた後、ある一つのものを目指し真っ直ぐに飛んでいた。

リーヴァンが翼を打ち振るうたび、その余風で波が荒れる。雲行きが怪しくなりすぐに雨が降って来た。

しかし、彼は飛び続けている。雨など目に入らない様子だった。なぜなら、リーヴァンは実体をもたないから雨が降ろうが雷を落とさねようが神の体に触れる事はできないのだ。翼を濡らすことは無いのだ。リーヴァンの実体はどこかに封印され、その役目を担うべく彼の意識が飛び回っているのだ。リーヴァンはこの世であってこの世のものではない。しかし、実体でなくともリーヴァンが翼を一つ羽ばたかせれば、風が生まれ、嵐が生じる。それだけでリーヴァンの力の大きさを知れた。

やがて、あのシアンたちが落ちた絶壁の麓に着た。そして、躊躇いもなく海中へと身を滑らす。海水もリーヴァンを濡らすことはない。波は荒れ狂っていた。魚も縹珊瑚の卵も見えない。しかし、縹珊瑚

の藍色が海の底のほうに静かに色褪せて見えた。やがて、縹珊瑚に囲まれた小さな家のところに来た。リーヴァンは苦もなく壁に吸い込まれるかのように消えうせた。

《もう、要件は解っているのではあるう？》

「こんな老いぼれにあなた様のような方が何の用ですじゃ？」

普段、結界を張って悪しきものたちに気がつかれない様にしてあった物が無かった。それでも、リーヴァンには意味の無い物なのだが、《なぜ、風の民に事実を言わなかった？》

しかしアリバ・ハノクラは目を細めてみただけだった。翼神に背を向けているのでこちらから見えないが、リーヴァンが少し苛立つ気配が伝わってきた。

《何故何も言わなかった。あの事は風の民にとってとても大切な事だったろう？それを覚えているのはあの奴と友好をもっていたお前ぐらいだ。なのに…》

「リーヴァン様。人と言う者は必ず死ぬものですじゃ。私のような老いぼれなど忘れられるのが常ですじゃ」

《…あの若者は大切なものを忘れていく。とても大切な事を。教えてやるのが最大の手助けなのではないか？》

「大切なものだからこそ、自分で手に入れるものではないのですか？」

リーヴァンはその言葉にはっとなった。

《…確かにそうであるうな》

「リーヴァン様。あなたもお忘れです。ほんの些細な事ですが、とても忘れてはならない事です」

《私が、何を忘れていくと？》

アリバ・ハノクラは何も言わずに悲しそうに笑っただけだった。

《なんだ？何を知っている？お前は何を知っていて、なぜ黙っている。お前ならば自由に動けるはずであるう。アリバ・ハノクラ！》しかし、アリバ・ハノクラは哀笑を浮かべただけだった。

その日は雨だった。

雨は嫌いではなかったが、足止めをされるのには堪らなかった。別に濡れて歩けるのだが、口うるさく自分の体調を気にかけていた一つの面影を思い出すのだ。

だから、逢いたくなる。

だから、その声を聞きたくなる。

雨は涙のかわりに流れる。すべての無を還すように。無情に降る。

ホープ

いつも、誰よりも側にいたのに。いたかったのに。

自分の事より人の事ばかり心配する。いつもいつも。

(くっ…)

涙は出ない。余りにも近くに居すぎて失う事を恐れていた。

幸せだったのに。どうして、離れねばならなかったのか。

今、何を想っている？

(ピュア…)

雨が降る。空虚に。そして優しく。

その日は一日中雨が降っていて億劫だった。空の移動ともなると、雨風にさらわれる事は危険なので仕方なく一休みする。

確かに空移動のときに、結界を張れば雨風を凌げるがそれではセクトの体力が持たない。セクトの魔力だって他の妖精の子供達と比べれば似たりよったりだが、近くの島までゆうに1日以上かかる。墜落して海面に叩きつけられるかもしれない。

セクトは薄羽蜻蛉のような羽根をびん、と伸ばした。外を見ていると雨に濡れた所を想像して、体を振るわせずにはいられない。全身の鳥肌が立ち、頭のほうに血が回って頬が少し赤くなる。少し寒か

った。

(風邪をひいたかな…)

それに応えるようにくしゃみをした。セクトが鼻を嚙っていると、

「あら、セクト風邪？」

「なんか…」

「じゃあ、はやく治さないようにしないと。風邪はひき始めが肝心だつて言うし」

「うん…」

また鼻を嚙った。

「あれ？にーちゃんは？」

「シアン？そういえば外に出て行ったような…」

「外？」

セクト達が今いる場所は岩肌が切り立っていて、雨風を凌ぐにはちようどいい場所だった。

人間がいる島はク・アルデイス島とたいして変わりはないが、何かが違う事が解る。何なのかはよく分からないが、空気が違うのだ。

あの古俗に凝り固まったあの村は、外界に出たティアにとっては自らを捉える足枷でしかなかったかもしれない。種族が違うからと言って内にこもれば何の危険も無いかも知れないが、外の世界へ目を向けないという事はいつか自ら破滅を呼ぶ。

かつて世界最高峰の魔動力をもったスティハア種族も、外へ魔動力が漏れるのを防ぐために外との接触を断ち切ったため、数力月にして滅んだのだ。

確かに、自分達と違うものに嫌悪感を抱く者たちとは親交を深めようとはしなかった。いや、行動を起こさずとはしないのだ。解りきっていると言いつつ、目をそむける。やがて来る破滅に何をすることもなく。

「こんな雨なのに、にーちゃんは一体外になにをにいつたの？」

「解らないわ…そうね。この辺はシアンも知らないはずなのに。大丈夫かしら」

二人が話しあっているのとシアンが慌てたように戻って来た。

「ティアさん！」

「シアン、どこにいったのよ？ そんなに慌ててどうしたの」

「む、向こうに…」

「むこう？」

シアンは喉をおさえて呼吸を落ち着かせようとする。

「あの、森のほうに…犬がいました」

ティアとセクトは同時に体の動きが止まった。

「こんな雨のなか、木の下で雨宿りをしていたんですよ？」

シアンは、言葉を続けられずだんだん小声になる。

ティアは拳をつくと、

「シアン、…なぐつてもいい？」

声を震わせながら言った。

（お、怒ってる？）

シアンはびくびくしながら、思いつきり首を横に振る。

「にーちゃん、なにいつてんのー？ 山犬なら珍しくなんともないよ」

「ち、違うんです。あれは山犬なんかじゃありません。犬が二本足

で立ってたんです」

「犬が？」

ティアは拳を顎につけると少し考え込んだ。

「それって、獣人…じゃないかしら？」

「獣人？」

シアンは目を瞬いた。

「あーっ。そういえばそんな事聞いた事がある」

セクトが大きな声で叫んだ。

「獣人がこんな所になんているのかしら？」

ティアとシアンは首をかしげる。

外では雨が降っていた。

雨音は聞こえず、木々の葉が雨によって揺れる。

雨が止んだのは、ソウエルが真上から少し傾いた頃だった。

雨が上がってもシアン達はそこを動かなかった。

「どうしていかないの？」

セクトがあくびをしながら言った。しかし、ティアもシアンも口を開かず黙って視線を交わしただけだった。それで十分だった。

「おいら、暇」

セクトは不満そうにそう漏らし始めた。

しかし、ティアとシアンは外を見ているばかりだった。

と、ふと何かの気配を感じた。

それは魔道を扱うものなら感じる、独特の生きたものの気。動物とは明らかに違うその気は、岩場に近づきつつあった。

水の滴をかきわけながらゆっくりと近づいてきたのは、シアンの言っただとおりに、犬の獣人だった。

シアンはその琥珀色の瞳を見た時からその獣人がなぜ、ここを訪ねたのか分かっていったような気がしていた。

「…あなたもなにかを感じたのですね、ホープさん」

ホープ、と名乗った犬の獣人は頷いた。

「今日は雨が降りました。心を落ち着かなくさせるような雨です。いつもと違いました」

その琥珀色の瞳を外にむける。

「風が止んでいてまるで、世界が眠っているかのように静かで不安にさせます。何かこの世界に異変が起きているような…そんな感じがするんです」

「いえ、感じなどではなく実際に起こっているのです」

「では、やはり」

ホープにも生存の危機は訪れようとしていた。

何かを危知しているのはこの世界の異端者、と呼ばれる者たち。滅びゆく世界の悲鳴を聞いていないわけではない。それが微かなものだとしても、世界が泣いているのを感じているはずだ。神々が追いやられ、時代が変わろうとしていた。

「なにいつてんの？」

セクトにはさっぱり会話の意味が掴めてなかった。ティアはそんなセクトに、声をかけた。

「セクト、しんどそうよ。大丈夫なの？」

セクトは、目を細くした。

「なんか…眠つててもいい？」

「じゃあ、火を熾してあげる」

そう言うと、ティアは置いてあつた枯枝を組み合わせ火を熾した。少し湿っていたが、何とか点いた。

セクトはごろん、と横になるとすぐに寝息を立て始めた。心なしか頬が火照っている。ティアが外套をかけ布代わりにしてセクトに掛けた。

「私も北の地でのことを聞きました。なにか起こっているんだという事も…色々な人に聞いてみましたけども、その噂はどれもみな常識と知っているものばかり。誰もその奥にある本当の事実は知らないのです」

シアンはホープの瞳を覗き込んだ。

その瞳にはシアンは底知れない、何か謎めいたものが潜んでいた。真摯な何か決意を込めたような瞳には、ひたむきさが感じられた。そしてその瞳の奥にはいいようのない不安と恐れと、そして虚無が見えるような感じがした。

「あなたはなにか大切なものを無くしたのですね」

シアンは清い水を湛えたようなその瞳にみつめられ、ホープは俯いた。

記憶を過去に引き返す。一つの面影は、やがては同じものを何度もホープに視させた。一番幸せだったあの頃に……

「…あなたもなにかを忘れているのですね、シアンさん」

「え？」

シアンは問い返されるとは思わなかったので、ホープの言葉の意味を一瞬解せなかった。

「でなければ、こんな所にまでこないはず。風の民……私は滅んだと聞きました」

シアンはその言葉に別段驚きはしなかった。

「あなたは…世界に働きかけている元を知っているのですか？」

シアンは固唾を飲んだ。

「私にも…その、世界に働きかけているものがなんなのか解りませんが。しかし、何か魔力を感じるのです」

だが返ってきた答えはシアンの予想を裏切るものだった。

「僕は人間に会いました」

ホープは瞠目した。

「なんと…あなた方が住んでいた場所には人間などいる筈がない。

それに、この辺りについても同じです。で、その人間がどうしたのですか」

地図に載っているとはいえ、ここは無入島だ。人が来るはずがない。

「その人間達は僕の命を狙い、風神は僕の記憶は封印されていると言いました。…世界には人間達が働きかけているのかもしれませんが」

「人間が… そうなんですか……」

「“滅びの影”から僕はエアドラスの地へきたのです。なぜなのかは解らないけど。記憶を無くして…」

「あなたは記憶を探しているのですね……」
失ったものを手に戻すために。

シアンは目を細めると哀しく笑った。

「あなたは一体、何を無くしたのですか？」

ホープはゆっくりと瞼を伏せる。

「わたしは…」

(…ホープ…)

どんな…どんなものより愛していた。何よりも一番輝いていたあの日々…

いつもそばにいて、隣で笑っていてくれた。

なのになぜ、こんなにも面影を追わなければならない？約束したのに。確かにあの時頷いてくれたのに。いつも側にいると誓ったのに。なぜ、こんなに想っても逢えないのか。約束は…誓いはどうなったんだ…？

(ピュア……！)

がばつと跳ね起きると、見慣れない景色が目に入った。思わず首を巡らす。そして、思い出した。

いつも目が覚めれば安心できなかったが、今は人がいる気配をすぐ側に感じられた。微かな寝息が聞こえる。

ホープの瞳から何かが滴り落ち、顔を手で覆った。

双子月とよばれるアル・フィティアとラグ・フィティスは、それぞれ似通った形をして地上を照らす。今は半月の光をなげかけていた。外は穏やかで静かだった。

不思議と心が落ち着く。

心が静かになっていった。風の音さえも聞こえない、そんな夜だった。それに少し暖かい。雨が降ったためだろう、空気が熱を帯びていた。

滴が葉から滑り落ち、草が音を起てた。ホープは青黒の髪を無造作にかきあげ、涙が出そうになるのを必死に堪えた。目頭が痛くて堪らない。

あなたはなにか大切なものをなくしたのですね…一体、なにをなくしたのですか。

ホープは見ているほうが心を痛ませるような目で、双月のアル・フィティアとラグ・フィティスを仰ぎ見る。

(…答えなど分かっている。分かりきっている)

雨の匂いが微かに残っている。

忘れてしまったのはなんだったのだろうか？雨のように存在感がなく握めないもの。だけど、とてもとても大切なもの。

なぜ、忘れてしまったんだろう
風は吹かず、雨は降らない。
…

6・望忘

双子月のアル・ヒイティアとラグ・フィティスがまだ夜空に輝く月として間もない頃、黒い空には双子月の兄、アテルス・ヒインがいた。兄のアテルス・ヒインは地上の乙女に恋をし、その身を墮落させた。アル・ヒイティアとラグ・ヒイティスは、アテルス・ヒインを止めようとしたが、しかし彼の一途な想いは誰からも理解を得られなかった。

アテルス・ヒインは乙女の元へと想いを告げに行つたが、それを知つた太陽神ソウエルが怒り、アテルス・ヒインを月上界から追放した。

今では、アル・ヒイティアとラグ・ヒイティスだけがその身を夜空に浮かばせている。

太陽神ソウエルが地上に顔を出す、ほんの僅かな時間の事であつた。

「飛行移動短縮？」

つまり、瞬間移動である。

「ええ。私も何かしたいので」

だから、何かあつた時は呼べと。

「お気持はありがたいのですが、あなたは何かを捜している途中なのでは？」

すると、ホープの頬が心なしか朱に染まつた。

「いえ、私のことはお構いなく。…私もあなた達の手伝いをしたいのです」

「……………」

シアンとティアは顔を見合わせた。

「じゃ、協力してほしい時は呼びます」

すると、ホープはぱあっと顔を輝かせた。

「ありがとうございます。では、これをお持ちください」

そう言うと、シアンの目の前に丸球の光を浮かべた。

「これは？」

「私を呼ぶ時は、これに少し気を入れてください。荷物に為らないようにシアンさんの中に入れてさせていただきます」

そう言うと、光の球はシアンの中へと消えていった。

「これがあれば、私といつでも連絡できます。用があればなんなりと申してください」

「あの、それではあなたの都合は？」

ホープは口元に笑みをよせて、

「お構いなく。私は、もうすぐ探し物を見つけられるような気がするのです」

少し、琥珀色した目を伏せる。そして意を決したように立ち上がった。

「では、私はもう行きます」

「あ、ホープさん」

シアンは慌てて立ち上がると、ホープを引き止めた。

「探し物って、もしかして……」

ホープはにっこりと笑うと、その場から姿を消した。

「シアンさんも、大切なものがやく見つかるように……」

ホープが消えると、辺りには静けさが戻っていた。

「呼んでって、そんな簡単に言える事でもないのに……」

「…ネオも同じだったのかもしれない」

その時、セクトが目を覚ました。セクトは目を覚ますと同時に、ホープがいない事に気がついた。

「ホープは？」

「…行ってしまいました」

「そう」

セクトはそれだけ言った。

「セクト？」

シアンがそう言うと、セクトはシアンに抱きついた。

「どうしたのですか。まだしんどいのですか」

セクトは首を振る。

シアンは、セクトの小さな体を優しく抱きしめてやりながら、ホープの事を考えていた。

（ホープさんの大切なものって…）

シアンはホープが移動する時、ふと、見せた表情から大切な人を追っているのだと、そう考えていた。まるでそれは愛しい者の面影を追い求めているかのようなのだ。

「ホープは何を考えているのかしら。どう考えても私たちに関わらない方が正しいのに」

「そうですね。僕たちに味方をすれば殺されるかもしれないですから」

あの人間達の事が脳裏をかすめたが、頭を振ると払い退けた。

シアンはセクトの体をゆつくりと引き離れた。

「さあセクト。何か暖かいものを作ってあげるから」

シアン達はもう無人島ではない所まで来ていた。ハン・デイ・ファースティ大陸の一つに、シアン達は移動していた。

「ねえネオにーちゃんの事待っているよね？」

セクトが心配そうに聞く。体力の方はすっかり回復したようだ。

シアンとティアはそれぞれどこでは無く、これからどうするべきか悩んでいた。

「食料はいいとしても、他に色々いるものが出てくると思っわ」

「そうですね。やっぱり自分の目で見てみないと」

「かと言って人間達の前に姿を表す事はできないし…」

「魔動士達がいると思いますから魔道でごまかす事もできないでしょうから」

セクトはむっとしたように、大声で言った。

「ねえ、どうするの!?!?」

その声に、木に止まっていた鳥が飛び立った。

「セクト。うるさいわよ」

ティアが耳を押さえながら言つと、セクトは今にも泣き出しそうな顔になった。

「だって…ネオにーちゃんも世界救済の旅に、来てくれるって、言つて、くれたのに。ヒック」

セクトはしゃくりあげながらティアをじっと、見上げる。

「…なんかネオはそういうのとは違う気がする」

その言葉にシアンがはつとしたように、ティアに言った。

「ティアさんそんな事を言つては…」

「…！ねーちゃんのばかっ！！」

それを聞くと、セクトは羽を飛ばたかせて行つてしまった。

「ティアさん、セクトが行つてしまいましたよ？」

「あの子なら大丈夫よ。妖精族なのだからすぐに戻ってくるわよ」
少し冷たげなその口調に、シアンは眉をひそめた。

「どうしたんですかティアさん。何かあつたんですか」

「別に」

そう言つとそっぽを向く。

シアンは取り付く暇もなく、途方に暮れている。と、ティアが一人でさっさと歩いて行つてしまった。

シアンは数瞬迷つてから、ため息を一つつき、空へと飛んだ。

幸いここは街道ではなく、山道だから人の姿は無い。はずだったのだが。シアンは木陰に動いた影を見落とした。

シアンは魔道でセクトの気を探りながら木々の間を飛び、セクトを見つけるとそちらへと向かつた。

「なんだよ…ねーちゃんのバカ。あんなに言わなくてもいいのに…」

セクトは悪態をつきながら、高い木の上にいる。鳥が何羽か木々の

葉を散らしながら、落ち着きなく飛び回っている。

「…ヒック」

セクトはしゃくりあげ、辺りを見回す。

他の樹上が見える。色は緑色だが、黄色く染まっている葉もあった。セクトは、高い樹上にいると家に帰りたくなかった。確かに木々は、自然の匂いがするけど故郷の匂いとは違う。

下を向くと出そうになる涙を拭った。風があたりの葉を揺らす。ざわざわと心も同じように不安定に揺れる。

セクトはどうするでもなく、ただ少し切なげに樹上を見ていた。寂しくなった胸が、なんだか虚し過ぎて熱くなった。

「ネオにーちゃん…」

顔で笑っていたけど、世界救済なんて簡単に言える事ではない。なのに、ティアときたら…

「…ねーちゃんのバカ」

セクトは目を擦ると、戻る事にした。ここにいると余計危険だからだ。本当は戻りたくなかったけれど、仕方なく戻る事にした。

セクトが戻ろうと後ろを振り向くと、目の前に人が立っていた。

いつからそこにいたのだろうか。いや、それは人なのだろうか。空に浮いているし、瞳の色も黄紫だったのだ。その男は、セクトをじつと見て、何も言わず片手をかざした。セクトは呆然とその動作を見ていた。そして、男のかざした手から閃光が迸った。

「セクトっ！！」

ティアははっとしたように、後ろを振り返った。

草が鬱蒼と生い茂り、木々が風に揺れてざわざわとなる。エアドラスの森とは違う匂いがする。

エアドラスはもつと木々が森を覆い、どこまでも緑に揺れて何よりももつと優しげな光だった。ここは木々が少なすぎる。ティアにとって木、草花は英知であり教神である。

だから余計に感づいた。

先まで何も感じなかったのに、今はつきりと感じた。

(今のはもしかして…)

ティアは段々と不安になってきた。やけに心臓の音が大きく聞こえる。目を細め、落ち着こうとしたが、それでも収まらなかった。

(シアン…セクト…)

ティアは走り出した。

いつの間にか鳥の囁りが聞こえ無くなっており、周りは風に揺れる葉ずれの音以外静かだった。空を見上げると、そこには変わらず青い空が広がっているだけだった。

男は無表情のまま、右腕を押さえていた。その顔には苦痛など浮かんでいなかった。ただその黄紫色の瞳で、自分の邪魔をした者を見ていた。

「にーちゃん……」

セクトは呆然と、自分を庇うようにして立っているシアンを見た。

「大丈夫ですか？」

視線を前に据えたまま、シアンはそう尋ねた。

「うん…」

セクトは自分に何が起こったのか、そのとき知ったのだ。殺されようとしていたのだ。間違いなく。

(眉一つ動かさないか…)

今の魔力で、一人確実に息の根を止められるものだった。シアンは、何も言わない不思議な色の瞳をじつと見る。

「退いてください。…と言っても無理でしょうね」

しかし、男は喋ろうとしない。

「あなた達は何が目的のですか。この世界を滅ぼして何をするつもりなのですか」

シアンは静かに、抑揚の無い声で言った。でも、本当は体が震えてしまいそうだった。それでも、男は口を開こうとはせず、ただ黄紫色の瞳を妖精族に向けただけだった。

その何の感情も浮かんで無い、血の通ってないような目に捉えられ、セクトはシアンの陰に隠れた。

「この子は関係ありません…手を出さないでください」

男は、すつと腕をかざす。標準はシアンに向けられる。

シアンは身構える。男は眉一つ動かさず、呪を絡ませた。

「な……」

シアンは自分の防御印が間に合わない、咄嗟に片手を突き出す。セクトが前印に施そうとしたが無理だった。シアンの印さえ完全にできていないのだ。

術は破られ、シアンは避けきれず横に飛んだ。避けた閃光は、辺り一面を一瞬のうちに焼け野原にした。

後ろを振り返る暇もなく、次の攻撃がくる。

「我　テー・デインより名を授け汝を還種としてエサ・ダ・ファージェア　無を願う！」

なんとか、古代呪文の魔動を男に向かってとばした。しかし、それさえも男の防御壁によって阻まれる。

シアンは口の中で舌打ちする暇もなく、セクトを庇うので精一杯だった。

「…く」

魔動を使わない、なんて言っている場合ではなかった。

殺らなければ、殺られる。

シアンは歯噛みしたかった。段々と息があがってくる。防御印ができないのは辛かった。

「我　請う」

肩で息をしながらシアンは、左の人差し指と右手の薬指を組む。

「総ての常軌を無に帰すように全能なるレジエ・バンデの御霊において清き吐息を世里に翔けさせよ　リジエーン！！」

その時、辺りにものすごい風が巻き起こった。嵐が巻き起こり、時化のように僅かに残っていた木々が激しく揺れる。風によって一面燃え盛っていた炎が、あっという間に消えた。

男は乱れた髪を払いもせず、ただ魔術退却の印を唱えた。しばらくしてから風は治まり、辺り一面の焼け野原が残り風によって揺れているだけになった。

そこには、もう風の民の姿はなかった。

「戻るだと？お前は何を一体考えているんだ」

「俺の意思で決めた事だ。あんたは黙っててくれ」

「…ふざけるな。自分の行動が村全体にどう及ばすのか考えた事あるのか？今の状況を考える」

「考えたさ。考えて出した結論だ」

顔の整ったフリリップ族の男は、つかんでいたネオの胸倉を離す。

ネオは壁に背中を打った。

「俺達が受けた仕打ちを考えてみる。それは決して許せる事ではない。なのに、お前はここを出て行くと？」

「兄さ…」

ネオは途中で言葉を途切らせた。

兄の頬が、濡れているのを目にしまったからだ。

「…父も人間の手にかかって死んだ」

「違う。父さんは病気で…」

「父は人間から受けた傷が元で死んだんだっ」

兄は振り向きネオを睨む。その整った顔に今は怒りよりもむしろ、哀しみが浮かんでいた。

兄は涙を拭い、ネオの茶色の瞳を見入る。ネオの肩に置かれている手が震えている。

「解かってくれ、ネオ。今、外の世界に戻る事がどんなに危険か…」

ネオは閉じていた目を開いた。数日前の出来事が昨日のように感じられた。黙って出て行くつもりだったのに、兄に呼び止められたのだ。

ネオは普通に軽く言っただつてもりだつたのだが、兄は激怒した。

「行くなよネオ。父のことを考えるなら……」

しかし、ネオは出てきた。自らを追い出した地へ。

魔力を持たない種族としてできる事など少なかった。それで蔑んだ種族達はあまりいなかったが、優劣の視線を向けられた事など数数え切れないほどあつた。

（兄さんは何も解かっちゃいないんだ。…逃げてばかりじゃだめだと言つ事を）

なぜ、はなから何もできないと決め付ける？それでは滅びを待つだけだ。

「証明してやる。魔力がなくても世界が救えるって事をな」

時代は風の如く絶え散る

涙を渴望するのなら君をみぬ

まだ瞳をみぬのなら風をよべ

白き風はわれをエイエンに誘つ

心を 時を遡れ

君はまだ夢を無る

かの地はいまだに翼がなく

消えゆく五芒の知

知れゆく追えぬ死

そして ゼノハンスの風

雪情詩はいまだただひとつ

われは故に郷す

今はまだ望地がみえぬ

だが 人地は

巡りゆく遠季を追つ

涙を愛つため

しらぬのはただ 約束の地

すべてはまだみぬ者の刻のために 帰すべき母をさがし 輪廻を巡す

旅人は約束の地へ旅立ちぬ
ハピユラスの針時がわれを請ふ

「それは？」

「昔、叔母に聞いたことがあるの。…本当の家族ではないのだけど、でも、何度も膝の上で聞いた」

ティアは謳い終わると、立ち上がった。

「約束の地…」

「そこには、すべてがあると伝えられているわ。人が…忘れてしまったものがそこに集まると」

シアンは前方に目を据えた。眼下には、灯火に照らされている街が見えた。

もう、未開の地ではない。生きて生活している人々がいる。あの光も、風にのって流れてくる匂いも人が生きている証だ。

シアンはぎゅっと目を閉じた。

冷たい風が白銀の髪を揺らすと、すべてが夢に視える。

森の谷間に抱かれるようにして、ケ・アスクの街が見える。西からの風に、木々がざわめきを上げた。暗い雲が早く流れ、アル・ヒイティアとラグ・ヒイティスの双月が見えて、隠れる。

月光によって、風の民とエルフ族の姿が岩場に影を落とす。まるで彫刻のように見えるそれらは、風に髪を孕ませ自由にさせていた。

「…僕の記憶も、そこにあると思いますか」

静かに、だが風に消されないように澄んだ声でそうシアンは訊いた。「バレス・ハリツテスは伝説ではなかった。ラテンシエルにそう記されているの。それまで誰も信じようとしなかったのに、東へ飛び去る神鳥サーネキツカスの姿を見てから人々は信じるようになったの」

ティアは視線を変えずに違つ事を言った。一度赤い宝石のような瞳を伏せた。

「約束の地を」

風が通り抜けて、ふと耳に残る。

「バレス・ハリツテス？」

「1000年前に生きた術師者だと云われているの。約束の地を創った、とも」

「創った？」

「そう……だけど」

二つの月が雲に隠れて見えなくなった。

「そんなのは愚創だと。今では、そう言う人々もいるの。なぜなら誰もかの地をみていないから」

「でも、神鳥サーネキツカスは？」

「神鳥もすべて空想だと。すべては幻だったのだと」

「それでも、神鳥を見たのですよね。何故それなら信じないのでしょいか」

「昔はそうだ、と伝えられていても伝説は変わるものでしょう？時代が変わると、一緒に。1000年もたてば、物語は終わってしまうもの」

「終わる……？」

「それは仕方のないこと。誰だっていつかは忘れる」
同じ時の輪は儚い夢物語。

「では」

シアンはティアを、見ないで言った。

「記憶は無くしたままの方がいいかもしれない？」

ティアはその言葉にはっとなって、シアンを見る。

「どうせ忘れられてしまうのなら僕達が今やっている事は全部、無駄だと。やるうがやるまいが同じ事だと」

「……………」

「1000年前に、かの地を創って忘れられたように僕たちの今、この瞬間も同じ歴史に消えると。そういう事ですよ」

風が涙を流しているかのように荒れている。木々がざわざわと吼える。

「風はすべてを見てきたのですよね。でも、誰にも掴む事ができない。そして、僕たちもいつかは消えてしまうのですよね。そして風と共に流されていってしまおうでしょう」

「…シアン」

「永遠は巡らないから…」

灯火が一つ消えた。風に乗って流されていた匂いも無くなった。

ティアは黙ってそれを見つめている。あの街には、暖かい生活がある。何も知らないで人々が生きている。明日も同じように繰ると思っている。

それは平凡で退屈かもしれない。だけど、ティアにはそれは憧れとしか映らない。

「私は違うと思う。確かに忘れられていく事はたくさんあつて数え切れないと思う…でも私たちが、あの空に下にいる事で何もかも忘れ去られる事は無いと思う」

「え？」

灯火がまた一つ、消えた。

それまで、顔を上げなかったシアンがティアを見た。まるで、何か違うものを見るかのような顔で。

ティアは微笑んだ。

「だって、あの空が無くなってしまえば、忘れる人々もいなくなってしまうもの」

「……………」

今度はシアンが黙る番だった。

「忘れられたつていい。でも、歴史はちゃんと覚えている。私たちがやってきた事を。地の記憶は確かでしょ？」

「でも…」

「心に残らなくてもいい。でも1000年後に風が覚えていてくれるのなら、私はそれでいい。だって、風は永遠に巡るから」

地も、空さえも越える。

それに応えるかのように、風が強くなった。木々も一層しなる。

赤い髪が乱れる。ティアは指さした。北を。

「答え」はあの約束の地にある。北へと。忘れないで、シアン。私たちはあなたの後ろにいるから」

その時、重たい雲が割れて月光が地を照らした。ティアがまるで女神のように見えた。赤い髪が鮮やかに映え、時間が止まったかのようだった。吹きすさぶ風を感じなくなった。

シアンは自分の中で緩々と何かが流れていくのを感じた。目頭が熱くなる。

シアンは立ち上がった。

ざあっと、風が変わった。髪が後ろになびく。

「何があっても僕は行かなくてはならない」

シアンは北を望んだ。北から何か強い意志を感じる。

行けるだろうか。北の果てまで唯一の風の民が。

もう、思い出せない親を思った。家を思った。

…夜は長くて短い。あのアル・ヒイティアとラグ・ヒイティスは世界に何が起こったかを見ていただろう。しかし、道を示してはくれない。自分の足で行かなければならないのだ。

かの地を望めば、本当に行けるのだろうか。風が向かい風になるかもしれない。

でも。

それでもシアンは、それでいいと思った。

誰もが忘れてしまっても。風が吹かなくても。シアンは、今。

歴史の上に立っている。

あの雲も、海も、地もすべてが記憶となるのだ。それは膨大で、一人が持てるものではない。

だから、誰かがいる。

前方に目を向けると、眼下はほとんど灯が消えている。光がない場所は、ひどく不安になる。風が吹くと冷たくなる。だけど、追い風は違う。

哀しくて立ち止まりそうな時、そっと背中を押してくれるのだ。

この地に立って、前を見る。

よく身に馴染んでいる風が涙を誘った。だけどシアンは泣かなかつた。泣くのは、まだ。

もしかしたら、風は無くなった何かをシアンに伝えているのかもわからない。…故郷を。

そう思うと首にぶらさがっているものが重たくなった。それでも、立ち止まらない。北へと行かなければならない。

シアンは一つ息を吸った。そして吐き出す。

「… 生きます。風はまだ止まないから」

7・運命

… よ。生きる覚悟はあるか？
前にも聞いた事がある。その言葉をどこかで…

初めてアリバ・ハノクラに会った時、他人のような気がしなかった。まるで昔、どこかで会ったような気がしてならなかった。

(昔の記憶…)

本当に封印されたのだろうか？今でも信じられない。
信じられるはずが無い。風の民が滅んだ事など。

「シアンさん。どこでそんな名手のような弾きかたを覚えたのですか」

「僕には分かりません。でも、ずっと弾いていたのは記憶がない頃の事だと思います。目が覚めてからは楽器に触らなかったので」
「久しぶりに屋根のある所で体を休めながら、シアンは曖昧に答えた。もう夜半も過ぎた頃で、セクトは体を丸めるようにして眠っていた。この宿に泊まる前、ホープを呼び出し色々と指導してもらい、人前で芸を試してみせたのだ。顔を隠した珍しい集団は、すっかり町の人達の噂となった。」

宿屋の主人は快く迎え入れてくれたのだった。

シアンは窓辺に座った。

「でも、シアンさんの爪弾きは素晴らしいですね。きっと師はさぞ名のある人だったんでしょう」

「…多分そうだろうと思います。でも、ホープさんの詩もすごいですね。誰かに習ったのですか」

「私は小さい頃に何度か…故郷にいる父親のような人に少し習いました」

「少し？」

「養父は、病気がちだったんです。何年と立たないうちに逝ってしまっ……」

ホープが少し俯きがちに答えた。

「そうなんですか。父が……」

そう言うのと、シアンは外に目をやった。

自分には記憶がないのだと思い知らされる。父や母がいた温もりも何も無いのだ。

「……シアンさん」

ホープがじつと、シアンの横顔を見ながら口を開いた。

「過去も、歴史も覚悟がなければすべてを受け止める事はできません。シアンさんは覚悟がありますか？ 思い出したくも無い事も、忘れてしまいたい事も引きずってまで」

「ホープ……さん？」

シアンは真剣な人犬に戻った顔で、自分を見つめてくるホープを見つめ返した。

「シアンさんは風の民だと言う事を、自覚していますか」

風の民……

ただ、異種は人間が神をその玉座から引きずり降ろし、神々が滅んでいくのを見ているだけ……

カミハモウホロブシカナイノダ

風翼神リーヴァンがあんな鷹の姿になったのも、唯一の風の民に記憶を託したのも、すべては人間達によるものだった。

「……知っていますか。この世界から魔道という法則が失われつつあると言う事を」

「え……？」

「神とは神聖にして絶対なるもの。それが人間によって墮ちている事の意味するものは何か。……我々の破滅です」

「破滅……」

シアンはいつの間にか、立ち上がってホープの話聞いていた。

「そうです。あと何千年、いや何百年とたたないうちにこの世界が

ら魔道というものは消滅します。…人間達がもたらした事はつまり、歴史が滅ぶ事を意味しているのです」

「……………」

そこで、ホープははっとしたようにシアンを見た。

「すみません。シアンさん…でも…」

ホープはまた口を閉ざした。

「…今夜は咲月ですね。こんな夜はよく、昔の事を…思い出します」
シアンは犬獣が居なくなつた後も、そこに佇んでいた。

双月が一つに重なり、もともと一つの月だったかのように、静かに見下ろしていた。何もかも知っているのに、何も知らないみたいに変わらず夜空にあった。

シアンはふと本を読んだ時に、月の双子の事が書かれていた事を思い出した。

アテルス・ヒインは太陽神ソウエルの怒りに触れ、その身を地上に墮とした。だから夜空には双月しか無いのだと言う。

(アル・ヒイティスとラグ・ヒイティア)

彼らはその姿を月に変え、欲に塗れた手に触れさせないようにしたのだろうか。

月があんなにも遠く感じる…

(神はもう、いないのですか…)

いつのまにかそのまま眠つたらしく、まだ太陽が空を染め始めた頃に目が覚めた。自分は寝る所があるうがなかるうが、野宿と変わらないような寝方をしている事に、シアンはなんだかおかしくなつた。シアンはそつと、セクトを起こさないように宿屋を出た。

シアンさんに襲ってきたという術者の事が気になります。もしかしたら、その術者はかなりの上者かと思われれます。いや、もしかしたら元かもしれない。…魔力を組み合わせる事は我々でもとても困

難なものですから。

昨日、ホープが言っていた事をシアンは思い出した。シアンを狙ったのはかなりの魔動師だ。あんな高等なものをいとも簡単に扱える筈が無い。しかし、一つだけ解からない事がある。

なぜ、シアン達を襲ってきた時にそのまま追いかけて来なかったのかだろうか。あの力を持っているのなら、そんな事難もなかった筈だ。

気をつけてください。いつ何時、どこから見ているかも分かりませんから。

しかし、魔気を放つものなら気配にはすぐに感づく。

しかし、セクトが言うにはまったく相手の気配を感じ無かったという。魔気を帯びた者なら気配を感じないはずはない。

それとも…それさえも消してしまうものなのか？

前、相対した時ただならぬものを感じた。魔力の発動も感じた。が、しかし…

あれはただの人間だ。神でも異族でもない。だが、そのただの人間に世界が動かされている。

風の民よ、すべてはそなたにかかっている。

こんな事でいいのだろうか。とても足元にも及ばない相手にどう對抗するのか。風の民を絶滅に追い込み、神を墮したのに…

シアンは背筋が寒くなるのを感じ、部屋に戻る事にした。

「シアン？」

突然立ち止まった連れに、ティアは訝しげに声をかけた。

「にーちゃん、どーしたの？」

セクトも尋ねてきた。

「いえ…」

なんとか笑おうとして、上手くいかず俯いた。

生きる覚悟はあるか？

人間を殺さなければならぬのだ。この手で。

自分の記憶もない者が、過去のあるものを壊すことになるのだ。自分にできるのか。

「何かあつたの？」

ティアが覗き込んできて、シアンははつとなつた。

「本当に、なんでもないんです…すみません」

こんな事を言えばティアに「そんな事悩んでいてもどうにもならないでしょ？」と、言われるに決まっている。

「早く行かないと、人間達がここを通るわ」

朝早いとはいえ、街道を通らない人間がいないとは限らない。

「そうですね。すみませんティアさん」

しかし、それでもシアンは浮かない顔をしていた。と、何かの気配を感じた。

「あれ…？この感じ」

そう言うや否や、シアン達の前に樹上から何か降って来た。

「…！？ネオっ」

「よっ！久しぶりだな」

……歌が聴こえる。

昔から知っているような、どこかで聴いた事があるような歌だ。

何度も耳にしているような。

…子守唄？

誰かの腕に抱かれて聴いていたのかもしれない。だが、考えるのも億劫でもう目を開けたくなかった。

それでもその歌は止むことなく、まるで奥の深いところで眠っているかのように聴こえてくる。

知っている…この歌を私は覚えている。

ごめんなさいピュア……

誰かが泣いていた。
涙を流していた。

ただ、泣きながら謝るだけで私はそれを見ていた。

… 誰？私を呼んでいる。目を開けなくちゃ。

でも、この歌を聴いていたい。このまま眠っていたい。

けれど、あの声はどうしてだろう。涙が…出そうになる。胸が詰ま
って苦しくなる。

名前を呼ばれただけなのに、体が熱くなる。誰だろう？すごく懐か
しい。

暖かい、この感情は…？

「ピュア！！」

はっと目を見開き、きよろきよろと首を巡らして目的の姿を探した
が、そこは見た事も無い部屋だった。落ち着かなげに胸の前で腕を
組む。

(ここはどこ?)

黒い瞳を瞬かせながら、立ち上がると少しよろけた。

目をしばたかせると、少し痛かった。

どうやらずいぶんと眠っていたらしい。寝ていたのは質素な寝台で、
部屋には何の飾りもなく、粗末で侘しかった。

「ホープ…」

耳をくすぐるような、鈴を転がすような声が名を呼んだ。確かに自
分を呼ぶ声が聞こえたのだ。

「どこにいるの？」

しかし、何の返事も無かった。

何の飾り気も無い部屋が、一層寂寥感を煽る。

部屋にある小さな窓からは、わずかな光が射し込んでいた。が、手
の届かない所にあるので、窓からは外の景色が見られなかった。

扉に手をかけてみたが、外から鍵がかかっていた。

と、その時猫の形をした耳が素早く音を拾った。
階段を上るような靴音だ。

(二人…?)

どうやらここは高い場所にあるらしい。

やがて鍵を開ける音がして入ってきたのは、頭から黒い外套を羽織った人間だった。そしてその後から入ってきた者に、その円らな瞳がさらに丸くなった。

「お母……さま……」

その時、微かに何かを感じた。草が風に揺れてわずかな音をたてるような、聞こえるか聞こえない程の、本当に小さなものだった。

いつも耳をそばだてていた様にしていた為、ホープはすぐに行動を起こした。

ピュア。

呼ぶ声がした。自分を求めている声。

気のせいかもしれない。追い求め、そうであってほしいと思っただただの願望かもしれない。だが、今までよりはまじだった。何の手がかりもなくさ迷うよりも…

封印が解けたのだ。誰かが解いたのかもしれない。ホープは何でもいいから、その封印を解いたものに感謝しなかった。

ホープは強く目を瞑り、愛しい者が側から居なくなった時の事を、思い浮かべていた。

村中に掛火が焚かれ、まるで昼間のように辺りが照らされている。

そして、灯火が社までの道に沿って点されていた。それはまるで炎の道のようなだった。

先代役は毎度一人で山を登り、社へ行って聖礼をする。村の人々は先代役となった巫女からの、占言を待っていた。

村の人々は浮足立っていて、まるで村中がお祭りのようだった。人々はそれぞれ華やかに装い、先代役の誕生を待ち望んでいた。しかし、村人はみな人とは異形だった。

尖った耳、尻尾。背中から動物の羽が生えている者もいた。

「村の皆があなた様を一目見ようと、集まってきましたわ」

「そう…」

手伝いにきた狐族の工力が、窓を覗き込みながら嬉しそうにそう言った。

それに対し巫女装束に身を包んだ猫族のピュアは、心元ここにあらず、といった感じで落ちつかない返事をした。その姿はまるで、本当の神のみ使いのような姿見なのに、ピュアの表情はひどく落ち窪んでいた。

工力はそれはピュアが緊張しているせいだろうと思い、礼をして部屋を出て行った。

ピュアは自分の姿を鏡に映していなかった。

見たくなかったのだ。

こんな勝手に巫女にしたてあげられて、嬉しい筈が無い。ずっとピュアは名を呼び続けていた。

(ホープ)

ピュアは唇を動かして名を呟いた。

その時扉がノックされて、美しい白毛並みの猫族が入ってきた。

「ピュア。どうしたのです？そんな顔をして」

「お母さま。…いいえ何でもありません。少し緊張しているだけです」

エルミナは口調を改めると、ピュアの瞳を真っすぐに見据えた。

「ピュア。私はあなたの事をこうやって見送る事を誇りに思います。

私の…ピュアが、この役を継ぐことにとても喜びを感じます。ピュア」

ピュアも真っ直ぐに、自分の母の顔を見返した。

「あなたはどこにいても……例え、もう二度と会えなくなるとしても、あなたは私の娘です。その事をいつも誇りに思うのです」

ピュアは涙が出そうになるのを堪え、はっきりと頷いた。

「はい。お母さま」

エルミナは巫女装束姿のわが子を、そっと抱きしめた。やがてピュ

アの手を取ると、エルミナはその手に何かを握らせた。

「お母さま、これは？」

「私たちの事を、これを見て思い出して。何があっても私達がいま
すから」

「でも、お母さま。もう二度と会えなくなる訳でもないのに、どう
してこれほどまでに？」

だが、エルミナは悲しそうに笑うだけだった。ピュアには何がなん
だか解からなかった。

それと同時に、不安になってきた。母の顔がすべてを物語っている
かのようで…

ピュアは不安なまま、一人灯火に照らされた道を登っていた。村の
皆から祝福を受けたが、そこにホープの姿はなかった。

謝りたかったのに、そんな事言う暇もなかった。

巫女となる前に、ただの猫族のピュアとして会いたかったのに。
周りは昼間のように明るいのに、気持ちは深く沈んでいた。

三日前、ホープに「私巫女になりたくない」と言った途端、ホープ
はピュアを避けるようになった。

ホープとは兄妹のように今まで一緒に居たが、一度もケンカなどし
た事がなかった。ホープはいつも優しく、自分の事を気遣ってく
れていたのだ。

ピュアは今更ながらにその事に気がつき、堪らなくなって座り込ん
だ。手についている腕輪が虚しく音を起てた。

あいたい……

「ホープ……！」

もうこのまま会えなくなるなんて嫌だった。巫女になんかなりたく
ない。

「なんでそんなところで座り込んでるんだ？」

ピュアははっとなって、思わず顔から手を離れた。

その声はいつも側で聞いていた、優しく穏やかなピュアの一番大好

きな声だった。

「ホープ！」

ピュアは迷わず、ホープの胸に飛び込んだ。

「どうして……ごめんなさい……」

それ以上言葉が続かず、唇を噛みしめて嗚咽を堪えた。いつのまにか涙が溢れていた。

ホープは、ピュアを胸に抱いたまま耳元で言った。

「ピュア、よく聞いてくれ。さつき村長から聞いたんだが、月守族から予言があつたんだ。…ピュア、巫女となつたお前を人間達が攫いに来ると」

「…え？」

ピュアは思わず顔を上げた。ホープの顔は真剣で、すぐ近くにあった。

「俺はお前を手放したくない…ピュア」

一層手に力を込める。

その時灯火が一斉に光を失い、炎の道が消えた。

「ネオにーちゃん！」

セクトがネオに抱きついた。

「しっかし、ひどいなー。俺を放っていくなんて」

まさか忘れていた、とは言えないシアンであった。ネオとの約束の事など、すっかり頭から抜けていたのである。

突然、上空から何かが降って来た。地面にガガッと、突き刺さるような音がする。

「何っ？」

ティアの訝しむ声にシアン、セクト、ネオが何かが飛んできたであろう方を見た。

シアンは横目で地面に刺さっている物を見る。

(剣？)

と、それらがシアン達を囲うように光り出した。

「…！これは護封陣？」

光の柱に囲まれ、その光が消えるとシアン達はその場に倒れていた。すると、木の上から人影が降りて来た。

「覚悟！」

手に短剣を握り絞め、シアンの胸元を狙ってそれを振り下ろそうとした。

「ぬっ！」

だが、何か飛んで来て思わず使者は、それを振り払っていた。

「まさか動けるとは」

「この印はどうやら術者の力を吸い取るようだが、あいにく俺にはそんな力なんて無くてね」

立ち上がり、使者に小石を投げ付けたのは、ネオだった。

「そうか…それは迂闊だった」

言うや否や使者はだっと、跳び出した。

ネオが身構える。と、使者が横に跳び剣を投げた。

（ちっ！）

飛んで来た剣を全部避けたが、足首を払われた。

バランスを崩して倒れたかけたネオは、それをバネに起き上がる。間合いを取ると、足を後ろに引いた。

「あんだ強いな」

「当たり前だ。この為に命を懸けているんだ」

（命懸け…けどそれは俺だつて）

使者が何事か唱え術が放たれると、ネオは相手の懐に入り込み当て身を食らわせようとしたが、弾かれた。

（ちつきしょ…）

使者は剣を両手に構え、その剣先に炎を点らせた。

すっ、とネオの懐に一瞬で入り込み勢いそのまま剣で刺した。

「…っ！！」

だが、使者は思わず剣を落としてしまった。

ネオは構えていた手を下ろした。

使者が腕を押さええうづくまっている。

「印を解いても駄目なのかと思つたぜ」

「すみません…回復に時間が掛かってしまいました」

シアンは今の術だけでかなり辛そうだった。シアンが使者に攻撃して、ネオを助けたのだった。

「そうか…あの時印を解いたのか」

ネオが使者の懐に入り込み、跳ね返された時に、ネオは印の要となつている剣を引き抜いたのだ。

「ああ、俺じゃあなたに叶わないんでね」

使者はゆらりと立ち上がると、残った腕を翳した。

「シアン！」

使者はシアンを狙つたが、空に出来た防護印によって阻まれた。

「ティア！大丈夫か」

「ええ…何とか」

「くっ……」

「やはり無理だったようだな」

その時、突然聞こえた声に皆が樹上を見上げた。

「少々厄介な事になってな……」

使者はそれだけ言うと、樹の枝を伝って行ってしまった。

「ふん……腕利きだと思ってたのにな」

一人、動師が使者の後を追って行った。

(仲間割れか……?)

「風の民よ。我らの力はある物では無いぞ」

「……………」

シアンが構える。

「シアン……体が」

ティアが心配そうに声を掛けた。シアンは只、そんなティアに笑いかけただけだった。

「あいつら……何なんだ？」

「……分かりません。ただ、僕を狙う者達と」

その時、一人の人間が魔術を唱えようとした。それを逃がさずネオが石を投げると、上手い事顔にあたった。

「う……」

「ネオ、危ない！」

人間の一人が炎を放ち、ネオに当てようとした。が、それはネオが避けた後ろの木へと燃え広がった。シアンが術で攻撃したが、避けられた。

人間達はじりじりと、距離を狭めて来た。

「ふん。魔術がなきゃ何もできん無能な輩どもめ」

ネオが思いつきり悪態をつく。

と、その時一人の男が喋った。

「……無能なのはフィリップのお前じゃないのか。魔術も扱えん種族などただのゴミでしかない」

「なんだと？」

思わずつかみかかりそうになったネオの気配を感じ、シアンは片手でネオを制した。

「この前の方ですね？ハンスー族の家にいた」

セクトとティアが、はっとしたようにシアンを見た。

「一体、何が目的なのですか。あの種族を絶滅までさせて…それほどまでにこの世界が欲しいのですか」

シアンは静かに、残酷な微笑を浮かべている男を見据えた。すると男はさもおかしそうに笑い出した。

「何がおかしいのですか」

「お前は本当に何も知らないのだな。風翼神から何も訊かなかったのか？」

「なぜ それを…」

「お前は知らないのか？風の民を滅ぼしたのは、欲に目が眩んだ人間達をけしかけた、アリバ・ハノクラだという事を」

「な…？」

シアンの瞳が大きく見開かれる。

「嘘だ！じつちゃんはとても優しくかったよっ」

セクトが声を張り上げ、その言葉を否定しようとした。

「ふっ…風の民よ。残念だったな。お前で風の民というものは滅びる。この世から抹消されるのだ。神の時代など古い。人間が支配する時代になるのだ」

「くっ…」

シアンは下唇を噛んだ。

それが怒りのためか、裏切りによる哀しみの為なのかは分からない。それとも…まだ信じているからなのか。

人間達が一斉にシアン達に向けて手を構えた。シアンも腕を組む。しかし、動師達の方が一瞬早かった。

一斉に魔術が光となり、シアン達に浴びせられる。シアンは咄嗟に、近くにいたティアを抱いて空に上がっていた。

爆発音と共に光が弾けた。眩しいくらいの光なのに、すごい音だっ

た。煙が上がる。

「ネオにーちゃんおもしろい」

セクトが薄羽蜻蛉の羽を懸命に動かし、ネオの首根っこを掴みながら苦しそうに言った。

「はな…せ…！く…くるし……」

ネオは懸命に咽元を抑え、足をじたばたさせた。

「あばれないですよ」

人間達が空に浮かび、シオン達を追って来た。

「げえ、オイラもうダメ」

シアンは片手で指を組み始めた。

「シアン逃げるの？」

「そうです。このままでは皆死んでしまいます」

「シアン！後ろ」

ティアが警戒の声を上げた。一斉に攻撃が始まったのだ。

「アデイスト・デューハス！」

相手よりも早くシアンは呪文を唱えた。

肩で息をしながら、人間達を見る。動師達は咽を押さえて呻いていた。

「なにこれ？どうしたの」

「…彼らの周りだけ空気の流れを変えました。しばらくこれで時間が稼げます。セクト」

セクトが羽を懸命に羽ばたかせながら、返事をした。

「ネオとティアさんと一緒にここからなるべく遠くへ逃げてください。こいつらは僕がなんとか足止めますから。ティアさん飛べますよね」

「ええ。やるわ、でも…」

シアンはそんなティアに少しだけ微笑み、腕に力を込めた。そして耳元で何か囁いた。

やがてティアを離すと、もう後ろを振り返る事はしなかった。

「シアン…？」

ティアは少し戸惑っていたような顔をしていたが、意を決めるとセクト達の後を追った。

シアンはその間、体中が風を感じていて寒かった。何だか寂しいのは…気のせいではない。

前方に目を向けると苦しそうにしていたが、印を組もうとしている者もいた。シアンは、ハンズー族を滅ぼした男がいない事に気がついた。

(逃げたのか…?)

そう思っただけを見回すが、どこにも姿が見当たらない。と、背後から悲鳴が上がった。

見ると、あの男がティアに刃を向けていた。

「ねーちゃん…!」

セクトが叫んだ。どうやら背後を取られたらしい。ティアが抵抗して暴れるが、びくともしない。

「風の民、このエルフの命が惜しくば動くな」

「くっ…」

「シアン、こいつらの言う事なんて気にする事無いわ」

シアンはじりじりと、背後から殺気が押し寄せてくるのを感じた。

「ティアさんを離せっ、侵略者め!」

その言葉にびくっ、と男が反応した。

「ほう…? 私らが侵略者だというのならお前達は何だと言うのだ? この世に存在してはならない異端者め」

「……………」

その事態を、腕を組んで見ていたネオがぼそつと、呟く。

「むっ! お姫様のピンチなのに助けられないエールって…」

「ネオにーちゃん……………」

セクトが涙目になって叫ぼうとしたが、声が出ない。どうやらもう限界のようである。

「分かったよ。たく、これだからガキは…セクト」

答える代わりに、セクトは羽音を響かせる。

「離せ。その手を離してくれ」

「……え？」

セクトが驚いたように、下目でネオを見た。

「重いだろ。その手を離してくれ」

「でも……！」

「いいから！」

そう言うとネオは体を揺らした。

「わっ……あっ！ネオにーちゃん！！」

セクトが、ネオの服を掴んでいた手を離してしまった。

「うわぁ……ん！！ネオにーちゃん！！」

ネオが落ちていく。

セクトが慌てて後を追った。

「ぐ……」

突然、ティアに刃を向けていた男が腕を緩めた。

ティアはその隙を逃さず、男にみね打ちを食らわせ腕の中から逃れた。そして、振り向きざま鞘から滑らせた短剣を、動師に向けて刺した。

さすがの動師も刃を受けた。その短剣は男の左目に刺さった。

「ぐわあああ！」

男は左目を押さえる。押さえた指の隙間から、赤い物がとめどなく流れた。

「……！！」

男は剣を抜こうとし、ティアを睨みつけた。

「貴様……！！」

ティアが少し距離をとり、弓を番えた。

ぎりり……と矢が糸を張る。ティアが狙いを定め、矢を放った。

「へっへっんだ」

ネオが木の上に後足と尻尾でぶら下がりながら、腕を組んでいた。ネオが落ちる前、ティアを掴んでいた男に石を投げ当てたのだ。

「ネオにーちゃん！！」

セクトが飛び込んで来た。

「セクト。悪かったな。だけど泣いている場合じゃないぜ。シアンを助けなきゃ」

「…うん」

シアンは一人で、数人の魔動師と対峙していた。

相手が撃ってくる光の弾を避けながら反撃を省みる。しかし、長い呪文が唱えられないので、威力の低い攻撃しかできなかった。

敵の外れた光球が、音をたてて炸裂する。

巻き込まれた木々から煙が立ち昇り、根本から枝が折れた。

「う〜ん。どうしようか」

ネオが腕を組みながらシアンを見る。助けたいのだが、下手をすればシアンを危うくする危険がある為、無駄に手を出すことはできなかった。

そのうち、シアンの動きが鈍くなったのが遠目でも分かった。

ティアを見ると、まだ矢を番えていた。しかし、今度は魔動師たちに向けられている。

どうやらあの男は逃げたらしかった。

「ネオにーちゃん。にーちゃんをどうやって助けるの？ 防御印でもはる？」

「う〜ん。それはまずいかな。ここからじゃ届かねえし、ヘタすれば相手に隙を与えてしまうかもしれない…あ、弓矢ないか」

「弓矢？ オイラは持ってないけど…」

セクトはちらりと上を見る。

「たのむ。借りてきてくれ」

「うん」

そう言うと、ティアの元へと飛んだ。

ネオはごそごそと胸元から何やら取り出し、それに紐を巻きつけて行く。

それは丸い形で、先の尖っていない石のようだった。石と違うのは、それが透き通るような緑で、日の光に煌めいた事だった。

「これを持ってきといて良かったぜ」

そして紐の端を、セクトが持ってきた矢先に括りつけた。外れないように引つ張ってから、それまで成行きを見ていたセクトに話しかけた。

「ここに何の魔力でもいい。思いっきり込めてくれ」

「え？」

セクトは少し戸惑っていたが、頷いた。

「うん。分かった」

セクトが緑の石に力を込めると、うすい桃色に染まりはじめた。

「セクト。いいぞ、その調子」

そして濃桃になると、ネオが矢を番えた。

「こんな所からあたるの？」

「俺はこれでも村一番の名手だったんだぜい」

そしてきりり、と弓を張る。

「…当たれっ」

矢は一直線に線を描き、シアンを狙っている人間…では無く、灰色の外套へと向かって行った。

「ネオにーちゃん!？」

ネオはにやりと笑った。

「これでいいんだよ」

人間達の対応で手一杯だったシアンは、自分に放たれた矢に目前まで気がつかなかった。

刺さると思った瞬間、突然弓矢についた石が光を放った。

目を開けていられないほどの無数の白光に、シアンは思わず目を庇い、光を避けようとした。

光が止むと人間達が動揺したように辺りを見回した。

シアンは何が起きたのか解からずしばらく呆けていたが、慌てて指を組んだ。

何だか、体が軽くなったような気がする。石は綺麗な薄緑になっていた。

「…終焉なる遠の地よ テフナラスに誓うならばセイバアーを願えよ 緑地の緑淵に還り空虚を醸くわしだせ ハーデイス・ネア！！」
先程の閃光とは比べられない程の光が、収縮して弾け飛んだかのよう
に発光した。

その光の中、シアンに突っ込んで行く使者の姿があった。

目の前には開け放たれた大きな扉がある。

肩で息をしながら黒い獣人は唾を飲み下した。それと同時に、高揚感も押さえ込もうとした。

見上げるほどに大きな塔は、南の沃野を守るようにして、天に向かって聳え立っている。

長きに渡る雨風のせいで、だいぶ壁が傷んでいた。

ホープはそれを、まるで神でも見るような思いで眺めた。

(ここに、いる)

確かに感じてくる。

いつも自分を求めていた姿似が。そして自分を求める声…ずっと聞こえていた。

無理に空間転移をした為か、ひどく体調が乱れていた。しかしそれでも構わず、ホープは扉をくぐった。

(やっと、逢える……！)

また浮かんできた感情を押さえようとしたが、胸の動悸はおさまら無かった。

一歩一歩、近づく度に感じる。白い光が近づいてくる。

ホープは初めて来た場所なのに、まるで導かれるかのように長い廊下を走った。

もう、何の気負いも迷いも無い。やっと、逢える。

夢にまで見た、あの光に。

「ピュア…！」

「どっしりここに…」

白い、気高い猫は今はその顔に、何とも言えない表情を浮かべていた。

エルミナは、その場に崩れ落ちるように跪いた。

「…今更、許してもらえないなどとは思っていません。しかし、私たちにはこうする事しかできなかつたのです……」

「え……？」

ピユアは訳が分からずただ、母の顔を見詰めるだけだった。

自分の母親がこんな事をしているのを初めて見た。

母はいつも毅然としていて、気品に満ち溢れていた。そしてそれは、ピユアの誇りでもあつたのだ。

「月守の巫女から託宣をされた時、私たちは最初式を取り止める事にしました。しかし…式を取り止めれば私たちを、私たちの村を滅ぼすと言われて……」

「……！」

すると、それまで黙っていた黒ずくめの人間が、口を開いた。

「別に先代役となった巫女でなくて良かったのです。白猫の獣人ピユアというものが手に入れば」

口元には歪んだ笑みが張りついていた。

ピユアは恐怖で足元から崩れそうになるのを、何とか持ちこたえるだけで精一杯だった。

「じゃあ…なんで……」

巫女となる式の時に襲つたのか？

「隙がでやすいのはそういう時だと思ひまして。予想通り上手くいきましたよ」

男はさも、楽しみに肩を揺らした。

「でも、貴方達なら村一つ滅ぼす事だつて……」

「おや。私たちがそんな野蛮な事をするとお思いますか？獣人の民達は皆、そのように何でも力で物事を解決しようとするのですか」

「……！」

ピユアが思わず瞳を陰しくすると、男は嫌らしい笑顔を浮かべた。

「私たちは穩便に事を進めたいのです。やがて来る時のために、ね……」
神経を逆撫でするような声で、男がそう言った。

「あなたが目覚めたならやってもらう事があります。白猫のピユア、自分の母親に何か言う事は無いのですか？もう、これから会えなくなりですから」

ピユアはまだ跪いたままの自分の母親を立たせた。そして、そのエメラルドの瞳をまつすぐに覗き込んだ。

「お母さま。私は村の皆を恨んだりなんてしていません。こんなことを言つては不誠実だと言われるかもしれませんが、こうなつてよかつたと思つている自分がいます。…最初巫女に選ばれた時、何とか事務的になろうとしていました。でも、迷いが生まれたのはずっと小さい頃から隣にいた、大切な人の存在でした。その人がいなければ、私は何も思わずに先代役を務めていたと思います。だから、お母さま気に病まないで下さい。私は大丈夫です」

ピユアは自分の首から何かをはずすと、母親の首にかけた。

「ピユア…？」

「これはお母さまの物です。私は何があつても、お母さまや村の皆を忘れたりしません。この首飾りはお母さまのとても大切なものでしょう？お父さまからもらつた…」

エルミナは自分の首にぶらさがつている、真珠がついた金の鎖を強く握つた。

「ピユア…」

エルミナはピユアをその胸に抱きしめ、その涙を必死に堪えようとした。

自分の子供が泣いていないのに、母親が泣くのは別れが辛くなると思つたからだろう。ピユアにもその震えが伝わつてきて、涙が込み上げてきた。

最期の別れだというのに、なんの言葉も浮かんで来なかつた。ただ、名前を呼び合うだけだつた。

「私はあなたの事を心から……愛しています……ピユア」
その言葉と共に、母親の姿がその場から消え、元の飾り気の無い部屋になった。

黒套の男の姿もその場から消えており、扉が固く閉ざされていた。ピユアは顔を手で覆った。いつまでも、そうしていた。

大きな扉に足を踏み入れた時から思っていたが、部屋には何の気配もなかった。

外から見れば、狭そうに見えた塔も内部は意外に広がった。まるで、一つの部屋みたいに廊下がずっと続いていた。

ホープは走りながら訝しんでいた。上へと続く階段がないのだ。それに、何の気配もしないのもおかしい。

さっきまで確かに感じたのだ。一番なによりも愛しい者の気が。

ホープは人間達のやる事に段々と、苛々してきた。どうしてそこまで卑下じみているのか。

空間転移をしたかったが、魔力を跳ね返されるかもしれないからできなかった。もしかしたら空間の歪みに入り、二度と戻ってこれなくなるかもしれない。

しばらく似たような廊下を走っていたホープはふと、立ち止まった。何の気もなしに後ろを振り返る。後ろにはがらんとした廊下が続いているだけで、大きな扉はもう見えなかった。

「誰をお探ですか」

突然、降って湧いたような声に、ホープは飛び上がりそうになった。

「だ…誰だ!？」

すると、何も無いと思っていた廊下の柱の影から、黒い外套を羽織った人間が出てきた。

「あなたがここに来た目的はあれという所でしょう。厄介ですね、なまじ力があるだけに」

「…え」

この人間にはまったく気配が無く、ホープは内心かなり動揺してい

た。

その男はまるで、薄暗い柱から影を切り取ったかのように、現れたのだ。

「ムダですよ。あの白猫はこの搭を出ません。いや、出られないのです。あなたが行った所ですべては無意味です」

「…何だ？ピュアを連れて行ったのはお前達だろう。ピュアを返せ！」

「返せと言われてもあれは我々のものです」

ホープは奥歯を噛んだ。本当はこの男に斬りかかって、ピュアの元まで連れて行かせたかったが、無理だった。

まるで、床に縫い付けられたかのように動けないのだ。

「貴様…っ、ピュアをどうする気だ？」

ホープは吼えるように叫んだ。

いつの間にか術によって自分の動きが封じられ、口を動かすのも辛かった。

男には術をかけた素振りなどなかったのに、ホープは一步も動く事ができなかった。

「まったく…あのまま、とどめを刺していればこんな面倒な事にはならなかったのに。仕方がありませんね」

「…き…様っ？」

男は、かろつじて見えている口元を歪ませた。

「あなたの自由は私の手の中にあります。あなたも馬鹿な方ですね。ここに来なければ何も知らずに死ねたものを」

その言葉に、ホープは目を見開いた。

「な………」

男は、外套の下から何かを取り出した。

「私はあまり血生臭いのは嫌いなんですが、あなたは一筋縄では済みそうに無いですからね」

そう言うと、その手に持っていた何かを床に投げつけた。

閃光弾のような光と、灰色の煙の中から耳を劈くような、鳴き声が

飛び出てきた。

ホープの鋭い耳がびりびりと震える。

「……!!」

灰色の煙の中から現れたものに、ホープは愕然とした。

その姿は禍々しいほどに緑色の皮膚に覆われ、瞳はめめるような金色だった。

まるで、古代に絶滅した竜のような姿をしていた。

ホープは今の現実が、目の前に繰り広げられている事が信じられなかった。いつそ、夢だったらどんなにいいか。

男は薄笑いを浮かべた。

「こいつは大変飢えていましてねえ……今、生き血を欲しがっているんですよ。しばらく何も与えていなかったのです、骨まで喰らいつくしてしまうかもしれません」

獣が咆哮した。

白銀の髪をした少女が、水を汲みに、桶を持って外へと出た。外へ出ると、射すような光が目に入ってきた。眩しそうに目元に影を作るとふと、前を見遣った。

陰となった枝に止まり、じっとこちらを見ているものがあつた。

少女は全然気がつかず、最初は見間違いかとも思った。

少女はゆっくりとそれに近づき、すぐ近くで立ち止まると、それをじっと見つめた。それは瞬きもせず、少女を見つめ返してきた。

「あなた、どこから来たの？」

しかし、それは動かない。

口を開こうともしなかった。明らかに生き物なのに、作り物のようだった。

《何も知らぬ少女…》

少女がそれに手を伸ばそうとした時、突然声が聞こえた。

「え…？」

少女は辺りを見回す。しかし今は昼前だからか、辺りに人影など見当たらなかつた。訝しげに思っているとまた、声が聞こえてきた。

《風を操り種族…それも定めなのか》

それは肉声ではなく、頭の中に直接響いてきた。少女は、目の前の枝に止まっている白い鷹を見た。鷹はどこもかしこも真っ白で、瞳が金に輝いていた。

「今の…あなたなの？」

しかし、なんの答えも無い。少女は目の前の物をじっと、見つめた。

「おーい」

誰かの呼ぶ声がして、少女は白鷹から目を逸らした。

「はい」

一度家に入る前に振り返ってみたが、木の枝にはもう何もいなかった。

リーヴァンは上空から、少女が家の中に入っていくのを見ていた。翼を一打ちすれば突風が吹き、空を羽ばたけば嵐を呼ぶ風神は、しかし何も起こさない。人間達の目を憚り、自らに印を施していた。真白きその姿をソウエルの光が照らし出すその様は、この世の物では無いと思わせた。

金色の瞳が相手を射すくめ、どんな者もその姿の前には、思わずひれ伏せずにはいられなかった。

まさに“神の姿”だった。

しかし、実際には白き翼は偽りの姿でしかない。その瞳だけが唯一、変わらない金色だった。

眼下には、ずっと守り続けた大地があり、神々が慈しみ愛した種族たちがいる。

そして、何よりもかけがえの無いこの空の純粹さ…

ずっと、見てきたものだった。

ピィ…

リーヴァンがないた。

その声はまるで、この大地が涙を流すかのように響き渡った。

どこまでも彼方へと、吸い込まれそうな風が吹いている。

《運命に定められし者達よ…我々も例外ではなかったという事が…

…》

そして、翼を打ちおろした。

ソウエルを指すように、リーヴァンはその光に身を焦がした。

この風は私たちの自由を与えて守護してくれるけど、決して私たちだけのものではないのよ

どういうことなの？お母さん

誰か大切な人ができたらそれが解かるようになるわ

よく覚えというフェータル

ここはどこなのだろう。
どこを見ても同じような景色ばかり。

一面花に囲まれた場所に自分は立っていた。何だか、頭に霧がかかっているみたいでどうにもはっきりしなかった。
ひどく夢心地に思える。

もしかしたら夢を見ているのかもしれない。でも、なぜかひどく懐かしいと思った。

何故だろう。こんな所初めて来る筈なのに。
夢見ているかのように、何もかもひどく遠く感じる。

と、足が動き出した。自分の足で動いているはずなのに現実味が無い。

ああ、やっぱりそうか。夢だ。

まるで何かに引き寄せられるかのように、自分の足はどこか、目的の場所があるかのように止まらない。花を踏んでいるはずなのに、何の音もしなかった。

そんな事さえ、考えられなかった。

ふと、気がつくと太陽も月なかった。風も吹いていない。

温度さえ感じなかった。

けれど、鮮明に花の姿が目に入ってくる。他はぼんやりとしている筈なのに、ひどく花の色だけが目に入ってきた。

しばらく歩いてみると、花に囲まれるようにしてぼつんと、小さな家が建っていた。

まるで忘れかけられているかのように古く、いびつに見えた。

ゆっくりと近づいた。

扉に手をかけようとすると、一人でに開いた。

「いらっしやい」

出迎えた声は、しわがれていた。中に入ると、ひとりでに扉がしまった。

家の中には凝った装飾は無く、ただ丸い机と椅子が2脚置いてあるだけで、食器棚もなかった。向こうに扉があるのが見えた。

「そこへ座り」

ただ言われるまま従った。

「お茶はいるかの」

答えてもいないのに、目の前に茶が入れられたコップが置かれた。

「久しぶりの客だからのう。お茶がおいしく感じるわい」

目の前の老人はそう言うのと、お茶を啜った。

男なのか女なのか分からない服装をしていて、縁が黒いレンズを片目にかけていた。

「ずいぶんと遠い所から来たのじゃな。ここは何も無いとこだが、ゆっくりしていくがええ」

ただ、ぼんやりとその言葉を聞いていた。

老人は構わず喋り続ける。

「どうやらお前さんはこの世に受受け入れられない者らしいの…大変じゃな。時代が変わるとはのう。わしがいる頃はもっと住みやすなんだて」

老人はふと、お茶を飲んでいた手を止めた。

「そういえば、昔あの地には謳があったのう…」

あの地へ君を帰すとき

天と地を結べ

風を紡ぐならば

聖なる大地に終せよ

ただ巡るではなく

二つの欠片をもつて

懐かしいのう。よく歌っていたもんじゃ」

口を開こうとした途端、いきなり辺りの景色が一変した。

小さな樵小屋は無くなり、老人も居なくなっていた。

暗闇が目の前に広がった。

大きな口から吐き出された毒々しいものが、自分の足元の床を溶かした。

「くっ」

ホープは呻いた。

「……………」

口の中で何か呟き、目をつむる。

「…ふん。悪あがきは見苦しいですよ」

黒い外套で顔を隠している男が、獣を見やる。

「もう、そろそろいいでしょう…殺りなさい」

獣が一度咆哮し、毒をホープに吐きかけた。

しかし、影に縫い付けられたかのように動けなかったホープが、その場から動いたのだ。

「っつ…！」

マントが毒によって溶け始め、慌ててそれを脱ぎ捨てた。マントは煙をあげて姿形も無くなった。

「術封じをしなかったのは失敗だったようだな」

「…くっ」

辺りの壁や、床の抜け落ちている所を踏まないようにしながら、ホープは剣を鞘から滑らせた。そして緑色の皮膚をもった獣に切りかかるが、固い皮膚によって剣が弾かれた。

獣がまた毒を吐く。

「…化け物が」

今度は、液が届かない所まで飛び、剣を横にした。

左手を柄の方から刃の先まで走らせる。手を走らすと、刀身がそれにつられ光った。

「闘神セントバアーにかけてその命を誓う！」

魔力を注ぎ込まれ、剣がまるでソウエルのような光を放つ。

掛け声と共に獣の頭上より高く跳び、光の放っている剣を額に突き刺した。

「グワアアア……………！」

奇妙な呻き声を発し、緑色の獣がのた打ちまわる。

剣が抜けないように魔力を込め、手を離れた。魔剣はどんな硬質の石をも貫く。

ホープが地に着地すると、獣の瞳が妖しく光を放った。そして所かまわず毒を吐いて暴れ狂った。

ホープは片手をかざした。

「遠夢の地よ その紀をもつて ソウエルの光に従わぬ輩を屠らん！」

青白い閃光が飛び放たれ、のたうちまわっている緑色の獣の体を包む。ホープが片手をおろすと同時に、獣が吐いた紫色の液が降りかかってきた。

「……！」

ホープは避けきれずに、その毒を容赦なく浴びてしまった。

「ふん……」

それまで、柱の影で見えていた黒い外套に身を包んだ男が出て来た。どうやら隠れていたようだ。

「所詮、獣人の力とはこんなものなのですか：仕方ない」

男は口の中で何かを呟き、獣の額に深々と刺さったままの剣を抜こうとした。が、しかし魔剣は抜けない。

「馬鹿な。解封の印を唱えたはずなのに」

そこで男ははつとして、ホープを見る。

そこには、胸の辺りの服が溶けてしまっているホープの姿があった。しかし、体のほうは傷一つついていなかった。

男は、まだのたうちまわっている緑獣を睨むように見やる。

「…この死にぞこないを喰いちぎってしまえ！」

緑色の獣は動きを止め、ホープに向かって口を大きく開いた。

ホープはがはつと跳ね起き、自ら獣の口の中へと、腕を突っ込んだ。

「！」

獣は首をひっこめようとしたが、気がついた時にはもう遅かった。

「…外が固いほど、中身は柔らかい筈だ」

ボンツ、と音がして獣の頭の形をしていた物は弾け飛ぶ。ただの肉塊となった緑色のものが男の足元に転がった。

「……！」

「さあ、ピュアの居場所を……」

ホープが、光を放っていない剣を持って振り返った時、男の姿は既にそこには無かった。

ホープは舌打ちし、胸に手をやると剣を拭いてから鞘に戻した。ぎゅっと、その手を握ってから歩き出す。

大分魔力を消費した筈なのに、休むような事はしなかった。傷が傷むのも構わずに、また走り出す。

突然、長く続いた廊下が無くなった。

ホープは思わず壁にぶつかりそうになり、立ち止まった。薄暗いから気がつかなかったが、階段などと言う物は見当たらなかった。

(もしかして…この塔には階段がない…?)

人間達はみな魔動師だ。

ホープは瞬巡したが、天井近くにある窓に向かって手を伸ばし、術を放った。

白い光によって窓が割れたかと思いきや、何の反応もしなかった。

(もしかして、印が張られてるのか?)

ホープは三階分はありそうな場所にある窓枠に、一跳びで飛び乗り、思いきりガラス窓を叩く。

しかし、割れもしなければびび一つつかない。剣に魔力を込めてから刺してみた。突いてみると、窓ガラスにひびが入り、しまいには砕けた。

ホープは飛んで来たガラスを腕で防いでから、窓枠に残っていた残りのガラスを剣の柄で割った。

そして窓から外へと飛び降りる。

「多分、最上階だな……」

上を見上げて、最上階などというものは見えない。そのうち首が痛くなり、手で首の後ろをさすった。

「さて、どうするか…」

ホープは腕組して考え始めると、また苛々してきた。今までの事はなんだったのか。何の為にあんな化け物と戦ったのか。ホープはものすごく理不尽なものを感じた。

お願い、こないで。

その時突然声が聞こえた。

(ピュア!?)

ホープは思わず塔を見上げたが、今の言葉を頭の中で反芻した。

(来るな、と?)

確かにそう聞こえた。

ホープは魔力を唱え、指を組んだ。

黄金色の草が風向きを変えた時、ホープの姿は既にそこにはなかった。

「ねえ、戻ってみようよ」

セクトがせつつく。

「でもなあ、シアンがそう言ったんだろ？」

「ええ…でも変ね。何の気配もしないわ」

ティアが前方を見やる。そこには、恨ましいほどの青空が広がっていた。

(シアン…)

何かあった時は、ネオ達を頼みます。

シアンが耳元で囁いた言葉は、この事を言っていたのだろうか。

あの時、シアンの心を写すかのように風が吹いていた。

「私、やっぱり戻るわ」

「本気か？シアンは必死で俺達に…」

「それでも」

それでも。シアンがいなくては何も始まらない。世界の指針は動き出さないのだ。

「ネオとセクトはここにいて。様子見てくるから」

「ねえーちゃん！」

後ろを向いて行くこうとしてたティアに、しがみつくようにしてセクトが言った。

「オイラも行く」

セクトは今まで見たことも無い、真剣な顔をして訴えて来た。

「俺も。姫様が心配だからな」

ネオが立ち上がった。

ティアは、そんな二人をため息と共に見やる。

「…自分の身は自分で守ってよね」

「うんっ」

「女に守られるほど俺は不甲斐くないぜ」

その時ティアはふと、立ち止まった。

「…強力な助っ人を頼んでみようか」

「そうですね」

小さな呟きとなった言葉は、冷たい床に吸い込まれた。

「何が視えたのですか」

フレミュは跪いたまま問い掛けた。

「唯一の光が水盤から消えました」

「……！まさか」

「いいえ。完全に消失しました」

月司はさらりと言いのけた。

「でも、赤い凶星は動いていません。…まだこの星の魔動力が働いているせいかもしれません。この星のエネルギーは彼らにとっても重宝するものですから」

「司様。これからどうなさるのですか」

「……………」

月司はしばらく水面を見つめていたが、ふと口を開いた。

「…もつすぐ託宣が下されます。それまでこの事はあくまでも内密に。他の種族に、悪戯に刺激を与えないようにしてください」

「解かりました」

フレミュは礼をして退った。

「まさかこんな事になるなんて…」

しかし、月司のその言葉は銀盤の光と共に消えた。

今湖を囲む木々は枯れ始め、風が強く吹きつけられるようになった。この世界の異常を感じ、動物達は南方へと移動していた。植物達はただ枯れるのを待ち、朽ち果てた体を寒風に晒している。

フレミュはそれを見るたびに心が痛むのだった。

自分も明日には枯れようとしているあの木々のようになり、シアセアに住む全ての人々がこうなっていくのでは無いかと、この世界の未来を見ているような気持ちになるのだ。

しかし、それはあながち外れては無い。

この星が全てのエネルギーを使ってしまうえば、その母に抱かれている子供達も死ぬしかないのだ。

その日の夜遅く、にフレミュは呼び出された。いつまでも休もうとしない月司を何とか説き伏せ、食事と睡眠を摂らせてからフレミュが床についたのは、つい何刻か前だった。

フレミュは静かで冷たい廊下を、裾をたくる様にして急いだ。

「月司様」

息切れをしながら部屋へ飛び込んだフレミュが見たものは、水盤の前に立っている月司の姿だった。

蠟燭の炎だけに照らされた薄暗い部屋でも、司の瘦せくぼんでいる姿がはつきりと見えた。美しい顔立ちが今は、不健康そのものの顔をしていた。

「これを見てください」

司が水盤を指した。

フレミュは、恐る恐る覗き込んで水面を見た。

いつもフレミュが見るのは水を入れ替えたりする時、何も写し出されていなかったあの銀盤だった。

それが今は、星のような光が水面に浮かび上がり、白い光を放っていた。

「ここに…小さな白い光が見えますね」

「はい」

フレミュは白い光を見ながら答えた。

「これは、希望の星と同じ輝きを発しています。白い小さな…多分、これはまだ力が弱いのでしょう。そして、このすぐ近くにある赤い星」

「この星は…」

「そうです。何か嫌な予感がします。まだ、希望の光は反応を示しません。…もしかすると」

「消えたのですか」

「いいえ…そうだと決まった訳ではありません。それにもしそうなつていても、神々が黙っている筈がありません。ただ反応を示さないだけなのかもしれませんから」

水盤から光が消え、元の銀盤に戻った。

蠟燭の光だけが室内を照らした。冷気が肌を刺す。

「フレミュ」

フレミュが司の前に跪づく。

「これからも私を手伝ってくださいか」

「はい。司様」

司は、そんなフレミュに微笑んだ。

「誓いは汝を導く月の光の元に」

「……あれ？」

ホープにしては素っ頓狂な声をあげた。

「ええ！？犬？」

ネオが驚いたように声を上げる。ネオにとっては初めての対面であった。

「ごめんなさい、ホープ。でも今はシアンの身を案じる時なので…
どうしてもホープの力が必要になって“呼んだ”の」

ティアが手短に説明すると、ホープは頭をかきながら立ち上がった。

「…… まあ、仕方ありません。シアンさんはどうかしたのですか？」

そうホープが言うと、ティアは何とも言えない顔になった。ホープの表情が見る見る間に変わった。

「まさか……」

「でも、まだ分からないの。もしかしたら無事だと思っただけけど……」
ふと、ホープは気がついた。

「誰が私を呼んだのですか」

「…私」

ティアは、シアンからあの鍵球を渡された事を話した。

最後に手を離れた時託されたのだ。

「…でも、神々がざわめいているの。もしかしたら……」

「……………」

「…行ってみようよ」

ホープはじっと、セクトの瞳を見る。

心なしか、黒い瞳が潤んでいるように見えた。

ホープはセクトの頭を軽く撫でた。

「はい、解りました。では……」

そして、その場にいた4人の姿は光と共に消えた。

ふと目を開けると、目の前にひらひらとしたものが飛び回っていた。

目が覚めてくるとそれを正視する。

蝶々だった。それも真っ白の。

最初鳥かと思った。

白い鱗粉を撒き散らしながら、休むことなく飛び続けている。

立ち上がると、蝶は周りをひらひらとしていたが、羽の向きを変えた。

蝶の後を追った。

辺りは蝶以外、真っ暗で何も見えない。自分の手すら何一つ見えなかった。

まるで、光針を指すかのように蝶が道標となっていた。

何も見えない世界に対して唯一の味方だと、さも言わんばかりに蝶は忙しなく羽を動かす。

白い光を放ち、惜しみなく暗闇に光を投げかけても、周りには黒いものが広がるばかりだった。

と、蝶の羽が大きく伸び、毛が生え、鳥の姿となりそれからさらに大きくなって、白い馬の姿となった。

歩きながら進化を見ているかのようなだった。

突然、暗闇だったのが光を伴ってある景色へと変わった。余りに急な事に、思わず立ち止まってしまった。

草が風によつて揺れる、青々しい草原がそこにあつた。風が吹いて無い筈なのに、草が統一に揺れている。

ただ、呆然とそれを見ていた。

《愛されし神々の落し子よ》

突然聞こえた声にはっとすると、あの白い馬が目の前に立っていた。《今だ、愚かな者どもは解っていない。この世界の均衡を崩すとはどういう事になるか、という事を》

白い馬は澄んだ目でじつと見つめてきた。だが、頭に響いてくる声は切実なものだった。

しばらく見つめてから、白い馬は遠くへと視線を移した。

《この世界は我らがずっと見守ってきたもの…種を生え、風を吹かせた。だが、この愛しい大地が今汚れようとしている…》
目を伏せた。

《我らが望んだのはこんな事ではない。もつと種を愛し、絶え間ない光を投げかける世界だ。それなのに、今のこの星はどうだ。異端と言われている者達が絶えていくではないか。我らにとっては人種も他種も同じ揺り籠の愛を受けし者達なのに…なぜ、争う？くだらない見栄や猜疑心でそんな事をしていくのか？我らは間違っていたというのか》

白い馬は人間のように哀しい表情をした。…ように見えた。

怒りよりも喪失感の方が、この馬を責めさいなんていた。

《我らが残した愛し子よ。この世界を救うとはどんな事なのだ？人間達を廃絶させる事なのか？今と同じように》
その言葉から痛い程の感情が伝わってきた。

《我らにとつてはみな同じ子供達、この世に生を受けた者なのに…何が違う。姿？顔？種族？どう違うというのだ。みな、この母に抱かれていた子供達ではないか》

白馬はじっと、清い瞳を見つめる。
風が吹いていないのに、草が揺れた。

…ここはどこなのだろう……？

《永遠にこの時が続くとは思っていない。ただ、この星が生まれてから死ぬまで我らは見守り続けるだけだ。だが、それでも我が愛し子達が圧制をかけるのを見るのは…つらいのだ》
鬣を揺らす。哀しそうな表情が瞳から消えない。

青と緑のものが頭から離れない……

《我はずっと見てきた。この星が巡り生き死んでいくのを、何度も見てきた…我らは、何者も知らない事でも遺憶している》

そして、白い馬は光とともに人の姿へと形を変えた。それはとても若く、美しい青年だった。

《風に愛されし者よ。どんな事があるうと、我らはそなたを信じている》

白い光が青年から放たれた。

「あなたはもしや………」

紫色の髪を気にするでもなく、風に遊ばしていたオラクルはふと、顔をあげた。

目の前の木の枝にいつの間にもいたのか、真白い鷹がじっとこちらを見ていた。

オラクルはさほど驚かずに、見つめ返した。金の瞳が少し離れているのにも関わらず、妖しく光るのが分かった。

なぜか、この姿を知っているような気がするのだ。そして、何が起ころかという事も……

「お前が迎えなのか？」

淡々と、オラクルは白い鷹に話し掛けた。

しかし何の答えもない。

「この姿のせいか、分かるんだ。私がいつかこの地を離れていくのを。自分の中にある醜くおぞましい血が動いているのを」

《ならば、過去を蘇らせるか》

ふいに頭の中に声が聞こえてきた。

オラクルははつとしたように、枝に止まっている鷹を見た。

《お前は風選ばれしを受けた…そなたは宣下されたのだ。記憶と引き換えに》

「託宣？」

《そうだ。そなたは唯一託宣を受けた人間…昔何があったのか、欠けてしまった部分を埋める事ができるのだ》

「なぜ」

しかし、白鷹はひたとオラクルを見すえるだけだった。

「……………」

先に目を逸らしたのはオラクルの方だった。

「…視ない。親なんてもう必要ないからな」

《……………》

今度は白鷹が黙る番だった。

何とも言えない顔をした。顔をそむけていたオラクルは気がつかなかったが。

風翼神リーヴァンとはオラクルはその時知らなかったが、何か神々しいものを感じたのだろう。普段は長い事喋らないオラクルが、白鷹の前に立っていた。

《運命重き人の子よ。その姿を忌むでない。それも…》

「運命か？」

皮肉そうに、オラクルはリーヴァンの言葉を遮った。

「そんな事を言うのなら私を連れて行ってくれ。私にはこんな所は籠の中と同じなんだ。お願いだ、私をここから…」

《…そなたを案ずる者達がおる。そう悲嘆するな》

そう言うところリーヴァンは翼を広げ、空へと飛び去ってしまった。

オラクルは、その飛跡を見ながらうわ言のように呟いた。

「どうして私を連れて行ってはくれない…？」

風を受け、生む存在である自分の身がこれほど疎ましく思った事は無い。感じられないのだ。

あつて当たり前前のものが。同じ風として分かる。

それがひしひしと嫌でも伝わってくる。こんな気持になったのは初めてだ。

風を呼び、誘う存在がこれほどまでに大きいとは…

風が伝える。

愛しい者の身体に加護を与えられないと。

リーヴァンには、そんな風を慰める事すらできなかった。

そこが一瞬何なのか解らなかった。

ただ、荒れ果てた地なのかと思い、黒髪の獣人が場所を間違えたのかとも思った。

他の二人も同じ事を考えているらしく、何も喋らない。

また、ここまで転移をした獣人も、ただ立ち尽くすばかりだった。

「本当に……ここなの……？」

やっと口を開いたのはティアだった。

「間違いありません……」

ホープが答える。

唾を飲む下すように答えたその声には、自信がなかった。

目の前には、荒れ果て地面が黒ずんでいる大地が広がっているだけだった。

「あ、あれ何？」

空に浮かんでいたセクトが突然、後ろの方を指さした。

皆が振りかえると、そこに黒い物が蹲っていた。

黒い塊に近付くにつれ、それが黒い外套を羽織った二、三人程の間達だという事に気がつくのと、息を呑んだ。

「……シアンは？」

ティアは落ち着かなげに視線を彷徨わせた。

白銀の、いつも見慣れた灰色の外套がどこを見ても見当たらない。

僕には何も分らないんです。自分に何ができるのか。

シアンの言葉と共に、優しいその白銀の髪に縁どられた端正な顔が浮かんできた。

誰にもそんな事を言った事など無かったのに、世界の重役を担っている若く美しい青年は、自分の前で弱音を吐いた。

その時ティア自身、何も言う事ができなかった。

シアン……

「にーちゃん!？」

セクトのそんな声に、ティアは思わず立ち上がった。セクトが何か黒ずんだ灰色っぽい物に近づく。

ティアもゆっくりと近づいた。まるで足に力が入らない。

見慣れたはずの白銀の色が、今は違うものであって欲しいと願った。だが、セクトが抱え起こしたのは、あの忘れられないいつも見慣れたものだった。

「にーちゃん、すっかりして！」
セクトの声がやけに遠く聞こえる。

ティアは恐る恐るゆっくりと、震えを押さえながらシアンに触れようとした。もう少しで触れるという所で、ティアはセクトを押しつけるようにしてシアンの体を抱き寄せた。

「……シアン！ どうして……」
シアンの体はすでに冷めきっていて、その顔は穏やかに見えた。息をしていなかった。

(…シアン)
死んでしまったの…？

もう、その顔にあの優わらかな微笑みが浮かぶ事はないだろう。

ティアさん。風はいつも思うだけで吹いてくれるものなんです。

ただ、自分が気がつかないだけで…

ふと、シアンが前言っていた事を思い出した。

その時はあまり意味が分からなかったが、いや今だってよく分かっていない。ただ、風は自分の味方をしてくれるんだと。

ただあの時、シアンが照れたようだったのは気のせいだろうか。

(風…？)

ティアははっとなって、シアンの穏やかな顔を見た。

気づいた。気がついてしまった。

さらに涙が溢れ、何も見えなくなった。すぐ近くにあるはずの顔も。

「…んなんじゃ…伝わら…いわよ………」

言葉を吐き出すだけで息が詰まりそうだった。

なぜ、こんなにもこの青年は優しいのだろう。

「ねーちゃん…これからどうなるの？ 神々はほろぶの………？」

同じように涙をいっぱい溜めながら、薄羽蜻蛉のような羽を震わせながらセクトが声を出した。

ティアはその時になって、ようやく自分が泣いている事に気がついた。

「……………」

「… 神はもう、滅ぶしか……」

ホープが絶望的に呟いた。琥珀色の瞳が潤んでいる。

「でも…シアンは」

それでもシアンはこの世界を救おうとした。それまで、ただずっと見ていただけだったネオが口を開いた。

「おい…あれはなんだ？」

その声にホープが顔をあげる。

皆の視線の先には、思わず息を呑むような金色の鹿が立っていたのだ。

立派な角を有し堂々と、ゆっくりとその鹿は近づいてきた。

まるで、そこだけ別世界のように神秘的だった。

「神獣…？」

金鹿はシアンのすぐ側で立ち止まり、その新緑のような瞳をじっとシアンに注ぐ。

セクトも気がつき、涙の潤んだ顔で金鹿を見る。

時が止まったかのように何も動かない。ただ、シアンを抱いているティアの肩が震えているだけだった。

金色の鹿はただ、その瞳を静かに風の民へと注いでいる。

と、その時眩い光がシアンの体を包みこんだ。それから、どこからとも無くこの荒れはてた地に光が、集まってきた。

「…これは!？」

無数の白い光が、一つの場所に集った。

全部優しくまるでここだけ、この世には無い世界のようにだった。

「きれい……」

セクトが、言葉を吐き出すようにして呟いた。

「神獣の命？」

ホープがその、何よりも美しいものを見ながら呟いた。

光はやがて一箇所に集まり、金鹿もその光の一つとなり、シアンを包み込んだ。

「シアン？」

すぐには反応できず、ただその有様を見ていたティアは、腕の中にあるものから目を逸らせなかった。

瞠目した。光が消えると同時になんと、シアンの体が温度をもったのだ。

いつのまにか光はやみ、金鹿の姿も消えていた。

シアンの瞼が動き、その透明な青が景色を写しだす。その瞳を彷徨わせた。

「シアンさん！」

ホープが歓喜の声を上げた。

シアンはまだ何が起こっているのか分からずボーとしていて、それから自分を抱きしめていた腕の温もりに気がつき、ぎよっとなった。「どうしたんですかティアさん!？」

息を吹き返してからの第一声がそれだった。

思うように体が動かないのか体をよじらせ、ティアの頬に手で触れた。

「……泣いているんですか？」

そっと訊ねるような声に、ティアはびくっとなった。そしてさらに涙を流す。

「……馬鹿」

言葉とは裏腹に、優しくその腕に力を込める。その言葉を聞くと、シアンは優しく笑った。

「あの鹿は…多分、動けない神のかわりに命を与えてくれたんだ。自らの命と引きかえに。他の神獣たちも」

「神獣？あの僕はいい…」

ホープは涙で潤みそうになっていた目を擦って微笑んだ。

「神の使いによってあなたは命を救われたんですよ」

「…では、僕は死んだのですね」

「…ええ」

ティアがその時、体を離れた。そして、今息を吹き返したばかりの顔を確かめかのように見る。

「……………」

そして涙を拭いた。

「シアンって本当に馬鹿ね」

もう一度同じ事を言っただ笑った。シアンも口元を緩ませた。

「シアン　っ！！」

ネオが、ティアから剥ぎ取るかのようにシアンを抱きしめた。

「俺は生きた心地がしなかったぞ、シアン…！」

「ネオ…ちよっと」

シアンが苦しそうに身をよじる。

「良かった…シアンがいなくならなくて」

セクトも一緒になって抱きついてきた。

シアンは目線だけを違つるところに向けた。

「あの…有難うございます。それにすみませんでした」

「礼を言うのは神獣達にですよ。自らの命と引き換えにあなたを甦らせたのですから」

「…僕を」

「シアン…本当によかった」

ティアが呟いた。

ホープが指を組み何か呟くと、次の瞬間には場所が変わっていた。

あの後、シアンの回復を待つて場所を移動する事にした。

神の使いを天に返し、人間達を埋葬した。

ホープが唯一出来る事が、そんな事しか無いのが心残りだと言った。

「あの…どちらさまでしょうか？」

それが呆然と見ていた少女の第一声だった。

「いたたたた…」

「え〜ん。ネオにーちゃんおもいよ〜」

「いてて…そんな事言っても…もっとうまくはこべねーのか？」

「無理だ。定員オーバーなんだ」

いやにきっぱりとホープが言う。

「なんだよ。さつきは大丈夫です。とか言ったのはどこの誰だよ」
「運んでもらったのにその傲慢な態度は何だ？」

「なにおう」

「ちよつと」

それまで、いらいらしたように黙っていたティアが口を開いた。

「ケンカするんならどいてからにしてくれない？」

慌ててネオが飛びのく。

ホープがシアンを抱き起こす。その時になって、ただそれを見ていた少女に気がついた。

ティアがその少女を見た時、言葉を無くした。他の面々も同じだったようだ。

「あの…？」

少女は訳がわからず、うろたえた。ひどく狼狽して頬を赤くし、なぜ自分が視線を集めているのか分からなかった。

「どうしたんじゃエフイメ？」

すると、家の中から老人が出てきた。

「おじーちゃん」

少女は助けを求めるように老人の後ろに隠れる。すると、周囲に人が集まってきた。

「！まずい…！！」

ホープが指を組みなおす。

人々のどよめきの中、一風変わった姿の者達はそこから消えた。

「…で、ここはどこなんだ？」

足元の遙か崖下には、荒々しい波間があった。

「えらくハードだな、おい」

「仕方ない。慌てていたものだから」

はたまた、やけにはつきり言うホープである。

「珍しいわね。どうしたのホープ、体調悪いの？」

「いえ、そういう訳では…」

ホープは言葉を濁らせた。

ティアが、先程飛ばされる前に見たものについて、同意を求めてきた。

「ねえ、やっぱりさっき見たのって…」

「うん。オイラもみた」

「間違いないでしょう」

ティアが少しむっとなった。

「だから」

それを遮ったものがあつた。

「…あれ？ここどこですか」

このやけに、丁寧な口調の声の主は辺りを見て驚いた。そして、足下を見て固まった。

遙か崖下に白い波頭が見えた。

気を失わなかったのは奇跡だったかもしれない。

「にーちゃん、気がついたの？」

セクトが嬉しそうに飛びついてくる。

「…え、ええ」

歯切れの悪い返事を返しながら、足の震えを押さえるようにしてシアンは立ち上がった。

「もう立ち上がれるのですか？」

「はい…ここは何なのでしょう？」

「何って…なあ？」

「う、うん…」

「シアン」

ティアが胸倉を掴みかからんばかりに、シアンに突っ掛かってきた。

「テ…ティアさん？」

シアンが、恐怖を顔じゅうに浮かべながら後ずさる。

「……良かった。もう」

「え？ティアさん」

「シアンの馬鹿っ！」

シアンは訳が分からないまま、怒鳴られた。

「…?」

「本当に…もう、心配したんだから…」

その声は誰にも聞こえないで零れた。

「ティアさん…」

シアンは、その手をどうしようかと彷徨わせていたが、ティアの肩に置いた。

「あの…ティアさん」

ホープが遠慮がちに声をかける。

…ここは崖の上。落ちたら下の海面に叩きつけられる事になる。

「ご、ごめんなさい。そうね、やっぱりあの子はシアンと同じ」

「?」

シアンは皆の視線を浴びながら、当の本人は何も分かっていなかった。

ネオが頭を掻きながら口を開いた。

「夜も遅いんだしさ。もう寝るとこ捜した方がいいんじゃないか？」

遙か崖下の波音が聞こえてきそうだった。

「とりあえず、眠る場所を確保しましょう」

ホープが沈黙を破ったが、

「待ってください」

シアンが止めた。

「シアン?何を言っているのよ」

ティアが訝しげにシアンを見る。

「リーヴァン様が…」

すると突風が吹き、白い鷹が姿を現した。

薄暗くてもその姿ははっきりと、白く見えた。

「風翼神…これが」

「鷹?白い…」

ホープとネオがその姿に見とれていた。

神を目にしたのはこれが初めてだった。無理もない。

神獣とはやはり、どこか違う神々しさだった。

《出会おうたな》

「え?」

《もう一つの風を表す星と。我らも月守のところに託宣が下りるまで、気がつかなかった…》

シアンは意味が分からず、ティアに説明を求めた。

「……………」

《そなたはもう一人の風の民に出会ったのだ》
はっ、となつてリーヴァンを見る。

「…! 本当なんですか!？」

《事実だ。道が暗示している。しかし》

「しかし?」

白き鷹の姿のリーヴァンは、少し躊躇ったように口を開いた。

《…同時に破滅の光も呼んだ》

「…え?」

シアンは今言われた意味が分からず、胸にくる衝撃が信じられなかった。

思わず訊いていた。

「どういつ…意味ですか」

《……………》

「リーヴァン様…」

不安に駆られそうになるのを懸命に堪え、リーヴァンに問うた。

しかし、不安は隠しきれず荒い口調となった。

《我らには何も言えまい。…ただ、この事がそなたのためになるのかそうでないのか、我には分からぬ》

「……………」

白鷹神はさつと、顔をあげた。

《道はこの深き地に示されている。風を呼ぶ種族よ。我らはそなたに道を示す事はできない。だが》

白い翼をひとつ打ち下ろし、風を巻き込んで空へと、その身を昇ら

せる。

《そなたを見守る事はできる。…たとえば、そなたが望むまいとしても》

「……………」

シアンは、さっきまで自分がどういう状況だったのかを思い返した。と、リーヴァンが、シアンのすぐ前まで降りてきて光を放ちはじめた。

突然の事に腕を庇いながらも、シアンは自分の中で何かが溢れ出てくのを、感じていた。

《…その首飾り》

シアンはどきつとした。思わず胸元に手をやるのを、必死に自制した。

《久しいな。それは…》

「…?」

《風の民よ……すまなかった》

「え?」

シアンが思わず風翼神を見ると、リーヴァンは少し目を伏せた。そして、何も言わず風と共に舞い上がった。

一度振り返り、しばらく見ていたが、やがて風を連れて去って行ってしまった。

「リーヴァン様…あの時何を言おうとしていたのでしょうか」

シアンは空中を見ながら呟き、胸元にあるものを掴んだ。

その夜、暗い空を木々が覆い隠すかのような場所で、野宿をする事にした。

もうすっかり暗くなっていった。

「今日も星が出てないわね」

「うん。おいら、双月のまわりにかがやくたくさんの方が好きだったのに」

ティアはそんなセクトの言い方に、可笑しそうに笑った。なんだかセクトの物言いが、本当に可愛いらしかったのだ。

「月の光に比べたら星々の光は弱いけれど、でも道を示すものがないわね」

「でもオイラ、北がどっちかわかるよ？」

「私たちはね。でも、普通の種族、例えば…人間とか星の光を頼りにして方位を定めている者達は、星が無くなれば北を定めにくいわね。それに」

「それに？」

ティアはもうすぐ、アル・ヒイティスとラグ・ヒイティアが、この空から消えてしまう事を言った。セクトはそれを信じられない思いで聞いていた。

「ほんとうに？予言とかじゃないの？」

「ええ。本当の事なの…」

セクトは押し黙った。その愛らしい顔で何かを考えているようだった。と、顔を上げた。

「じゃあ、夜中に道を歩くときはどうするの？月の光がないと何も見えないよ」

ティアはそれに、はにかんだように笑った。

「そうね」

「…で、さっきのその神様ってやつなのか」

「そうだ」

ネオとホープの声がし、振り向くと今枝を拾ってきた所だった。

「あれ、シアンは？一緒に行ったんじゃないの？」

「え？戻ってないのですか」

「…ええ」

セクトがくいくい、とティアの袖を引っぱった。

「にーちゃん、もしかしてにーちゃんの事だからばーっとして川にでも落っこちたんじゃないの？」

まさか、と言おうとしてティアは止めた。シアンならあり得る。

生き返ったばかりだし、さらにぼーっとしていたし…

「でも、確かに何の気配もしないのはおかしいですね。ちょっとその辺捜してきます」

「私も捜しに行くわ」

「じゃあ…」

俺も、と言おうとしてネオは首根っこを引っ張られた。

「いやだよ。ここにいてよ」

「く、くるし…」

「ネオにーちゃん」

ほとんど半泣きである。

「わ…わかったから離せ。死ぬ…」

「じゃあ、ネオとセクトは焚き火番を頼むわね」

湖のほとりに、月の光を受けて立っている大きな木を見上げた。

白銀の髪の主は誰もいない事をいいことに、盛大にため息をついた。じっと、星の写らない水面を見つめる。

月だけがその小さな世界にいるようで、何だか目を逸らせなかった。何故だか自分の事のように思えて仕方なかった。どうしてこんなに、月の光は頼りないのだろう。

今にも零れ落ちてきそうだ。

「こんな所にいたの、シアン」

突然の声にどきつとし、声のした方を向く。

「テ…ティアさん」

まるで空気を切り取ったかのように現れ、シアンは思わず、胸にかけてあるはずのペンダントを掴んでいた。

ティアはそれを見咎めて、つい言葉にしていた。

「それ…何なの」

その言葉にシアンはどきつとして、体中が熱くなったのが自分でも分かった。

「なんのことですか」

とりあえず、冷静さをとり戻そうとしたが、声は上擦ってしまった。

「……」

ティアは少し、むっとしたようにシアンを見ていたが、背を向けた。

「別に…シアンが言いたくないのならいいわよ。けど」

湖に映っている月が微かに揺れた。

「私達はシアンのために一生懸命なのに…」

「…ティアさん」

「なのに、シアンは私にも何も言ってくれないわけ？」

「……………」

それきり沈黙になった。

やがてシアンは高く聳え立つ木を見上げ、落ちた葉が水面を揺らすのを見てから、首元から何かを取り出した。

「これは」

清んだ声が辺りを打った。

「記憶を無くす前からずっと持っていたんだと思います。最初目が覚めた時、気がつかないほどでした。…エルフの村で」

ティアは振り向き、シアンの手の中にあるものを見た。

しばらく見ていたが、手に取った。

「風のイエーラ？」

そう思ったのも無理はなかった。でも色が違う。

風のイエーラはシアンの瞳のような色に対し、今手にあるものは青

紫色だった。

「これは一体…？」

月の光に照らされて反射した。ティアは眩しそうに目を細め、ついでシアンに手渡した。

シアンはそれを元の位置に戻さずに、ティアを見た。

「風のイエーラは」

ティアも同じように首元から風のイエーラを取り出し、シアンの掌に乗せた。

二つを見比べ、シアンはその相對するような形が少し異なっている事に気がついた。

風のイエーラを、飾どる装飾品は植物の蔦や草が細かく刻み込まれ、シアンの持っていたものは彼の知らない文字が、これまた事細かく彫られていた。

「これは…パドウエ文字？」

その昔、遙か太古に忘れ去られた文字だと言われ、どこの文献にも載っていないものだった。

今まで、じっくりと見たことがなかったシアンは、改めて驚く。ティアが「え？」といった感じでそれを覗き込んだ。

「…多分、これはパドウエ文字だと思います」

「パドウエ文字？」

聞いたことも無い発音に、ティアは形の良い眉を顰めた。

「それで何て彫られてるの」

シアンは暗さのせいだろう、それをまじまじと見ていたが、首を横に振った。

「僕にも何が書いてあるのか…ただ、これは神が記したものかもしれません」

「神が？」

この地に落とした。

「どうしてそんな事を？」

ティアは脳裏に、リーヴァンの白い姿を思い浮かべていた。風翼神

は何も言わなかった。

シアンは解らないと言つように首を振った。その手の中にある二つを、先とは違う気持ちで見つめた。

と、突然手の中にあるそれぞれが光を放った。

《… 見つけた》

シアンが思わず輝きだした二つの物を落しそうになった時、声が聞こえた。

《やっと…こんな所にいたのね》

「なに？誰」

その二つはシアンの手から離れ、空に光を放ちながら浮かんだ。そして、湖の中心辺りにくると、いきなり光を放つのを止めた。

と、二つ同時に湖の中へと落ちていった。

「あつ…」

ティアが声をあげた。

やがて、水面全体が輝く白色に染まり始めた。

そして湖の中心に、光の中から現れたかのように人が立っていた。

いや、立っていたのではなく、水の上に浮かんでいるのだ。しかし

その体は薄く、対岸にあるものが透き通って見えた。

「…あなたは」

シアンはやつとの思いで声を出した。こんな不思議なものをいくらか見慣れているとはいえ、これは衝撃的だった。

「水の乙女精」

水に浮かんでいた精霊は、その顔に微笑みを浮かべた。

ティアはただ、呆然としながらその微笑みを見ていた。

乙女は水の上を滑るように近づき、シアンの立っている辺に止まった。

そして、しばしの間風の民の姿を見、その美しい笑みをしたまま言葉を放った。もっとも、肉声ではない声が。

《あなたがここへ来る事を待ち望んでいました。風の民よ》

「…なぜ」

《…やっと見つける事ができました。この星を…私たちを救う者が現れるを待っていました》

「水の乙女精…僕は」

水の乙女はそれから視線を転じ、赤い髪のエルフを見た。

《あなたの声をずっと聞いていました》

「…え？」

ティアは言われた意味が解らず、思わず声をあげた。

《あなたが泣いているのを…》

「……………」

ティアはますます水の乙女の言葉の意味が解らず、首を傾げる。

《あなたはずっと一人だった。その事があなたを追い詰め、エルフ族の中にいながら一人疎外を感じていた》

「……………」

《その声が私にはずっと聞こえていました》

ティアは何ともいえないような顔で、水の乙女を見た。

《…あの日から》

ティアは水の乙女に近づいた。

「水の乙女…何を知っているというの」

《あなたがずっと一人で泣いていた時から…》

(一人で泣いていた?)

「私は泣いていた事なんて無いわ。…あの村に居て幸せだったもの」

《本当に…?》

声ではないものにドキツとした。

《私にはあなたの声が聴こえた。泣く声を。…どうして心を偽ろうとするの》

「違う。私は」

本当にそうだろうか。他のエルフ達が自分に向けてきた視線はどんなものだった?

それ以上、言葉が続かず黙った。

ふいに、寒くもないのに寒気に襲われた。

背中がぞくりとし、嫌悪感が襲ってきた。少し吐き気がする。

(何これ?…何か嫌な予感がする)

シアンもそれを感じたらしく、口元を押さえていた。

水の乙女精だけが、静かに目を伏せているだけだった。気のせいだったのだろうか、と思っている。水と水の乙女が目を開いた。

いつのまにか水面は光輝くのを止め、元の姿に戻っている

(……………)

水の乙女精は湖の中心へと、頭を巡らせた。

「水の乙女精…?」

しかし、水の乙女精は振り返らず、そのままに中心へと向かっていった。

水の上を滑るように歩いていくその背中から、暗い山々の影の稜線が透けて見えた。

《今、人間達がエルフの村を襲いました》

「……………え?」

ティアは半ば無意識に答えていた。今のは聞き間違いではないだろうかと、ティアは耳を疑った。

《間違いありません…魔力を持つもの達がエルフの村に》

遠く離れているはずなのに、声だけははっきりと聞こえてきた。ティアは思わず耳を塞ごうとした。

「やめて…!」

嘘だ。

村長、ティン。村の皆の顔を思い浮かべた。全部嘘だ。

これは水の乙女精が、心を惑わそうとして言った事に違いない。

《いくらエルフ達が人間以上の力を持っていたとしても、あれらは神を追い詰めるほどのものです。エルフ達はなす術ありません》
耳を塞いでも乙女の声は無情に響いてくる。

「ティアさん…」

シアンがすぐ側で、心配そうに声をかけてくる。

《私は真実を告げただけです》

「もう、無理なんですか」

《…おそろく》

シアンはまるで、時間が止まってしまったかのような、絶望的な衝撃を受けた。

水の乙女精は姿を消し、また元の静かな湖になった。

まだ、間に合わないだろうか。

今すぐ飛んでいって確かめたかった。ホープを呼ぼうか。

シアンは、いつの間にか青紫色の物を握っていた事に、気がついてなかった。

「何だ、今の…何か嫌な予感がする」

虫の知らせ、というやつかもしれない。それまで暗闇に目を凝らしていたホープは、木の枝から手を離れた。

木上から飛び降り、何かの気配がした方へと目を向けた。

(…精霊?)

それにしては何か、嫌な感じがした。

「とりあえず、戻ってみるか」

数瞬で黒い獣人の姿は、その場から消えた。

「にーちゃん、みつかったのかな…」

星の無い空を見上げながら、セクトが呟いた。

「さあな」

そう答えたネオも、落ち着かなげだった。

「テューシユナさまも捕まったままなの？」

「星の女神の事か？テューシユナだけではない。他の神さんも同じだろう」

ネオはため息をつきながら、枯れ枝を火に投げ入れた。

その時、ピインと張り詰めたような空気が伝わってきた。

(奴らか?)

ヒュツと空気を裂くような音が聞こえ、ネオは反射的にそれを短剣で払い落としていた。

その時矢が掠れ、右手の甲から赤いものが一筋流れた。じわっと汗が吹き出てきた。

今度は一斉に矢が中心に向かって放たれてきた。ネオが避けた瞬間、地面に矢が突き刺さる。

だが次に、ネオは喉元に剣を突き付けられ、動けなくなった。

「ネオにーちやん…！」

「こいつの喉に穴を開けたく無いなら動くな」

「え…」

「セクトっ 風を起こせ」

短い呪文と共に、突風のような風が起こる。

ネオは動師の腕から逃れ、木の枝の上に乗った。

すぐに風が止むと、木々の頭上めがけて体の反動を利用し、ネオは何かを思いきり投げ付けた。

「今度はあれだ。前の…」

セクトはそれを見て一瞬で理解したようだ。

「今度は光の魔道を！」

「うん！」

しかし、それよりも早くセクトの目の前に、黒い外套を羽織った人間が立ちはだかった。さながら闇を切り取ったかのように。

(……あ)

「セクトっ！」

セクトの脳裏にあの日の事が蘇ってきた。

あの感情も何も浮かんでいない、まるで人形のような瞳を。

殺気も気配も何も感じられなかった。

「…！おい」

ネオの声もセクトには届いてなかった。

ネオが立っていた足元の木が誰かが放った火によって燃え、ネオがそこから落ちる。ネオが放り投げた桃色の石が落ちて来た。

ネオは地面に落ちるまで体勢を立て直し、石を受け取るうとした。

しかし、そこに見たのはまるで人形のように、妖精の羽が生えた体

が落下する所だった。

「セクト！」

絶叫が静かな山中に響き渡った。

12・終夢

明かり取りだけの小さな窓から指し込む、僅かな月の光の下で白猫の獣人は一心に祈っていた。

部屋には蠟燭さえなかった。ただ、狭い部屋に固い寝台があるだけだった。

月の光が僅かに瞬いた。

それでもピュアは、組んだ腕をそのままに顔を上げなかった。そして月がもう一度瞬いた時、目を開いた。

「…来た」

まるで鈴を転がすような声が漏れた。

と、同時に部屋の鍵が開いた。

「……………」

暗闇にいると威圧感がさらに押し寄せてくるように、男は口を開いた。

「白猫のピュア、時間だ。儀式を執り行う」

ピュアは何も言わずに立ち上がった。

胸にやった手の震えが止まらない。

（ホープ…）

もう、だめかもしれない。

儀式用の装束に身を包み、ピュアは心もち沈んでいた。今から一体何をするのか、まったく分からなかった。

ピュアはいつのまにか場所を移動していた。

あの、狭い薄暗い部屋でも塔の中でもなかった。月の光が直接に降り注ぐ、夜空の下だった。

おそらく飛んだのだろう。

森が切り開かれた山の上に、火が灯った。

男が木で組み立てられた壇の上に登り、そして人語で何かを言い、

両手を月にかざした。

(何が始まるんだろう…)

今は黒装束の頭のフードを外し、顔が見えるようになっていた。隠す事などしていない。

月の光がさらに強くなり、祭壇へと注がれた。ように見えたが実際には、男の魔術で光が溢れているだけだった。

そして、また祭壇に祭られている異教の神に祈りを捧げ、壇を降りてきた。

「白猫の獣人」

近くにいた男が顎で祭壇を指す。こちらは顔を隠していた。

ピュアは訳が分からないまま、祭壇へと登った。

顔を覆い隠した黒装束の人間達の前に立つと、とても不気味だった。

「時は来たれし…ゼージオの神々よ。その白い獣人の血を清めよ」
人間の一人が祭壇の下で手をひろげ、月に向かって叫んだ。

ピュアは体中の血が総毛立ち、恐怖に駆られた。

(殺される…)

ピュアは座り込み、どうしようもない恐怖を押さえこもうとした。

体中の震えを止める事が出来ない。

(ホープ…)

「白猫の獣人よ、月神の舞いを舞うのだ」

(月神の…舞い?)

ピュアはがくがくする膝を押さえ、顔をあげた。

黒装束に隠れた男の口元が笑っている。ピュアは何とか、体の震えを押さえようと立ち上がった。

…舞いは知っている。巫女となるため、何度も舞った。

ぎこちなく、右手を空にかざす。

それが始まりだった。

月の光の下で、白い礼服が翻る。

腕に嵌めた金環が鈴のかわりに音をたてる。

足元が不気味な祭壇の上ではなく、緑が豊かな野原に変わった。

ふくよかな風が靡き、穂を揺らす。

どこまでも広大な土地が続く。どこまでも、幸せだったあの頃に。

… 風が、私を呼ぶ……

「ピユア、約束してくれ。ピユアが巫女となっても互いに互いの事を…俺の事を忘れないと」

緑色の穂がまるで一つの形あるもののように揺れる。

今まで見てきたものがその上に覆い被さっていく。輪廻を繰り返して、回しながら時を重ねてきたその重みが。

「必ず、いつか迎えに行く。俺がもっと大きくなってピユアを守れるくらいになったら。だから、それまで心はずっと側にあると約束してくれ」

…わたし、この草原が好きなの。風が吹いてわたしの中の何かを呼んでいるみたいで…

いつのまにか舞が終わっていた。自分の体が刻み込まれた動きを止めたのだ。

ピユアはその時自分が緑の草原ではなく、暗い異神を祭っている場所である事を一瞬理解できなかった。

誰にも気づかれないようにため息をついた。

そして祭壇に、手に立派な装飾のついた剣を握った男が登ってきた。男は、異神に祈りを長い事捧げ、それから高らかに宣誓した。

「我らはゼージオ神に御心を誓うと共に、その恩恵を共に一身に授かる種族である。その誓いをゼージオ神に捧げたまえ」

人間達はフードを外し、異神に祈りを捧げた。

重月の光が静かに降り注ぐ。重月の時には魔力が一番高まる。まるで、異教神の呼びかけに応えるかのように二月が輝いた。

そして頭をあげ、祭壇を再び見やる。その時、ピュアは一気に恐怖に襲われた。

死ぬ事は覚悟していたはずだった。しかし、本能的に助けを求めていた。

（いやっホープ…!）

男が鞘から剣を滑らせた。抜け身の剣に、月の光があたって反射する。

「ゼーゾ神よ。異種族の白猫の血を今、その御身に捧げる」

男が剣を振り上げ、その刃に月の光が走った。

（……!）

ピュアは目を反らした。

しかし、いくら待っても何の反応も無い。ピュアが恐る恐る顔をあげると、男が腕を押さえて蹲っていた。

足元に立派な装飾のついた剣が転がっていた。

「…貴様っ」

バサツ、と一羽の鳥がそこに立っていた長い、金色の髪をした人影の肩に止まった。月を背にしているので顔がよく見えない。

（誰…?）

人間達は突然の侵入者に攻撃を放つ。

「無駄だよ。そんなもの僕にはあたらぬい」

まだ若い男の声がした。

突然現れた人、かどうかは分からないがピュアを助けてくれたらしい。ピュアは思わずその人影に見入った。

黒装束の人間達が次々に、その突然の侵入者に、炎や光などを放った。

「だから無駄だと言ったのに。いけ、ローディ」

ピイイイ…と猛禽類独特の鳴き声が、辺りの夜空に響いた。

助かった安堵からか、白い光と共にピュアは突然意識を失った。

（私をもっと強かったら…）

ティアは唇を噛み、自分の腕で自分を抱きしめるようにしてしゃがみ込んだ。

どうしようもない感情が体を食い破り、迸りそうだった。

こんなにも辛い事なんて…

「ティアさん」

シアンが遠慮がちに声をかけてきた。

「……シア…私…」

失った。還る場所も何もかも。

もう戻れない。

本当はあの村が大好きだった。中には蔑みとも哀れともつかない視線を感じていたが、父が自分を認めていてくれたのが嬉しかった。まるで本当の弟のように自分を慕っていたティン。

違う。本当は私の居場所はあそこではない。いくら心地よかったとしても。

偽りでしかなかったんだ。

だから護れなかった。

ティアはシアンの胸にしがみついた。そうしないと気が狂いそうだった。

「ごめんなさい…」

シアンがそつとティアを抱きしめた。

ティアは堪えきれなくなり、一度に感情が溢れ出した。

セクトの体がまるで蜻蛉のように落ちてくる。

ネオは駆け出そうとしたが、周りの人間達に阻まれた。

「くそつ…どけ！」

（セクトが！）

人間の一人が手をかざした。

ネオは唇を噛み、その人間を睨みつけた。

「簡単にやられてたまるかっ」

足元の石を拾い、投げつけたが簡単に避けられる。

ネオは今まさに術を放とうとした魔動師に体当たりして、輪の中から抜け出した。

「セクトっ」

木の上に登り、木の枝から枝へと伝って、セクトが落ちた方へと走って行く。

後ろから炎が放たれ、ネオに当たらず周囲の木々を燃やした。

「くそ！」

突然背中に焼けるような痛みを感じ、ネオの体が木の上から落ちた。

「ネオ」

その時、突然空中に現れた黒い獣人によって、ネオの体は止まった。

「しっかりするんだネオ」

「う…ホープ、セクトが」

ネオは痛みに顔をしかめながら口を動かす。

「喋るな。くそ私が治癒力をもっていたなら」

その時、人間達が追ってきた。

「セクトは？」

ネオは指で示した。

ホープはネオの体を抱えたまま、一瞬で飛んだ。

移動した場所に、羽の生えた子供が腹部から血を流し、辺りを赤に染めて倒れていた。

「セクトっ」

ホープはセクトを抱え起こした。

「……ホー…プ？」

「今、血を止めてやるからな」

ホープは布を引き裂き、セクトの体に巻きつけていく。

傷は深い。セクトはまだ子供だ。

だめだ。このまま血を流し続けたらセクトは…

「セクト、しっかりしろ」

ホープがセクトの体に布を巻いても、新たに血が滲むだけだった。

「セクト」

ネオが這って、セクトの側まで来た。

「…ネオにーちゃん？」

目の焦点が定まっていけない。もう誰なのかも分からないようだ。

ホープはそんなセクトの体を抱きしめ、そっと寝かせた。ネオを振り返る。

「ネオ、少し染みるが我慢しろ」

ホープはネオの焼け爛れた痕に手をかざした。

「命泉よ…我に応えよ」

ホープの手に水気が集められ、水がネオの背中に流れた。

「うっ」

ネオは呻き声をだして、顔を苦痛に歪める。荒い息づかいが一時詰まった。

傷跡は赤く腫上がって、皮膚が焼け爛れていた。

「……………」

ホープが自分のマントを破り、ネオの傷痕にあてがった。

「すまない…」

「しゃべるな。しゃべると余計体力を消耗する。この辺りに薬草はないのか…？」

ネオは目を閉じた。

「あとはお前だ」

空中から魔動師が次々と降りてきた。

ホープはぱつと振り向き、二人をかばうようにして立つ。

呪を組み、人間達が術を放った。

「……………」

「ティアさん」

シアンは何か異変を感じ、顔をあげた。その時、辺りが明るい事に気がついた。

「…！？」

驚いて、辺りを見回す。

その光は聖緑樹ヨゼフから発していた。

シアンがそれに見とれてみると、光がさらに増えた。まるで樹に、飾りがついているかのように輝きが増した。

「光？」

ティアもそれに気がついた。涙に濡れている頬をあげて、シアンと同じようにそれに見入った。

「何か…少し体が疲れませんか？」

「そういえば…」

まるで、魔力を発した後のように体に倦怠感があった。

「聞いた事があるわ。ヨゼフは魔力の強いものに反応しその力を吸う、と…」

「魔力？じゃあこれが」

聖なる緑樹。

シアンは改めてその樹を見上げた。魔力を吸い取られ、光を発している樹を不思議な気持ちで見ている。

「そして、その樹は魔力を光に変え、この地を豊かにする…」

ティアの頬はもう濡れていなかった。

その樹を見つめる。

とても幻想的で、怖いほど綺麗だった。まるで、この世のものではないような。

気がつくのと、ティアがまた涙を流していた。

「ティアさん？」

ぎよっとしたようにシアンがティアを見る。

「違う。違うの」

ティアは首を振り、涙を拭おうとした。

「何だか感動して…何て言えばいいのかな。すごく綺麗なのに切なくて…」

ティアはもう一度涙を拭った。

「そろそろ戻らないと」

と、その時空間を切り取ったかのように、セクトとネオが現れた。

「ネオ、セクト!?」

シアンはネオを抱え起こした。

「う…っ」

シアンが触れた傷の痛みにネオは目を開いた。

「どうしたのですか」

「シアンか…ホープが…」

そう言ったとき、気を失った。

セクトを抱えていたティアと顔を見合わせた。

逡巡してティアが立ち上がる。

「シアンはここで二人を見ていて。私行ってくる」

「でもティアさん」

「シアンが行ったらよけいに危ないわ」

「でも!」

ティアはセクトの血によって濡れた外套を脱いで、セクトに向けた。

「今は急を用するのよ。ホープが危ないわ」

ティアは矢筒を肩にかけ、弓を背負った。

「ティアさん!」

シアンが呼び止めるのもかまわず、ティアは空へと跳んだ。

シアンはまだネオを抱えたまま、そこに取り残された。

とりあえずセクトの傷を見る。腹に巻かれた布は、もう使い物にならなくなっていた。

シアンはゆっくりと布を剥がしていった。血が僅かに流れていて、

セクトの顔は既に血の気がなかった。

シアンは腹の傷を見て眉をしかめたが、手をかざした。

「時なる神よ。その血を与えよ…」

シアンの手から青白い光が発せられたが、セクトの腹から流れている血は止まらない。

シアンはもう一度術を発する。やはり無理だった。

(これは)

何か、術がかけてあるのだろうか。血が止まらないように。

シアンは術解きをした。うまく解けて、その血を止めた。が、明らかに手遅れだった。

シアンはその顔をじっと見つめる。

その体を抱きしめ、名を呟いた。

小さな体はすっかり冷えていた。

ホープは一人で、数人の人間達の相手をしていた。

人間の一人が放ったものを弾き飛ばし、あるいは防護壁で阻んだが、きりがなかった。

(…く)

ここで人間達を引きとめておかなければならない。しかし、ホープの体力も限界に近かった。

(どうすればいい…?)

魔動師の一人が剣を繰り出すと、電流が流れた。

「ぐわあっ…!!」

剣先が触れただけで焼けるような痛み、ホープが膝をついた。

さらに攻撃の手が加わる。あたりが白に包まれた。

「……!!」

しかし、その光は空に突然現れた文字の円によって阻まれる。

「ホープ!」

ティアがホープの側に降りてきた。

「ティアさん……」

ティアの赤髪が揺れた。

「しっかりして。ホープ」

人間達が一斉に光を放ってきた。文字の円が耐えきれず、びりびりと震えた。

(このままでは術が解けてしまう…!!)

さらに攻撃が加わり、障壁が意味を無くそうとしていた。

壁がまさに消えようとした瞬間、突然光が降りてきた。

その光は今まで人間達が放っていたものとは、違うものだった。魔動師の放つ冷たい鋭利さでなく、それは暖かさを放っていた。と、その光がホープの頭上に降りてきた。

ティアはその瞼を閉じていても入ってくる光に、思わず目を開いた。
(なに…この光？聖緑樹の…?)

そして、その光はホープの中にすう…と吸い込まれるように消えた。
(……!)

光がホープの中に吸い込まれていくと同時に、ホープの体が白い、だが目を射す事のない光に包まれた。

「ホ…」

見ると、ホープの傷口が塞がっていくではないか。

光が止むと、ホープが目を開いた。

「……………」

あまりの事に、声も出せずにいるティアをしばしホープは見つめ、自分に何が起きたのか解からず瞬きをする。それからはっとしたようにティアを庇った。

「危ない！」

ホープが、人間が放ってきた魔力を防護壁によって阻む。

「ティアさん、ここは危ないですから…」

しかし、言葉は途中で途切れた。

頬に鋭い矢のような物が掠ったからだ。ティアを庇うように立ち、呪を紡いだ。

「闘神センドバアー、我の神よ。光に通ずる闇を払う事をお赦しく
ださい」

ゴウツとホープの抜いた剣が強く、意思を持ったかのように光りだした。

「ホープ！」

シアンは灰色の外套が血で汚れている事にも気がつかず、ただ小さな冷たい体を抱いていた。

それ以外、何をすべきか解らなかった。

「ごめん…セクト」

シアンはセクトの体をそつと横たえると、立ち上がり湖の辺に近づいた。

「水の乙女精…あの二人をどうか暖かく見守ってください……」

シアンは、頬を濡らしている涙を隠そうともせず、暗空を見上げた。

あの頃に還りたい……

遠くで微かに、風によって木が揺れた。

木といつても、葉も実もつけていない寒木だったが。今は月も星もない夜だった。

月無夜。ほんとうの。

月守りの民達が南へと向かって旅立ってから、はや何日かが過ぎた。食料ももうすぐにも底をつきそうだったが、そんな事枯れていくこの湖に比べたら、何のことは無い。

月司が立ち上がり、祭壇へと向かっていった。フレミュも後に続く。降殿に入ると、冷めた空気が肌を刺した。司が水鏡の前に立つと、何かを呟く。

水面が光りだし、司はそれを見た途端声もなく固まった。

「司様？」

フレミュが訝しげに思っ、月司に声をかける。

しかし、それでも司は微動だにしない。

「これは…」

しばしの時が流れた後に、やっと司が口を開いた。

「何て事を……」

「月司様？」

フレミュがただならぬものを感じて立ち上がった。

「風の民が……」

「え？」

月司は肩を震わせていたかと思うと、その場に崩れ倒れた。

「月司様！」

フレミュはかけ寄り、司を抱え起こした。

「どうしたのですか、司様？」

しかし、司は水面を指差すだけだった。

フレミュは水面の光を見た。

「これは!？」

ホープは目を鋭くし、動師の放ってきた光を振り払った。剣がまた輝きだす。

「はあ…っ！」

ホープが再び剣を振り下ろすと、剣の光が生き物のように動師に襲いかかった。

動師が壁を作る。

ホープが剣を振り上げると、今度は動師の腕にあたった。

「く……」

しかし、数歩よろめいただけだった。

「ホープ、こんなことをしていてもキリがないわ…何か突破口を開かないと」

矢を動師の一人の肩に当てながら、ティアが叫んだ。

「わかってます。けどこの人間達をここで倒さないと…」

また別の場所から光の球が飛んできた。

ホープが剣でそれを分断する。ティアがその動師を狙うが、じりじりと追い詰められて行く。

相手が多すぎる。

(このままじゃ…)

ティアは、ぎりつと歯を噛んだ。

「ホープ、私が呪を唱えるからその間援護お願い！」

「え？」

ホープがまた飛んできた光を避けながら、ティアの方を振り返った。

ティアは指先を矢の尖りで切った。

「あんまり使いたくなかったけど。師よ…力をお貸してください」

ティアがその血を地面に落すと、ティアの足元に円い奇妙な円の羅列が現れた。

「！…これはもしや」

ホープがティアに向かって飛んできた炎を打ち消しながら、それを見た。

（エルフの請獣魔法）

「我が守人よ。その与えられる頸脈のもとに」

ティアが呪を唱えると足元の円が光り出す。

氷が矢となって放たれる。ホープは左手をかざし、防護壁によりそれを止めた。

「さきさりて。我の地のもとに契約する。先にも結うずる」

ホープが術を組む。

「終えることなく辿る由岐の岬よ。我の教えよ。今その力を…リ
ディエ・ハーズ…テリバア！」

その円になった文字が、さらに光を増し風を巻き起こす。人間達もそれに見入っていた。

光がやむと、中から現れたのは…何とも可愛らしい人形のような生き物だった。

ホープはつい、手をとめてそれをまじまじと見つめた。

それはまるで猫のような黄色の体に、頭から尻尾にかけての体の大部分を占める白い長い毛と、くりくりとした黒い瞳をしていた。

「テ…ティアさん？」

ホープが恐る恐る、といった感じで声をかける。

「ミヤア？」

今の状況に全くにつかわしくない、何とも愛らしい声でその生き物が鳴いた。

ぼうとしていた人間達がはっと、したように動き出した。

ホープも気を取り直し、そのとても愛らしいものを護ろうとした。

が、その必要はなかった。

見たこともない、防壁のさらに複雑に絡まった文字の円が、人間達の攻撃を阻んだ。

（なんだ…あれは）

ホープはしばしそれを見つめた。

あんなものは初めて見る。

人間達もわずかに動揺の色を見せ、たじろいだ。

「主の名のもとに…光よ！」

ティアがそう叫んだ瞬間、真白き光に辺りが包まれた。思わず顔を手で覆う。

数本の光の矢が動師達に向かって放たれた。動師達の結界を破り、動師の足や腕などに刺さった。

…不安なんです。いつか…この手で人間を殺さないといけないのか…と……

シアン…私だって同じ。誰も殺したくない。

ティアは月のない夜を見上げた。

今、どんな気持ちだろう。

「フミヤア」

猫のような人形が鳴いた。

どうするのかと指示を待っているのだ。

「私達に敵する者を…排除せよ」

ゴオウン。

爆発的な炎が辺りに響いた。

「ぐおお……」

炎が人間達の体を包み込み、人間達は苦しそうにその炎から逃れようと暴れた。

「すごい……」

ホープが呆然と呟く。

どんな魔道もこれほど爆発的ではなかった。

「おのれ…っ！」

人間たちが、炎の中から姿を消した。

「あ……」

ティアがその場に膝をついた。

「ティアさんっ」

ホープが駆け寄る。

「大丈夫…それよりネオ達を」

「ああ…とつさにティアさん達を思い浮かべて移動させたから良かった。別のところへ行かなくて」

「よくない」

「え？」

「セクトは…もう」

「……………」

ホープは無言でティアの肩に手を置いた。

「すみません。私の力が足りないばかりに…」

「…違う。ホープのせいじゃない」

「あの…先程の生き物は何と言うのですか？」

ホープがティアに尋ねた。

「フアニクス」

「フアニクス…太古の。成る程」

「とにかく…ネオ達の所に行かないと」

その日は本当に長い夜だった。

月の光が無いからより一層そう、感じられた。

月はもう、光を差し延べ無いのだろうか。

闇。今度こそ本当の…

あなたの手には、一欠けらも……

13・瞬元

「…ん」

ネオはぼんやりとした頭で目を開いた。

そして、ソウエルの光が遮る事なく自分の顔にあたるのをしばしばう、と見る。

(あれ)

何か忘れているような。

「セクトっ！」

「な〜に？ネオにーちゃん」

ネオは返事が返ってきた事に、驚いて思わず耳を疑った。

「今のは…幻聴だよな。だって」

セクトは、もう。

「ひどいよ〜オイラここにちゃんといるじゃない〜」

と、目の前に立っていたのは薄羽蜻蛉のような、左右対称的な羽をつけた子供だった。

そのひどく訛のある口調は…

「セクト！」

ネオはセクトを力強く抱きしめた。

「く…くるし」

「…これは夢じゃないんだな？」

ネオはしばらくの間、言葉無く涙を流していた。

そして、セクトの顔をしっかりと見る。

「セクト本当に…生きてるんだな」

「うん」

ネオはもう一度その小さな体を抱き締めた。

「もう大丈夫みたいね。起きてすぐに体を起こせるなんて」

ネオは、はっとしたように顔をあげた。

「ティア！無事だったのか」

「私はそれほど。それより背中への傷はなんともない？」

「あ……」

そう言われて、初めて自分が背中に傷を受けた事を思い出した。

「なんとも……ない。元通り……？」

背中に手を触れてみる。しかし、背中は何の痛みも訴えなかった。

ネオが不思議に思っただけで済んでくれた。

「これはいったい？何かの魔道で？」

「そうかもしれない」

「どうということだ」

ネオが手を下ろした。

「私にもよく分からない。ただ、私達がここに戻って来たら光が……魔力を吸い取った聖緑樹の光が、ネオとセクトの体の中に吸い込まれて行くのを見たわ」

「じゃあ、俺達はその樹の下に倒れていたんだな」

「……ええ」

「そうか。俺とセクトはその聖樹とやらに助けられたんだ……」

「……」

そこで、浮かない顔をしているティアに気がついた。

「どうしたんだ」

その時、ふと不安に襲われた。ネオはティアの持っているものに気がついた。

「それ……」

突然、ホープがすぐ側に現れた。

「どうだった？」

ホープは首を振った。

「この辺にはもう……少し遠くまで行ってみたけれど特にそれらしきものは」

「じゃあやつぱり……」

ネオはその時になって、自分がどこにいるのかを思い出した。

「そうだ、ここはいったいどこなんだ」

太陽の光が遮らないと思つたら、葉の無い木の下にネオは眠つて
た。そして、その木が続く先には林…いや森があつた。

「あそこにいるのは危ないと思つて。だからここに移動したの」

「ここは…どの辺りなんだ？」

「もう北に近いんじゃないかしら。肌寒いし」

「そうか。だから木がこんなに枯れているんだ」

「いや、もしかしたらその所為だけではないだろう」

ネオが、その枯れて朽ちている木を見上げるとくいくいと、セクト
がネオの袖を引っ張つた。

「あのね。オイラたちはね、ヨゼフの光だけで息をふきかえしたん
じゃないんだ」

「?どういうことだ」

「…ねーちゃんの仲間がたくさん死じゃつて、ねーちゃん一人にな
つてしまったから、だからその仲間達がねーちゃんを一人にしない
ようにつてオイラたちを……」

「…そんな」

ネオは思わずティアの顔を見た。

「本当なのか…ティア？」

ティアは哀しげに目を伏せた。

「……………」

「誰に?やつらか」

「そうだ。たぶんやつらはエルフの村の位置を知っていたんだと思
う」

ティアの代わりにホープが応えた。

「じゃあ、なんで教えてくれなかつたんだ!? 前々からの予危はあ
つたんだろう?なのに、なぜ……」

「ネオ」

ティアに掴みかかったネオを、ホープが止めた。

「今更、もうどうしようもない。どうすることも……できない」
「……………」

みな、一様に押し黙った。

「これからどうするんだ」

ネオが口を開いた。

「シアンは…？まさかまた死んでしまったのか？」

「シアンは生きているわ。…ただ」

「ただ？」

ティアはその手に持つているものを哀しげに見た。

「ネオとセクトが倒れていた所にこれがあったの…」

それは灰色の外套だった。

村を出る際に、エルフの術で編んだ灰色の外套を着て出た。それを

脱ぎ捨てたという事が、ただ一つの真実を示していた。

シアンが着ていた外套は、セクトの血で染みになっていた。

「じゃあ、やっぱりシアンは」

「たぶん北へ向かった。…一人で」

月の光は、暗闇を照らす光となる神の光。

でも二神はもう力を持たなくなる。

風はいつたい僕に、何を与えてくれるのだろう。

この世界にいつたいなんのあとを遺すというのだろう…

町の本通りに並ぶ軒店には、今日も威勢のいい声が聞こえてくる。

それに混じって、食欲をそそるような匂いもどこからか流れてきた。

ここは街道なのだろうか。人通りが多い。まるでちよつとしたお祭りみたいだ。

男はそんな中を、脇目もふらずに人並みをかき分けていく。色々な所から声が飛び交い、商人が自分の店に客を呼ぶ声が聞こえてくる。穏やかな風が吹き、その町象が穏やかなものになった。

やがて、男が町の本通りから人気の無い裏道にきた。途端、さつきまでの喧騒が嘘のように静かになった。

男はある、小さな家の扉の前で立ち止まった。男が扉を開けて中に

入ると、鷲が飛んできた。

「やあ、ローディ。お留守番ご苦労様」

男はそのローディという鷲の首を撫でてやると、ローディが嬉しげに目を細めた。

その部屋には水を汲める窯の他に、藁を敷いた上に布を掛けた質素な寝台があるだけだった。

そして、その上に白い純白の礼装を着た猫のような人間が眠っていた。獣人という種族：異端者だった。

男は、その白猫の獣人の近くに腰をおろした。

その白猫の獣人に触れようとした時、いきなりその獣人が起き上がり男の手を引つ掻いた。

「触らないでっ！」

男の手の甲から血が筋となって、流れ落ちた。

「……………」

男はそれをア然と見つめた。

獣人は爪を構えながら、男をじっと睨みつける。

「ピイイ！」

鷲が怒ったように、白猫の獣人に嘴でつつこうとする。

「…っ！」

獣人が手でそれを追い払おうとすると、鷲がバサッ、バサッと翼を振って獣人に爪をたてる。

「ローディ。やめるんだ。僕は大丈夫だから」

ローディはおとなしく引き下がったが、まだ気に食わないようだった。

「言葉は…通じないみたいだね。それともトテア語が解る？」

白猫の獣人はまだ睨みつけていたが、少し頷くような素振りを見せた。すると、男の顔に嬉しそうな表情が浮かんだ。

「よかった！言葉は通じるみたいだね。異種族は頭が良いって本当だったんだ」

「……………」

獣人はその男の顔をまじまじと見た。その顔は笑うと、まるで少女のように見える。…いや、元々が女顔なのだが。

「女の子みたい」

まだ、警戒しながらもふと口元を歪ませた白猫の獣人に、男はむつと怒ったような顔をした。

「ひどいな。それでも顔のことは気にしているのに」

獣人は驚いたようにその男を凝視してしまった。

「あなた…解るの？私たちの言葉が」

「僕は、古代とかの羅列文字みたいなものが好きだからね。そういうものにすごく興味を持っているんだ。だから自然とオイレテイの言葉は覚えてしまったよ」

「オイレテイ（中海語）？　すごい…」

そこまで言うてから白猫の獣人は、はっとしたように口を押さえた。
「……………」

男は側に置いてあつた袋から何かを取り出し、獣人の目の前に出して見せた。

「これを食べてみて。すごくおいしから」

白猫の獣人は顔を背けた。

「…ここに置いておくね。食べたくなったらいつでも食べて」

「どうして私を助けたりなんかしたの」

「え？」

男は言われた意味が解らず、思わず訊き返していた。

「私を助けると、村の皆が死んでしまうのに！」

「…え？」

男は言葉が詰まった。

「どういう事？」

しかし、白猫の獣人はまた顔を背けただけだった。その顔には苦痛の表情が浮かんでいた。

「君は…」

獣人は白い礼服を着ていた。多分、儀式の為に用意されたものだろ

う。

そして最後の衣裳となるはずだった。

偶然あそこにこの男がいなければ、この白猫の獣人は今、こうしている事はなかっただろう。それなのに、獣人はずっと辛そうな顔をしている。

「君は獣人だろ？ 獣人は人間なんかよりも力が上だと……」

「私は知らない……なにも」

白猫の獣人の体が震えた。

「目が覚めたら人間がお母さまと一緒にいて……それで分かった。私が言う事を聞かないと村の皆が殺されると」

「……………」

「そして、なぜ獣人が人間に屈しているのか分かった」

獣人は呟く用に言った。

「なぜ……？」

「簡単よ。神が人間の前に堕ちたのよ」

男はあまりの事に言葉を失った。

「……まさか。いくらなんでも人間が」

「本当よ。神は……人間に負けたのよ」

「……………」

男はまた言葉が継げなくなった。

「しかし、神って一体……？」

「……………」

白猫の獣人はそこで初めて、男の目をまっすぐに見た。

「お願い。私を殺して」

「……え」

男はそれこそ、その顔を驚きに見開いた。

「どうせ死ぬ命だったのよ……私が死んだとなれば人間達も村の皆に何もしないとと思うのよ。……もう手遅れかも。だからお願い」

「……ちよつと、急にそんなこと言われたって」

「あなたは確かに私を助けてくれたかもしれないけど、でも私は生

きていてはならないの……」

沈黙がしばらく小さな狭い部屋に流れた。

白猫の獣人がじっと男の目を見ている。

「……せつかくだけど、無理だよ。僕にはそんな事できない」

「どうして！」

獣人が悲痛に滲んだ声で叫んだ。

「私が…生きてさえいなければこんな事にはならなかったのに…こんな思いをするなら」

「でも君はまだ何もしていない」

「…え？」

白猫の獣人は目を見開いた。

「なぜそう決めつけるんだ。まだ、その村の仲間が生きているかもしれないじゃないか」

「だけど」

「これから見に行けばいいじゃないか。村の皆だって君の事を心配しているはずだ」

「……」

男は立ち上がった。

「僕はルゼ。君の名前は」

しかし、白猫の獣人は何も答えなかった。

ルゼが立ち上がると、ローディが天井の木の組み合わさっている所に飛んだ。

「…君はもつと休んどいたほうがいい。ローディ、この娘がどこかへ行かないように見ていてくれ」

鷲が一鳴きした。

ティアは川の辺に座り、皮袋に水を入れた。

袋の蓋をしっかりと閉めると、他の袋に手を伸ばそうとした。

その手がふと止まった。

「……」

前、こうやってシアンと水を入れていたっけ……

まだ、エルフの村を抜けたばかりの川で。あの川と比べると、川の水はとても冷たかった。

手を入れると凍えてしまいそうだった。

「ティア」

ネオの呼ぶ声がした。

どうしたんだろう。

ティアは全部の皮袋に水を入れると、立ち上がった。

ティアが戻ると、真っ白いものがまず目に飛び込んできた。

よく見ると、それは白い風翼神リーヴァンだった。

「リーヴァン様……」

リーヴァンは近くの枝の上からティアを見下ろした。

《すまない……》

「え？」

ティアは謝られた意味が分からず、皆の顔を見回した。

鷹の姿をした、しかしそれは仮の姿の神はうな垂れた。

《我にもっと力があつたなら……風の民を一人で行かせる事などなかった》

「……………」

《もし、と思っていた事が起きてしまった……こうなっては仕方ない。本当は告げるつもりではなかったが》

「リーヴァン様？」

リーヴァンの言わんとしている事が分からず、ホープが眉をしかめた。

リーヴァンはしばし躊躇った後、口を開いた。

《みなここまでよくやってきてくれたと思う。しかし、ここから北は我らでさえ、踏み入る事の敵わぬ地。だからみなにはこの役を降りてもらいたいと思う》

「……………」

皆が驚いたように固まった。

《せつかくここまでやってくれたのだが、肝心のものは何一つ…》
「なに勝手な事言っただ？」

その時、ネオが怒ったように口を開いた。

「いくら何でもそれは無いだろう！？俺たちは別に、この世界を救おうとかそんなの考えてねえ！ただ、シアンと…あいつと一緒にいたいだけなんだ」

《……》

リーヴァンは目を閉じ、苦しそうに嘴を歪めた。

「いくら神だからってそんな事言うのか…！」

「ネオ」

ホープがネオを宥めようとした。

「離せよホープ！一言こいつに言ってやらないと気がすまねえ。

いつとくがお前達がな、こんなこと押し付けたんだろっ！？」

「ネオ！」

ホープがネオの肩を押さえた。

「…言っつていい事と悪い事があるだろう」

「けど」

「それでもだ。リーヴァン様だって、本当はこんな事言いたくない
筈だ」

「……」

リーヴァンは伏せていた目を開いた。

《すまぬ…我らがこんな事になりさえしなければ……》

「リーヴァン様。一つお伺いしたいのですが」

《なんだ？》

「あなた方…神々はいつたどこに封印されているとこののですか
？」

リーヴァンは少し嘴を閉ざした。

《人間の魔力の中で我の身体は眠っておる。我らの封を解くには人間達の術を解かねばならぬ》

「人間達を」

ホープが俯いた。

《だから風の民の力を解き、その力をもってして我らを解いてもらおうとしたのだが…》

「そんな…！」

ティアが落胆したように叫んだ。

「シアンは…シアンの意思は？」

《……すまない。その時はもうそうする事しか無いと…》
「なにをお！」

ホープが、リーヴァンに今にも掴みかからんばかりのネオを止めた。

「風翼神、でも私達はこの旅をやめるつもりはありません。私たちも北へ向かいます」

ホープがリーヴァンにはつきりと、そう言った。風翼神は何かを言いかけて口を閉じた。

《……そうか。すまない……本当に》
「…いいえ」

シアンの気持ちなら私には少しだけ分かる。

だって、あれが本音だから。

「リーヴァン様」

ティアが呼びかけると、その白き鷹は閉じていた目を開いた。

「風の民の記憶を…解いてから本当にあなた方を解封させますか」

《……》

リーヴァンは哀しげな表情をした。まるで人間のような。

《でも、風にこの世界の力を与えたのは事実。風の民が閉じていた記憶を開いたなら我らはそれに応えよう。ただ黙っているだけでは気が済まぬからな。アセイドレなんかあまりの事に気が狂ってそう
だ》

「リーヴァン様」

ティアが口元を少し緩めた。

《だが、北へ行く前に行ってもらいたい場所がある》

「行ってもらいたい場所？」

《そうだ。そなた達はもう一つの光、風の星の元へと行ってもらいたい。本来はあそこにいるべきのものではないのだからな》

「でもリーヴァン様、風の民はシアン以外には排絶されたのではなかったのですか」

ティアがもつともな事を聞いた。

《我らも初めそう思っていた。もう一つの運命の星ならもっと早くに光を放つはず。多分あれば、混血種なのだろう》

「混血？なんの」

リーヴァンがふと目を空に向けた。

その視線の先にはもう以前のような蒼く透き通るような青空はもうない。あるのは少し濁ったような空だ。

《人間と…風の民の。何の因果かは知らぬが混血種が生まれた》

「……………」

皆は押し黙った。でも、それは。

「いけない事なのでは…」

《そう。本来ならありえない事だ。しかし、今はこのような時代だ。そんな事になっていたとしてもおかしくはないのやも知れぬ》

「人間との…」

《だから、今まで風の力が眠っていて光を放たなかったのだと思う。風と人間との間兎が、これまでに無い常識を覆した》

ホープはそれについて考え込んだ。

「それでリーヴァン様。その風の民と人間の混血の子を…北へ連れて行くのですね」

《そうだ。だが待ってくれ。私が送ろう。その混血兎ともう一度会ってみたいからな》

リーヴァンはホープの肩に降りてきた。

辺りの景色が変わる。

《運命の櫛に逆らえないもの。本当に苦しいのは…》

そこは前のように人通りがあるような場所ではなかった。今度は人目のない裏庭に移動してきた。

しかも、前みたいに途中でバランスを崩すなんて事もなかった。

「さすが神さんだぜ。誰かさんとは大違い」

「さっきまでその神さんとやらに、グチグチ文句を言ってたのはどこのどいつだ」

ホープに睨まれ、ネオはぶつぶつと口の中で思いつく限りの罵倒を咳く。

「どうやってその子に説明するの？まさかいきなり一緒に来てなんて言えないし」

皆はしばらく考えこんだ。

「オイラが言ってくるよ」

そう言ったのは、妖精族のセクトだった。

「え、でも」

「一緒に行こう、て誘ったらいいんだよね。オイラ行ってくる」
そう言つと、ささつと行つてしまった。

「あ……」

「まあ、いいか。失敗したら次の手を考えればいいんだし」

「俺、少し見てくる」

そう言つてネオも表へと出て行つた。

「なんだかんだ行つても結局は心配なのよね」

「ネオはあんな兄弟が欲しかったんじゃないですか」

「そうね……」

ティアは黒髪のエルフの事を思い浮かべて、悲しそうな表情になった。心臓がまるでひっぱられてるかのように痛い。

「でも、いきなり行つて驚かないでしょうか。いくら相手がセクトだからといって」

「…どうかしら」

その詰まったような物言いに、ホープがティアの顔を覗き込もうとした時、リーヴァンが首を動かした。

《来た》

見ると、セクトの後ろにシアンと同じ白銀の髪をした少女がいた。後ろにネオもいる。

「セクトすごいな」

その少女がティアたちと目が会うと、「あ…」と立ち止まった。

「もしかして…この前の？」

全然、訛のないトデア語だった。

(これは)

もう、最初に何を言おうか、とかそういうものが全部頭の中から消えた。

「あなた…この世界にはいけないと知ってる？」

「え？」

少女は驚きに目を丸くした。

「ティアさん」

ホープが慌てたようにティアの腕を引っ張った。

「いきなりそんな事をいつてはいけませんよ！」

「知っているわ」

「え」

今度は少女の言葉にホープの動きが止まった。

「知っている。お姉ちゃん達はだれ？」

ホープとティアは顔を見合わせた。

「そう。…じゃあお姉ちゃん達はそこから来たの」

目の前に出されたお茶に手をつけようとはせず、ティアはその少女を見つめた。

「ええ」

「そういえば名前をまだ言っていないかったね。わたしはエフィメ」

「エフイメ…ちゃん。その名は誰が？」

「呼び捨てでいいわ。わたしのおじいちゃんがつけてくれたの」
「おじいちゃん？」

「そう。わたしと一緒に住んでるの」

ティアはその家の中を見回した。
素朴ですつきりとした家だった。

「その老人は今は？」

「今、たぶん町のはずれだと思う。なんか柵が崩れそうだからって見に行くって…他の人に任せればいいのに。もうすぐ返って来るはずだけど、ほんとにがんこなんだから」

エフイメはその時の事を思い出したのか、少し口元を緩ませた。
ティアはエフイメの目をじっと見た。

少女の瞳の色はシアンのような澄んだ色ではなく、深い碧の瞳だった。

「エフイメ、あなたの両親は？」

すると、見る見るうちにエフイメの顔が曇った。

「わたしのお父さんとお母さん…わたしが小さいころに死んだって聞いたわ」

「そう…ごめんね」

「…ううん。いいの」

エフイメは少しだけ笑った。

「ねーちゃん」

セクトが促してきた。

「…うん。エフイメ突然だけど、あの白い鷹覚えてる？」

「鷹？さっきの」

「うん。そう」

エフイメは少し考え込んだ。

「ああ。どこかで見たことがあると思ったら、知ってるよ。お姉ーちゃん達の事ですい忘れてた」

エフイメは、えへへと笑った。

「で、その鷹がどうしたの」

「うん…実はあの鷹は神様なの」

「神さま…？ほんと？すごい」

「…うん。その神様があなたはここにいるべきじゃないって、そう言ったの。私達と共に北へ行け。」と

「え…？」

エフィメは目を見開いて、固まった。

「どういう事なの？」

ティアは少し間をおいてから口を開いた。

「あなたは、自分がどういう存在なのかを分かっているでしょ？だから自分で考えてみて」

ティアは椅子から立ち上がった。セクトも立ち上がる。

「今日の晩だけ、この村のはずれで待っているから。考えて。本当にここがあなたの居場所なのかどうか」

「……………」

外に出ると、ホープが茂みから出てきた。

「どうでした？」

ティアは肩を竦めた。

「分からない。あの子しだいね」

「それでいいのか」

ネオがそう言った。

「…多分」

皆はリーヴァンを見た。

リーヴァンが木の枝から降りてきた。

《その心えはあの少女自身が持っているだろう…》

リーヴァンが、月の光が僅かな夜空を見上げた。

今日も星影がない。

「やっぱりむりだったのかな」

セクトが残念そうに呟いた。皆も何も言わずに、空を見上げる。

「リーヴァン様」

リーヴァンは目を伏せた。

《… 本当はあの少女の居場所はここには無い。しかし、運命に逆らうというのならば、それはあの少女に返ってくるだろう》

「……………」

皆が立ち上がった。

「さて、お姫さまを迎えに行くかな」

ネオが背伸びした。

「まって！」

その時、エフィメが走ってきた。

「まって。わたしもつれて行って」

ティアは目を細めた。

「もう、こないかと思ってたわ」

「ごめんなさいっ。おじいちゃんとお別れしていたから」

エフィメはそう言うと、哀しそうな表情をした。

「じゃあ、シアンを追いかけに行こう …… 北の地へ」

リーヴァンがホープの肩に降り立った。

「おや、こんなところにいたとは。随分捜しましたよ」

まだ若い男の声がした。その男は黒くて不気味な外套を着ていた。

「……………」

藁の上で寝ていた白猫の獣人がはっとしたように、起き上がった。

「だめじゃないですか。勝手にこんな所へ来ては」

動師が手を伸ばしてきた。

(… いやっ！ もうあんなところに戻りたくない。ホープ…！)

白猫の獣人が壁際に後ずさる。

「さあ…」

手が目の前に迫ってきた。

「ホープ！」

「ギイイイ！」

猛禽類の鳴き声がしたかと思うと、鷲が動師に爪を立てて襲いかかった。

「いつの間にここに入った？」

「ふ…またあなたですか。あんなもので結界といえるのですか」
ルゼが手をかざした。

「あなたこそ馬鹿ですね。あなた一人で僕に対抗できると思ってるのか？ローディ、あいつを懲らしめてやってください」

獣人は目を見開いた。ローディの体の色が青白く光っているのだ。

ローディは動師に爪をたて嘴で噛もうとした。

動師が結界を張ろうとするが、翼でそれを邪魔する。

「…おのれっ」

動師は手でローディを叩いた。ローディの体が吹っ飛び、壁にあたって気を失った。

「ふん。あなたはこんなものでしか何もできないのですか」

動師が指を組んで呪いを絡ませた。

「この獣人を助けた事があなたの不運でしたね。ここでくたばりなさいっ！」

動師が呪いを放とうとした。

「ローディ」

すると、今まで倒れていたローディが起き上がり動師に向かっていった。

「…！」

ローディが動師にぶつかると思った瞬間、動師が放とうとしていたものが消失した。

「…！？」

獣人は驚いたように立ち上がった。

（もしかして今の…魔術中和者？）

初めて見た。

動師がまるで力を失ったかのように倒れる。

「…っ？いったい、何をしたのです」
しかし、ルゼは手をかざした。

「ローディ」

「だめっ殺さないでっ！」

獣人がルゼの腕を掴んだ。

「だけど、この人間は」

「それでも嫌なの。誰かが死ぬのを見るのは…嫌なの」
ルゼは手をおろした。

「私を逃がすつもりですか？ふ…いつか後悔するでしょう。私を逃がした事を」

そう言いながら動師は息も切れ切れに、その場から消えた。
動師が消えると沈黙が落ちた。

「君、もう大丈夫だよ」

しかし、白猫の獣人はまだその腕を放さない。

「君？」

「…あ、ごめんなさい」

獣人がその腕を離したのを見て、ルゼは獣人を見下ろした。獣人は俯いたままだった。

「大丈夫？」

ルゼはそつと優しく言った。

獣人はきゅと唇を噛むと、顔を上げた。

「ありがとう…もう大丈夫」

泣かない。泣く場所は決めてあるから。

「そう」

ローディが飛んできた。

「ローディ、ありがとう」

鷲の体はもう青白く光ってなかった。

獣人はそれを見て、ふと口を開いた。どうやら落ち着いてきたらしい。

「あなたは術中和者なの？」

ルゼはローディの首を撫でてやった。

「そうだけど…でも僕は媒介となるものがないと術を中和できないんだ」

「それでもすごいわ。中和者なんて」

ふと、獣人の顔が曇った。

「あの…ごめんなさい。その、今まで……」

ルゼは少し戸惑ったような顔を浮かべていたが、ふと微笑った。

「じゃあ、君の名前を教えてください？」

白猫の獣人は、あ、というように口を開いた。

「ピユア。ピユアというの」

ホープはふと顔をあげた。

「まだ。また…聞こえた。」

しかもやはり気のせいではない。ずっと、感じていたもの。忘れてくても忘れられない…あの声。

《どうした》

リーヴァンが不思議そうに、ホープに声をかけた。

「……」

ホープがぎゅっと、手を握り締めた。

「あの…ちよつと戻っていいですか」

その声に、みんな振り返る。リーヴァンが彼の肩から降りた。

「その…行きたいところがあって」

「どうしたのホープ？」

セクトが飛んできた。

「北へ行くまでに戻ってきますから」

「え、でも」

ティアが戸惑ったようにセクトと顔を見合す。

「すぐに戻ってきますから」

「別に私が止められる事じゃないけど」

「ホープ、戻ってくる？」

「ええ。…必ず」

ホープの姿がそこから消えた。

「相変わらず、何かがあると落ち着きがないんだからなく誰かさんは」

「え？ホープいったいなにをしにいったの？」

「さあ」

「え〜？」

セクトがほっぺたを膨らます。

「でも、ほんと何をしにいったのかしら？」

朝も明けきらぬうちにピュアは目を覚ました。

眠るのが怖くなって目を開けていたのだけれど、どうやら眠っていたらしい。

夢を見ていた。自分がまだ、幼い頃の自分で。

そして。

その隣を同じ速度で歩いてる、大好きな人がいた。ただ、一緒に歩いてるだけ。私の好きな草原を。

まるで、幸せがそこにあるようだった。あの人は振り向き、呟いた。ピュア…

それだけで、それだけで、胸がいっぱいになるの。

「…ア」

ピュアは目を開いた。

今のは夢？

「ピュア」

しかし、今度ははつきりと聞こえた。だれ…？

ピュアが目を開くと、その声の主は安堵したような声をあげた。と、いきなり抱きしめられた。

「！？」

「よかった…」

その声は。この腕の感触は。

「ホープ!？」

「そうだ…やつと逢えた」

「本当に?…ホープ」

「…ああ」

ピュアはそれを聞いた瞬間、涙を流した。

私の居場所…

ピュアはその懐かしいものを、涙を流しながら感じていた。

「私がいなくなっただから村はどうなったの？」

まず、聞きたい事を聞いた。

「村は今…俺にも良く分からない。ピュアを捜してあの後村を出たから」

「お母様はどうなったのかしら?前、お会いしたの」

「え?いつ」

「私がまだ搭で捕まっている時…」

ピュアはずっと、母親の事が忘れられないでいた。あの哀しそうな顔を。

「搭?やっぱりあれはピュアだったんだ」

「え?」

「実はピュアの声がずっと聞こえていて、それを追っていたんだ。そしたら搭でピュアの声がして、来るな…って」

「あ…あれは」

私がいなくなると、村の皆が死んでしまっただけじゃないかと思って…

「じゃあ、やっぱりホープが私を呼んでいたの?」

ホープが照れたように頷いた。

「…うん」

ピュアはホープの顔をじっと見つめた。

前より、背が高くなって視線が変わっていた。それに…

「ピュア?」

「あ…うん。ほんとに久しぶりだねって」
それからふと、思った。

「ねえ、ホープ。私が連れ去られて何年立つの？」

「そうだな。ずいぶんと長く感じて…今は二のズエルで。約、八年
か」

「そんなにも？」

私、そんなにも眠っていたんだ。

「うん。だからピユア、綺麗になったな」

「……え？」

思わず聞き返していた。

(きれい？私が？)

ホープは照れたように向こうを向いている。魔力球の光があたっているけど、赤いものまではどうやら誤魔化せなかったようだ。

「ホープも…すごく素敵になったね」

ピユアは自分で言うてから、はっとしたように口を手で押さえた。

(私…？)

「その獣人は？」

ピユアとホープはその声のしたほうへ、同時に顔をむけた。

「ルゼさん」

ルゼが驚いたようにホープを見ている。どうやら、話し声で起きたらしい。

「私の友達で…私をずっと捜していてくれたんです。ホープ、ルゼさんは私を助けてくれた方なの」

「そうだったんですか…ありがとうございます」

ホープは頭を下げた。

「いや…そんな対した事じゃないよ」

ルゼはピユアに笑いかけた。

「ピユア。よかったね」

「はい。ありがとうございます」

「でも」

「すみませんが急ぐのでこれで。御礼はまた後ほど…ピュア」
ルゼが何か言いかけたのを、ホープがもう一度頭を下げた。
「ホープ!？」

ホープは、ピュアを抱えたままその場から消えた。

「何もあんなに急がなくても良かったのに…ホープ!」
ピュアはやっとの思いでホープの腕を離した。

「あれじゃ、ルゼさんに失礼じゃない。どうしたの?」
「……すまない」

しかし、ホープはそれ以上何も言わなかった。

「もうっ。久しぶりに逢えたのに…」

ピュアは背中を向けた。

「私、戻るから」

「ピュア!？」

ホープがピュアの腕を掴んだ。

「なんで行くんだ?もう、いいじゃないか」

「駄目よ。あの人は命の恩人なの。ちゃんとお礼をいわなきゃ」

「ピュア!」

ホープが叫んだ。ピュアがびくつとしたように固まった。

ホープが怒鳴った?

今まで、私に怒鳴った事もなかったホープが?

「お前を助けてくれたが…あいつは人間なんだ」

「………」

ホープがはつとしたように口を閉じた。

ピュアが泣き出しそうに、ホープを見ていたのだ。

「なんで?…私はただ、お礼を言いに行こうと思って…」

「…悪かった。けどもう一人で行くな。どんなに心配したか」

ピュアは少し目を見開いた。

「…分かった。ごめんなさい」

風翼神が連れて来た場所は、さほど今までとは変わらない所だった。

「ここが滅びの地…?」

「わああ〜!」

セクトの叫ぶ声が聞こえ、見るとセクトが何かに襲われていた。

「セクト!」

ティアがセクトの上に乗っているものを追い払おうと、木の枝を振った。

《さて、その者は…》

「熊か!?!」

「虎よ!」

リーヴァンが止めるのも聞こえず、ティアは木の枝を振った。

「おねーちゃん…それ豹よ」

エフイメがつっこむ。

と、豹の動きが止まった。

「…!?!」

「何だお前ら!そいつの仲間か!?!」

見ると、数人の人間達がティア達を見て驚いている。

「何だあいつら」

「グウルルル…!」

豹が唸り声を上げ、人間達に襲いかかった。

「来るな化け物!」

「駄目…!オラクル…!」

腕から血を流しながら、人間の少女が叫んだ。

「…何となく状況が飲み込めて来たぜ」

ティアが止める間も無く、ネオが飛び出した。

「ネオ!もうっ…!セクト、大丈夫?」

「うん、オイラは平気。それよりあのおねーちゃんが」

さつき豹をオラクルと叫んだ少女の側に、エフイメが駆け寄り、少女に両手をかざした。

エフイメの両手から光が溢れ、光が止むと、少女の傷が塞がっていた。

「よしつ。おねーちゃん、何とも無い？」

少女が驚いたように、傷口に触れた。

「…え？うん。もう痛く無いわ」

それを聞くと、エフイメがにっこりと笑った。

「…ありがとう」

「よかった」

「エフイメすご〜い〜！」

セクトが感動したように言った。

「あなた、何があつたか教えてくれる？」

「え…あ、うん」

ティアに話しかけられびくつとなつたが、少女が立ち上がった。

「私の名前はアマベル。そしてあの黒豹は私の友達のオラクルよ」

「豹が？」

セクトが何の気無しに聞いた。

「いいえ。彼女は人間よ」

（え？）

「オラクルの事である人達とちよつと揉めて、それで…私があの人達に襲われた時、彼女が豹になつたの…」

ティアとセクト、エフイメさえも言葉を失った。

「人間が…」

《あの者を共に北へと導いて欲しいのだ》

「えっ！？鷹がしゃ、喋っ？」

アマベルが驚いているのにも構わず、ティアが風翼神を睨み付けた。

「リーヴァン様…なら最初からそう言つて下さい」

《…言わなかつたか？》

「聞いてませんよ！」

ティアがため息をついた。

「おい、お前……？」

ネオのそんな声に振り返ると、オラクルがうずくまっていた。人間達は既に伸びている。

オラクルが黒豹から人間の姿へと戻った。

「オラクル！」

「……で？あいつを連れてけってか」

「ネオ！」

「……」

セクトから事の真相を聞いたネオは、半眼になった。

《そうなのだ。託宣が降りた》

「……お前からこそ何なんだ？そんな姿で」

オラクルが口を開く。さつきまでの荒々しさが嘘のように消えていた。

「私達は世界を救う為に旅をしているの」

「世界？」

その言葉を聞くと、オラクルが鼻で笑った。

「今さら？」

「今だから」

「……」

「お願い。あなたの力が必要な」

「……オラクル」

アマベルが心配そうに親友を見遣った。

「少し……時間をくれ」

「あ……神様も間違えたな」

ネオがそう言うのを聞いて、ティアが思わず尋ねる。

「何を？」

「あいつ……俺達なんかとはまるで生きてきた世界が違っぜ」

青と銀の瞳に、紫色をした髪。

「……………」

「ねえねえエフィメ、エフィメは癒術者なの？」
セクトがエフィメにそう聞いた。

「えっ？違うよ」

「でも、さっきの傷を治したのは？」

「あれはあの傷の場所だけ時間を戻したの」

（時間：??）

ティアがそれを聞いてエフィメを振り返った。

「時間を？それってタイプディ？」

「セクト知ってるの？」

「うん！すごい！！」

「そうかなあ…？私には当たり前のものだったし」

「すごいよ〜！」

「えへへ」

と、オラクルが出てきた。

「…待たせたな」

「お前ならくると思ったぜ」

ネオがそう言つと、オラクルが照れたように顔を背けた。

今はすっかり昼前になっていた。

太陽神ソウエルの光がまだこの世界を照らしている。しかし、その光は段々と弱々しくなっていた。

（人間とはいったい何を考えているのかね）

この光を亡くしてどう生きていくというのだろうか。

「……………」

「ホープ遅いね…」

セクトが呟いた。

「ええ…そうね」

「そんなん戻ってくるわけないだろ」

セクトがネオを見る。

「ネオ、そんな事言っではいけないでしょ？」
ティアが睨む。

「わかんねーぜ。これから行くところはいつ死んでもおかしくねー所
なんだから」

「……」

「セクト、そう落ち込まないで。ホープがそんな人じゃないって事
知ってるじゃない」

ティアがセクトにそう言った。

「うん……」

「ホープ？」

いつの間そこにいたのか、オラクルが立っていた。

「オ……オラクル」

三人がいつの間にかそこに立っていた人間に、ぎょっとしたように
驚いた。

「い……いつのまに」

「？ ついさっきだが」

ネオが慌てたように立ち上がった。

「ホープとは誰だ」

「え、仲間の……人じゃない」

「何を言ってるんだ？」

オラクルが訳が分からないといったように、ネオを見る。

「ホープは、私たちに協力してくれている仲間の一人よ。獣人の種
族で、すごい頼りになるの」

ティアが代わりに答えた。

「獣人」

「そ、そう。あいつは獣人なんだ」

オラクルが、ふとしたように言った。

「獣人は……滅んだんじゃないのか」

「え！？」

皆の動きが凍りついたように固まった。

「私のお母様はどうなったんだろう……」

ピユアの母、エルミナはずっと人間に囚われたままだ。

「……………」

ピユアがホープを見た。

しばらくピユアは黙っていた。

ホープと再会できたのは嬉しかったけど。でも。

「行きたい。村の皆に会いたい」

「……………」

「けど」

ピユアはぎゅっと、腕を押さえた。

「怖い。もしかしたら……」

「……………」

どうしよう。

どうして私はいつもこうなんだろう。どうしてこんなにも臆病なんだろう。

「ピユア」

ホープがそっと呼びかけた。

「ピユアはどうしたいんだ」

「私は」

ピユアの足元で草が風に揺れた。

ピユアとホープは今、小高い丘の上に居た。

「ホープ……怖いけど行かないといけない」

少し小さな声で、しかしはっきりと言った。

「そうか。だったら、ピユアは一人で行けるか」

「え……？」

ピユアは戸惑ったような表情を浮かべた。

「うん大丈夫……」

「うそだ。ピユアは一人では行けない」

「…！ ホープのいじわる」

ホープが笑いながらピュアを抱き寄せた。

「ピュアは一人で森の奥にも行けなかったもんな」

すぐ耳元でした声にピュアは、頬が赤くなつたのが自分でも分かつた。

「もう！ そんな小さい頃の事なんて…」

だけど、この手を離せない。…離したくない。

しかし、ホープはあまり浮かない顔をしていたのだった。

「本当に？ それは本当なのオラクル」

オラクルは驚いたように、自分を見ている異種達を見返した。

「ああ。そう聞いたけど…」

（なんてこと？ 私達の所だけじゃなくホープ達の所まで）

「それっていつたい、いつの話なんだ」

「確か滅んだのは、つい最近だと聞いたが」

そこでオラクルが、はっとしたように口を閉ざした。しまった、と
というような顔をして背を向けてしまった。

「おねえちゃん達どうしたの？」

エフイメが側に来てそう尋ねたが、誰も答えられなかった。

「……………」

「セクト？」

セクトは肩を震わせていたが、口を開いた。

「また異種が滅んだんだ…」

「え！？」

エフイメが驚きのあまりそのまま固まった。

「そんな 嘘…」

村は以前と変わらなくそこにあつたが、人の気配がまったくしなかつた。

「どうしたんだらう皆…」

ピュアが白い装束を翻して、村へと入っていく。

「ピュア気をつける」

ホープはピュアを追った。

村はとても静かで、祭の時のような喧騒がまるで嘘のように感じられた。

「皆どこに行ってしまったの……」

「多分、人間達から避難したんだと思う」

懐かしいはずなのに、そんな感情がとても浮かんでこない。多分、迎えにきてくれる人がいないからだろうか。

「逃げるってどこに」

「分からない……」

「そんな」

ピュアは座り込んだ。

約束が違うのではないか。自分さえおとなしくしていれば、村の皆には手をださないと言ったではないか。

「ピュア、多分大丈夫だ。皆人間から逃れてどこかで生きているはずだ」

「ほんと?」

「ああ。だからそんなに心配するな」

「うん……」

そう言ったが、ピュアは浮かない顔だった。

「ピュアはこれからどうするんだ」

ホープが、ピュアのほうを見ずに口を開いた。

「え……?どうするって」

ピュアはホープを見た。

「これからだ。ピュアがいなくなったとなれば人間達が追ってくるだろう。ピュアを殺そうとして」

「……………」

ピュアは俯いた。

忘れようとしていた。でも、無理だった。忘れられるはずもない。人間たちが追ってくる。そう考えただけで、あの夜を思い出すのだ。「私……」

怖くて目を背ける。強くなりたいたいのに。

「ホープ」

さんざ迷った揚句、ある結論をだした。

「私はこの世界にいてはならないと思うの。だから……殺してなぜカルゼに言うよりも声が震えた。」

「……」

ホープが無言でピュアを見る。

ピュアのホープを見つめる瞳が揺れた。

沈黙がとても怖かった。ホープの琥珀色の瞳が揺れる。手があがった。

(殴られる……！)

思わず目を瞑ったが、その手はピュアを包みこんだ。

「……？」

突然の事にピュアは戸惑った。

「ピュア……すまない。俺にもっと力があつたなら……お前を辛い目に合わす事などなかった」

「……ホープ」

ピュアもその温もりを包み返した。

「俺はピュアとずっと一緒にいたい。約束しただろ？」

ホープがピュアの顔を覗き込んで言った。

「だから……ピュアを殺せない。そんな事はできない」
見ると、ホープの瞳が濡れていた。

ピュアは、泣きだしそうになるのを堪えるように下を向いた。

「……どうして」

「……」

「どうして私は生きているの……」

「ピュア……」

ホープが強くピュアを抱きしめた。

「ごめん…ホープ」

ピュアはそう言って、涙を流した。

ホープの頬も濡れていた。

日がかなり暮れようとしていた。光が弱いため、日没も早かった。それでもまだ光があるだけでも奇跡に等しい。

「ホープこないよ。どうするの？」

セクトが心もち沈んだように言った。

「多分、何かあったのだと思うわ」

ティアもそう言ってから黙った。

しかし、時間が経つのは早い。

辺りは、すっかり日が落ちて暗くなるうとしていた。

リーヴァンが顔をあげた。

と、空気が動いてその中からホープが現れた。

「ホープ！」

セクトが抱きついた。

「遅かったから心配してたの〜」

「セクト、悪かった」

ホープがセクトの背を軽く叩く。

「その人…誰だ？」

ネオがホープの後ろにくっつくようにして、立っている獣人を見て聞いた。

セクトも、後ろをのぞきこむように首を動かした。

「あ！」

セクトが声をあげた。

「ピュア、いつまでそうしているんだ」

ピュアはそつと顔をあげた。

ホープと共に現れたのは白猫の獣人で、巫女のような服を着ていた。

（か…かわいい）

ピュアが戸惑ったように皆を見ている。目の回りが腫れているように見えた。

「ホープ、その子は？」

「ピュアと言って、白猫の獣人だ」

ホープは今まで、ピュアがどういう目にあってきたのかを話した。

ホープがピュアをずっと探していたと言う事も。

「ついて来ると言っていて聞かないんだ。すまないが一緒に連れていってもいいか」

「え…私に言われても」

「リーヴァン様、お願いします」

《…我には何も言えぬ》

リーヴァンは首を振った。

《しかし、我がついて行けるのはここまでだ》

「え？」

皆が思わず風翼神を見た。

《これより先は我が足を踏み入れるのはかなわぬ地。我が無理にで

もこの先に入れば、この体は魂ごと朽ちてしまう》

「……………」

皆は言葉を失った。

《すまない…役に立てなくて》

「…いいえ、リーヴァン様は私達をここまで導いてくださいました。ありがとうございます」

《…我はそなたたちを信じている。我らはいつまでも味方だからな》
そう言って、一人一人の顔を見回した。

そして、空へと翼を動かす。

《風がそなたらを何処までも導くように…》
そう言つと、高く翼を打ちおろした。

まるで、別れの挨拶を言うかのように頭上を何回か回ってから、飛んで行った。

(……………)

皆は白い鷹の飛跡を見ながら、誰ともなくため息をついた。

「ティアさん」

ホープが話しかけてきた。

「どうしたの？」

「あの、今から北へ行くのですか？私が言つのもなんですが、今行く
くと危険だと思います」

「そうね…確かにそうだけど」

「またここで寝るの〜？」

セクトが少し嫌そうに言ってきた。

「ここ寝るとき、寒いから嫌だよ〜」

今はまだまだが、夜になるとかなり冷えてくる。

「じゃあ、場所を移動しましょうか。せめてもののお詫びと言っ事
で…」

「この人数を？」

「大丈夫です。ピユアがいますから」

「え、あの子も移動能力があるの？」

「はい、ピユア…あれ、ピユア？」

「ねえ、ピユアはどこからきたの」

ネオが引つ切り無しにピユアに話しかけている。

「……」

ピユアは困ったように俯いていた。

「ネオ！」

ホープが叫んで、ネオを追い払う。

「まったく…」

「ホープ」

ピユアがぎゅっと、ホープにしがみつく。

「……」

ホープはじつとティアが見ているのに気がつき、慌ててピユアの手
を離した。

「いや、あのこれは」

「別にいいんだけど…そういうのは二人だけでやってほしいわ。ピユアも能力者って訳よね」

「はい。そうです。けれど、どこへ移動しますか」
「そうね…」

ティアは皆の顔を見た。

よくこれまで仲間が集まったと思う。

最初は二人だけだったのに。

「ティアさん？」

「でも、大丈夫？しんどくない？」

「そんな、遅れてきたのですし、何かしなければ」

「じゃあ、とりあえず寒くない所に移動を」

「分かりました」

ホープがそう言って一行は場所を移動した。

(ふう…)

セクトはため息をついた。

「セクト、どうしたんだ？緊張してるのか？」

「ネオにーちゃん」

昨日と同じ場所に、セクトたちは来ていた。

もう後戻りはできない。

ここまでくれば後は、最後まで行かなければならない。

「大丈夫か？帰るなら今のうちだぜ」

「かえらないよー大丈夫だよ」

ネオがにやりと、笑った。

「ふーん。そうか。へー」

「な、なんだよーネオにーちゃん！」

「別にー」

「じゃあ、その笑いかたはなに？」

「別になんでもない」

「ネオにーちゃん！」

だけど、ネオは笑うだけだった。

「では、行きましょう」

ホープが言った。

皆が地面に描かれた、大きな文字の円の中に立った。

ロディア・ヒイ ルドは滅びの影。何があるか分からない為、万全を期して円を引いた。

「我ら守の防人よ。魂の欠片が先にもあるならば、その身を汝の実とともに暁の眠りにおとせ」

ホープが術を唱えると、円が光り出した。

「風韻を轟きのなかに受け入れし、やまつぐのさとに老いうればやがてそれを契り請う」

文字の円盤が光を結んで、術が完成させたことを告げる。

そして、ティア達は次に意識が飛んだ時、未知の地へと足を踏み入れていた。

(ここが…滅びの地……)

「やっぱり、シアンはいなかった？」

「はい…無理でした」

「そう」

ティアが残念そうにそう言うのを見て、ホープは外を見遣った。

ティア達はすでに、ロディア・ヒィルドに足を踏み入れている。

「この吹雪じゃ、空を飛んでいくのは無理でしょう」

(シアン…)

私達は来た。とうとうこの地に。

「にーちゃん、いなかったの？」

セクトが残念そうにホープに訊いてくる。

「うん…この吹雪では気配さえ感じられなかった」

「そう…」

哀しそうにうな垂れた。

ティア達が一瞬で飛ばされたのは、この洞窟の中だった。外は吹雪

で、一步も動けない状態だった。

これからが大変になる。

今度こそ、人間達が必死になってくるだろう。

一応結界を張って寒さを防ごうとしたが、完全には寒さを遮断出来なかった。

「今、こうしていても仕方がありません。私が見張りをしていますから少し休まれては？」

「でも…それじゃあ」

「暖かくしたら眠れます。それにこれから先、眠れる時間と場所が無いと思います。だから今のうちに」

「分かった。代わるから後で私を起こして」

「分かりました」

エフイメ達はすでに眠っていた。

(ここまで人間達が追ってくるのかしら)
シアンを殺すために。
どこまで逃げたらいいのだろうか。シアンの顔を思い浮かべて、
テ
ィアはぎゅっと手を握った。
どうしてシアンは一人で行ったのだろうか。
セクトの寝息がすぐ側で聞こえて来た。
外の吹雪の音がうるさくて眠ることができなかった。

うとうとと眠っていたらしく、突然目を覚ました。どうやら自分の
本能が危険を伝え、それで起きたらしい。
ホープとピュアの姿がない。

「ネオ、セクト起きて」

セクトが目をこすりながら目を覚ました。ネオはもう起きていた。
吹雪はもう止んでいた。二人は外に出たのだろうか。

「セクト、あの二人を起こしてきて」

そう言うと、洞窟の中から外へと出た。

白い、雪の上には足跡が残っていないかった。あの二人の事だから飛
んで行ったのだろうか。

ティアはじつ、と気配をさぐるように耳をすました。

「ティア行くなよ。何か嫌な予感がする。危険だ」

ネオが止めにきた。

「でも何かあったに違いないわ。私様子を見てくる」

そして、ネオが止めるのも構わずにティアは空へと飛んでいった。

「…あぶねーのに」

「ねえ、オラクルの姿が見えないよ？」

セクトのそんな声に洞窟内を振り返る。

「本当だ。どこ行ったんだ？」

ネオが外へと出た時、何かの唸る声が聞こえて来た。

(何…?)

「ガアア！」

頭上から何かに襲われ、雪の上へ押し倒された。

(しまった…！)

「ガアアア…！」

背中に感じる恐怖を追い払うかのように、ネオは短剣を抜いた。

「ギャウウウ！」

短剣が何かに掠り、ネオの背中に乗っていたものが下りた。

「オラクル!?」

セクトのそんな声にネオが驚いたように、立ち上がりながら後ろを振り返る。

そこにいたのは両目の色が違う黒豹だった。

「オラクル…!?おい!どういう事だよ」

「ネオにーちゃん!」

オラクルが唸りながらじりじりと、距離を詰めてくる。

(マジかよ…！)

オラクルが雪を蹴った。

「オラクル！」

いったい、どうしたというのだろう。

何故だかひどく胸騒ぎがする。と、雪の上に何か見つけた。

白一色だからそれはすぐに分かった。ホープとピュアだ。

ティアはそこへと降りていった。

「ホープ、どうしたの」

「ティアさん。あの、シアンさんの気配が感じられたんです」

「あ、じゃあやっぱりさっきのは」

ティアが少し吃りながら答えた。

「そうです…でもさっぱりその気配が消えたんです。まるで、姿を隠しているみたいな」

「そうなの。どうしてかしら」

「ティア」

ピュアが呼んだ。

「たぶんシアンさんは…ついて来ないでって、言いたかったのだと思っわ」

「……………」

シアンは、それほどまでに私達を追い払いたいのだったっけ？何か、性に合わないような気がする。

「さ、戻りましようか。ティアさんがこうして探しに来てくれた事ですし…」

ピユアが頷きかけた時、突然声をあげた。

「ピユア？」

「風の民の村に行ってみたら？跡ぐらい残っていないの？」

「でもどこにあるの？」

「気配を辿る事が出来ればもしかしたら…」

ホープが代わりに答えた。

「多分、山中の方だと思っわ」

「分かった。ティアさん」

ティアはホープのその手を取った。

「セクト！どういふ事だこれ！！」

再び襲いかかって来たオラクルを、腕で庇いながらネオが叫ぶようにして言った。

「分かんないよ」

セクトが魔道を当てようと構えた態勢のまま答えた。

（くそっ…！）

「目覚ませオラクル！」

ネオが両手で、オラクルの顔を挟み込んで言った。

「ガアアアア！！」

オラクルが暴れ、ネオはその手を離れた。

「我がへさきに立つ嶺呂よ 汝の尾道を射させよ！」

呪文が聞こえ、オラクルがネオから離れた。

そのままふらふらとしていたが、ついに雪の上へ倒れた。

「オラクル！」
セクトが駆け寄る。

「ありがと…ホープ。こいつに何やったんだ？」
ホープに体を起こしてもらいながら、ネオがそう聞いた。

「脳を一時的に麻痺させる呪文を唱えたんです。獣などは私達に比べ、特に敏感ですから」

「……こいつ、一体何者なんだ」

「獣にその身を転身させる種族だと聞いた事があります。まさかこの目で見られるとは」

「オラクル！」

オラクルの姿が人間へと変わる。ティアが慌てて外套をかけた。

「…う」

「大丈夫か？」

「…私は」

そこでオラクルがはっとしたように身を起こした。

「あいつは…!？」

「あいつ？」

「いきなり現れて妖しい呪文みたいなのを唱えたら体が勝手に…
すまない」

皆が顔を見合わせた。

「気にするな。俺は何ともねえから」

「…でも」

「悪いのはあいつらだ。な？」

そこでオラクルはやっと頷いた。

「あ、ああ…」

しばらくしてからただわずかな指針を頼りにして、あてもない地に足跡をつけ始めた。雪がまた降り始め、歩を遅くさせた。生き物の気配一つしない、まるで死んだような地。

ロディア・ヒィルド…日がずっとあたらない場所だとも言われて

いる。

滅びの影。

常にこの地は死が付き纏うとも言われていた。

「あ……」

セクトが声をあげた。

目の前の谷間に、抱かれるようにして何か点々としたものがあつた。

「あれなんだろう……？」

近づいてみると、それがなんなのか分かつた。

「村だ……」

だが、その家のほとんどが燃え尽きたらしい事が、一目で分かつた。この村は略奪かなにかにあつたのだろうか。

「こんなところに村がある？」

セクトが不思議そうに見回す。

ここは。

「風の村……」

ティアが呟いた。ここがシアンの生まれた場所。いつか帰りたがつていた所……

「ひどいですね。何もこんなにもする事無いのに」

ホープが憎々しそうに言つた。

「ここ？ここがわたしの故郷？」

エフイメも不思議そうに見回す。

「昔……」

昔に滅びた村。

…… 風の民を滅ぼしたのは、欲に目がくらんだ野蛮な人間をけしかけた、アリバ・ハノクラだという事を。

あの男が言っていたことを思い出す。ティアはぎゅっと唇を噛んだ。あの優しい人がそんな事をする筈が無い。あんなに優しくそうに笑う人が、誰かを裏切るなんて考えられなかった。

（どこに行つたのシアン……）

「あ、あれ？」

エフィメが不思議そうな声をあげた。

「人がいるよ…？」

その声に、皆はエフィメが指さした方へと目を向けた。
そこにいたのは……

「シアン？」

そこにシアンがいた。

だけど、灰色の外套が無いせいだろうか。風の民の衣裳がシアンを別人に見せていた。

何と言うか、シアンがすごく幻想的に見えた。

（あの服って…あんなに目立つものだったんだ…）

ただ、その瞳をじつと一点に注がせている。白銀の自分と同じ血をエフィメを見ていた。

エフィメも遠く離れた所から見つめ返した。

「にーちゃん？どうしたの？」

セクトが話しかけても、シアンは喋ろうとしない。

「…にーちゃん？」

セクトが不安そうに、シアンに話しかける。

「…シアンさん」

ホープが言葉に詰まった。

会ったら、言いたい事がたくさんあった筈なのに。

会ったら、どうして勝手に一人で行ったのか怒ろうと思っていたのに。

どうしてだろう。

胸が詰まって何も言えなくなった。ただ、シアンの顔を見ただけで泣けてくるのはなんでなんだろう…？

「どうして、一人で先に行ってしまったの？にーちゃん」

セクトが必死に呼びかけるが、シアンは答えない。

「…にーちゃん？」

ふと、シアンと目があった。

それはほんの一瞬の事で、もしかしたら勘違いだったかもしれない。

だけど、その事だけでティアは切なくなつてすごく胸が痛んだ。
(どうして？私、シアンと目が合っただけなのに？)

「あ……」

見ると、シアンが雪の中に消えてしまった。

「にーちゃん？」

セクトが追いかけてようとす。が、ネオが止めた。

「ムダだぜ。セクト。あいつはもうどつか遠くにいったんだ」

「そんなくじゃあオイラ達どうすればいいの？」

「……俺達は俺達のできる事をやればいいさ。な？」

しかし、セクトの顔は晴れなかった。

「……うん」

それからほとんど休む事無く、吹雪の中を進んでいった。

空にはいつも灰色の雲があり、太陽なんて見えるはずがなかった。

しかし、誰一人としてシアンがいた事については何も言わなかった。
もしかしたら、あれは幻だったのかもしれない。シアンと会いたい
という望みが見せた、風の幻……

「まだつかないの？」

セクトが荒い息をしながら隣にいるネオに聞いた。

「多分もうすぐだろ。がんばれセクト」

「うん」

やがて、吹雪が止んだ。雪もちらほらと降るようになった。

「あれ見て……」

ピユアが前方を指差した。

そこはまるで、太陽の光など知らないような暗澹とした谷が広がっ
ていた。谷間になっているところに所々あるのは、鬱蒼とした暗く
て不気味な森だった。

「飛んでいけないかしら？」

ピユアがホープに訊いた。

「どうだろう。ためしてみよう」

ホープが指を組み、その場から移動しようとした。が、しかしすぐに戻ってきた。

「どうだったのホープ」

「駄目だった。ここの地自体に魔道がきかないみたいだ……」

「じゃあ、空を飛んでいったら？どうなるかな」

「オイラ、行ってくるよ」

セクトが飛んで行った。

「セクト、気をつけるよ」

「うん」

と、返事が聞こえてきた。しかしセクトも早くに戻ってきた。

「セクト、どうだった？」

「だめだよ。空の上の方、すごい風が強いよ。全然飛べない」

「…そうか。その風は止みそうだったか？」

「多分、あの風はずっと吹いてると思う。あの風が吹いているとこらへんの木、すごい倒されていたよ」

「じゃあ、やっぱり歩いていくしかないのね」

ホープとピュアは顔を見合わせた。

「皆ももう感じていると思うけど、あの森を越えた先に私達の求めているものがある。シアンさんがいるのかは分からないけれど、でも行かなければならないんだ。空も飛べないし、術も効かないけれど、この森を越えた先に行かなければならない」

ホープが皆に言った。

何故ホープが皆を先導しているかと言うと、一番その探しているものを強く感じられるのは、ホープだからだった。

「じゃあ、行こう」

そこは今まで来た道とかなり違って、暗くて地面がじめじめしていた。

まったく生き物の気配がしなかった。木も枯れ果てて、根元から折れたりしているのもあった。

「薄気味悪いな……」

「でも、この木も全部昔は生えていたって事でしょ？なんで今は枯れたのかしら」

「昔はここももつと緑があったのかもきれいな」

地面はぬかるんでいて、気をつけないと転んでしまいそうだった。

「もう、あの時から人間達襲って来なくなったわよね……」

「多分、終点で待ってるんだろう。わざわざ探すよりもそっちの方が早いだろ」

「待ち伏せされてるって事？」

「……ああ」

後ろから誰かの悲鳴が聞こえた。どうやら転んだらしい。

「いつたい〜」

どうやらエフイメが、そのせいで押し倒されたらしかった。

「大丈夫？エフイメ」

ティアがエフイメに駆け寄った。

「いたた。なんだよこれ……」

どうやら押し倒したのはネオのようである。ネオは自分の足元にくっついていてるものを見て、声を無くした。

「……… x !?」

訳の分からない事を叫び、ネオは気を失った。

「ネオにーちゃん？」

セクトがネオを揺さぶる。

「どうしたんだ？」

「ホープこれ見て！」

エフイメが指さした先を見ると

「……！人間の手？」

さすがにホープも後ずさる。その手はネオの足首を掴んでいた。

「ネオっ」

しかし、その手はがっちりとネオの足を掴んで、離そうとはしなかった。

「ホープ！」
ピュアが叫んだ。見ると、あちこち地面の中から人間の手が突き出ていた。

「な…なにこれ？」

ホープはネオの足についている手を剣で斬った。

「走れ！止まると手に捕らわれることになるぞ！」

皆走つてとにかく、この手から抜け出そうとする。伸びてきた手を炎で焼いたり、剣で斬ったりしたが、後から後から手は追って来た。「ネオ、しつかりしろ！」

ホープはネオを背負って後から走り出した。しかし、ネオの体に手がまとわりついてきて、ネオの足を掴んだ。

「…ネオ！」

ネオが無数の手に捕らわれる。

ホープが剣で手を斬ろうとするが、無数にも思えるその人間の手は冷たく、ネオを離さなかった。

「…過流の紅き軀に死を！」

短い呪文を唱えると、炎があたりを焦がした。ネオを掴んでいた手がネオの体を離れた。が、しかしまた別の手に捕らわれた。

（くそ）

「ネオおきろっ」

ホープがさらに増えてきた手を斬りながら、叫んだ。しかし、ネオは意識を取り戻さない。

「ネオ…ネオ！」

無数の手がネオを、土の中へと連れて行くこうとする。

「ホープ！」

ティアが矢に炎をつけ、放ってきた。わずかに手が怯んだ。

（今だ）

ネオの手を掴み、思いつきり引つ張りあげた。

ネオが目を覚ました。

「気がついたかネオ」

「……あんまり起きたくなかった」

「そんな事言ってる場合じゃないだろう」

ホープがまた手を薙ぎ払った。そして駆け出す。

(何なんだ？この森はいつたい何がいるというんだ…?)

ネオをちらつと振り返るが、遅れないようについてくるので精一杯のようだった。

「はあはあ……」

ネオは息が上がってきたようだ。

「ホープ、この森からまだ抜けられないのかよ？」

「まだだ」

ホープも息を荒くしながら答えた。

「まだ……ずっと先だ……」

絶叫が薄気味悪い森中に響いた。地響きが聞こえてくる。

「……？こんどはなんだ」

ティアが後ろを振り返って見た。

「な……なにか地面から出てくるわよ？」

見ると、地面が大きく盛り上がっていた。

「げ……まさかボスのお出ましとかじゃないよな？」

「冗談でもない事を言うな」

すると土がさらに大きく盛り上がり、大きな人のような顔が奇妙な唸り声と共に地上に現れ出た。

「げ……やっぱり……」

「とにかく走れ！あの手に捕まったら終わりだ」

ホープが叫んだ。

巨大な顔は目や口などの穴は暗く落ち窪み、それが動く度に大きな地響きが起こった。

「どうしてこんな事になったんだ？」

その時ティアが叫んだ。

「あっ……！」

ホープが見ると、ティアが手に捕まれていた。

「ティアさん!!」

ホープが大きな口を開けた顔に、片手を向けた。

「泉逝しものよ今ここにその裁きを下さんことを…!」

ごうつと炎が燃える音がして、大きな顔が怯んだ。しかし、手はティアを離そうとしない。

「ティアさん!」

ティアが何とか腕から逃れ出ようとするが、その後からさらに腕が伸びてくる。

「…!」

ティアを飲み込もうと、大きな顔がティアに近づいていく。

「うっ…!」

ホープも足を掴まれ、前のりに倒れた。ティアが大きな口に飲み込まれて行く。

「ティア!」

ネオが近づこうとするが、無数の手が邪魔して行けない。ホープを助けようとしたが、これも困難だった。

(くそ…俺に魔術があれば!)

今初めて強くそう、思った。

そうしたら、あの二人を助けられるのに…!

ホープが叫んだ。

何か呪文みたいな言葉と共に、辺りが爆発したみたいな音に包まれた。

「大丈夫? エフィメ」

「うん…何かすごい爆発だったね。それであの手がなくなったけど

…誰のかな?」

「ホープよ…」

ピュアは呟くように言った。

「ピュア、どうしてわかるの」

「力がね」

ピュアは、今来た道を見据えながら言った。

「やっぱり戻ったほうがいいかな…?」

「大丈夫だよ、みんな来るよきつと」

セクトがそう言った。

ピュアはちらりとオラクルを見た。

実はいつ、オラクルがこの旅を止める。と言い出すのか心配だったのだが、今の所大丈夫みたいだ。帰れる保証など無いが。

「あつ、ホープ」

セクトが駆けていく。

「大丈夫だった?」

「うん。何とか…」

ホープがセクトの頭を撫でてやった。

「セクトは大丈夫だったか」

「…うん。オイラ泣かなかったよ」

ホープは微笑った。

「ホープ」

ピュアが何か言いたそうに、ホープの所に来た。

「あれは何だったの?」

「あれは多分…この地の守りか何かを守護するものだと思う」

「え?」

セクトも驚いたようにホープを見た。

「どういうことなの?」

「多分あれは亡霊の類か何かだと思う。もしかしたら、この先にあるものを守っているのかもしれない」

「シアンの…記憶?」

そう言ってきたのはティアだった。

「記憶を守っているというの?この森が」

「ええ…それに近づいてるとい証拠です」

「……」

ティアはあの恐ろしいものが記憶を守っているのだと思うと、シア

ンの記憶は一体どれ程のものだというのか、という気持ちになった。そして、見てみたいとも。

と、その時地響きが聞こえてきた。

「うわ…ありがち」

ネオが嫌そうに呟いた。

「え、なんの音なの？」

奇妙な呻き声と共に、地面からあの木乃伊が顔を出した。無数の手を伸ばしてくる。

「走れ！」

ホープがそう言う前に、皆は走り出していた。

「はあ…ぜえ」

地面に手をつき、皆はしばらく荒い呼吸を繰り返していた。

「やっと森を抜けたの？」

エフイメが立ち上がった。

その中でオラクルだけが、平気そうに立っていた。

「……………」

目の前の物を、オラクルが見上げたり、覗き込むようにしている。

一度皆の方を振り返った。

「…これは」

ホープも呼吸を整えて、オラクルが立っているところに来た。

「多分…ここを通っていくんだ…」

ホープはまた嫌そうな顔になった。

「……………」

目の前には、大きな門があった。それまた異様に大きく、全くと言っていい程、この辺りの景色に馴染んでいなかった。

「…門？」

ティアは目の前の大きな門を見て、眉をしかめた。

皆が立ち上がり、手についた泥を払い落とす。

「…ここを通らなければならぬだろうな」

「飛んでは行けない？」

「…おそらく」

「やっぱりこの門から行くしかないのね…」

門は大きすぎるほどであって、近づけば近づくほど不気味だった。扉前に立つと、扉上が見えない程だった。

扉には、何か不可思議な模様が刻まれていた。人間のようでもあるし、獣のようにも見えた。

所々錆びていて、それでいてここは風さえも通らないような、静けさだった。

「ここはやけに静かね」

「どうやって開くんだろう」

「押してみるのかな」

エフイメが門を押そうとするが、びくともしない。

逆に扉の飾りを掴んで引こうとしたが、扉は動かなかった。

「こんなもの壊してしまえばいいんだ」
え？

皆が呆気にとられている間に、オラクルが扉に向かって術を放った。

しかし、門は何とも無い。

「……………」

「…！」

それができないと分かると、叩いてみた。

それから蹴る。

「オラクルって…あんな奴だった？」

ネオがぼそつと言った。

「なんか違うわよね？」

「お姉ちゃん何だか怖い」

しかし三人はオラクルの視線を感じ、それぞれ違う方を向いた。

「ねえ、この門って晴柳の十重じゃない？」

ピユアがホープに言った。

「やはりそうか」

「確か、開ける為の唱文がいるんじゃないかなかったかしら？」

「それを今考えているんだが……」

ホープはちらりとエフィメを見た。

…門は風が通る時にその錆びれた鉄を動かすだろう…

風とはエフィメの事で、エフィメがいればてつきり開くものだと思っていたのだが、扉はびくともしなかった。

だからと言って、風が吹いている訳でもない。

やはり混血児じゃ駄目なのか？

半分、人間の血が入っているとはいえ、風の末裔なのには変わりない。

その時、何か大勢の生き物が動く気配を感じた。

「下から！？地面の中だ」

「またかよ」

ネオがうんざりといった感じで呟いた。

「もう鬼ごっこはたくさんだぜ……」

地面が揺れ、固い土があつさりとして砂のように崩れ落ちた中から出てきたのは、数数え切れないほどの虫だった。

「なんだ？今度はいったい何の真似なんだ？」

地面の下から現れた虫は、大きさは普通の虫の何倍もあった。

小さいものでも子供の背たけを越え、百足のようにそろそろ歩き回ったり、跳ねたり蠢きだしたりした。

「き、気持ち悪いよ……」

セクトが吐きそうな顔をしながら呟いた。

ホープが剣をいつでも抜けるように構える。

「ピュア、俺から離れるなよ」

「うん……」

ピュアは恐怖に震えていた。

四方を囲まれ、ホープは近づいてきた虫を斬ろうとする。が、剣が体を貫通しない。皮膚に弾き飛ばされた。

(……………！)

「何だよ〜ここは生き物禁止じゃないのかよ」
ネオが半ば呆れながら言った。

ティアが矢を放つ。しかし矢が弾き飛ばされ、地面に刺さって炎が消えた。

「刺さらない…」

オラクルは表情一つ変えず、それらを見やった。蠢く足。思わず鳥肌が立ってしまったような足音は止まらない。

（門は風が通る時にその錆びれた鉄を動かすだろう）
「……！」

オラクルはその見事な跳躍力で、虫の頭上に乗った。

蠍のような虫が何か頭の上に乗っている事に気がつき、尾を振って追い払おうとした。

「オラクル！」

オラクルを見たティアが叫んだ。しかし、オラクルの姿はすでに見えなくなっていた。

「ひえ〜よくあんなんに乗れるぜ…」

ティアがエフィメを抱えた。セクトも必死に着いて来る。

「私達も行くわよ。ネオ」

「ええ〜俺は酔ったら吐くので…」

「なに訳分らない事言ってるの。さ、行くわよ」

ティアはオラクルのようには無理だったから、小さい虫に乗った。

ネオは無理矢理一緒に乗らされた。

「これ…どうやって動かすのかしら？」

「う…ひどく悪夢にうなされているようだ…」

虫が上に乗っているものを追い払おうと、体を振った。

「きゃあ…！ちよつとそんなに揺れないでよ」

「俺はもう駄目だ。シアン、最後に会いたかったぜ…」

「何シアンに会う前からそんな弱気な事言ってるのよ」

「ねえ、あれティア達じゃない？」

ピュアが虫に乗っている、赤い髪のエルフを見つけた。ネオやセク

トの姿も見えた。

「…あれ。なんであんなところに」

ホープも振り返った。

「危ないわ…あんなところにいて」

ホープは門のほうに目をやった。オラクルが門を指して、虫の上を飛んで伝っていく。

(…………?)

それからはつとしたように、ホープは虫の目に剣を刺した。

「そうか分かった。風はあのことだったんだ」

「え？」

ピュアを抱きかかえ、ホープも虫の体の上に乗った。

そして虫を伝って門のほうに近づいて行く。それについて虫たちも移動して来た。

「思ったとおりだ」

ピュアがホープにしがみつきながら訊いてくる。

「どういうことなのホープ？」

「そのうち分かるさ」

オラクルが門の前にたどり着いた。

そして、乗っている虫の背中を思っいきり足で叩いた。

「飛べ。その羽は飾りか？」

虫は訳が分からず、おたおたしている。

「飛べといったら飛ぶんだ」

虫は何かを感じ取ったのか、びくつとしたように羽を出し、飛び立つ準備をする。

と、いきなり蠍や百足…つまり羽がないものがその今まさに飛ばうとしていた虫に襲いかかった。

「ひえ〜共食い？」

空を飛べないものが、羽のあるものから羽を食いちぎるごと、地響きを起てながら纏れ合う。

だからなのか、ここには蝶や蛾などの姿はなかった。

「…それにしてもここはまさに地獄だ」
ネオが半ば泣き出しそんな声で言った。

「何弱気になってるのよ。それともネオ、虫が恐いの？」
ネオがその台詞を聞くと、びくつとしたように固まった。

「……………」

べきつと嫌な音がして、羽虫の羽が折れた。

すると、わつと他の虫たちがそれを取らんとその羽に襲いかかる。

羽は引き裂かれ、見るも無残なものになった。

と、門がその虫たちの重みで中側へ開いた。

「あ…！」

ピュアがはつとしたように叫んだ。

「風はあの羽のことを指していたんだ。虫たちが出てきたのも多分、
エフイメに反応したんだ」

虫たちは纏れ合いながら、枯木立ちの中へと消えていった。

「あれって…生きてるの？」

ピュアが尋ねた。

「そうみたいだ。でも、この地には住んではいないだろう」

「どうして？」

「体が大き過ぎる」

ホープがピュアを降ろして門前に来た時、鉄が錆びたような音を起
てながら、門が扉を閉じようとした。

「もう閉まってしまふ。急いでここを通らないと」

そこはまるで、何かを守るように氷壁に囲まれていた。

「本当にここなのか？」

魔力を持たないネオは、誰にもなく訊いた。

「…おそらく」

ホープもそれを見上げた。

「この中にシアンの…」

風の記憶が。そして、この世界の運命が。

「ううゝ寒い…」

この場所だけ今までと比べ、異様に寒かった。

「羽が凍って動かないよ」

セクトが羽を動かそうとするが、羽は僅かに動くだけだった。

「凍え死にそう……」

両腕をさすりながらエフィメは、辺りを見回した。

「……」

オラクルは無言で、辺りを睨み付けている。

ホープとピュアは寒い所は苦手なのだろうか。かなり固まっている。

「大丈夫？」

ティアがホープ達に声をかけた。

「…何とか」

普通のものならこの寒さで死んでいてもおかしくはない。ホープと

ピュアは青い顔をしながらも頷いた。

「もうすぐだから」

ティアが、その氷壁にそつと手を触れた。

「でも、これってどこに入り口があるのかしら？」

その時ホープが叫んだ。

「ティアさん危ない！」

ホープがティアを押しした。

「……！」

その突然の攻撃が、まともにホープにあたった。

「ホープ！」

ティアが駆け寄ろうとしたが、次の攻撃によって阻まれた。

「やい、出て来い！ 闇討ちなんて卑怯だぞ」

ネオが叫んだ。

しかし、何の返事も無い。

「ホープ大丈夫！？」

セクトがホープに近付こうとした時、突然声が聞こえた。

「弱い奴ほどよく吼えるとは考えたものだな」

「なにを〜」

ネオが構える。

氷壁の影から出てきたのは、片目に傷がある魔動師だった。

「……あ！」

ティアが声をあげた。ティアが空中で傷をつけた動師だった。

「そつだ。エルフ族め……お前の一族に思い知らせてやったぞ」

「……！！！」

「ティアさん！」

ホープの声に、ティアは何とか押し止まる。

「さあ……ここでおとなしく死んでもらおうか」

動師が魔術を放ってきた。

「くっ……！ 万動なる標よ灯燈を止め……」

ホープの呪文が途中で途切れた。

相手の攻撃が後ろの壁に当たり、雪が飛んでくる。

「どうしたのホープ？」

そう言ってる間に、次の攻撃がくる。

（もう一度……！）

試しに術を発動させるが、不発だった。魔力は構成されるのに、体の外に出る前に消滅する。

「なぜ……」

ホープは諦め、剣で斬りかかろうとしたが、なかなか敵に近づけない。

ティアも弓矢で応戦するが、跳ね返されて一向に当たらなかった。

動師が何かトテア語で呪を紡ぐと、雷光が地面を打ち、地面がひび割れた。

「うわぁ！」

「キヤー！！！」

雷光の激しさに目をつむる。

「くそっ！」

ネオが唾を飲み下した。

「ネオ」

ティアが叫んだ。

「なんだ？」

「ネオだったらこういう時どうしてた？」

「え？」

ネオは聞かれた意味が分からず、思わず訊き返していた。

「だからこういう時よ」

「知らねーよ。こういう時なんて初めてなんだからな」

「……………」

皆こんな狭い所では、術を避けるので精一杯だった。そのうち皆の顔にも疲労が浮かんできた。

（どうしよう…このままじゃ）

やられる。

（でも、どうして人間が術を使えて、私達には使えないの？）

人間だから？

違う。そういう事ではない。

もっと、何かある筈だ。もっと別の何か…

「すぐには殺さない…我らが受けた苦しみに比べればこんなもの…」

「え…？」

「何を言ってるんだ？苦しんでいるのは俺達のほうだろう」

ホープが叫んだ。

「お前達は本当に何も知らないんだな。お前達の種族は我々人間を異端扱いし、廃絶させようとしたのだ！」

（え…：どういふ事？それは私達の方ではないの？）

「嘘だ！」

さらに攻撃が加わる。

「どういふ事なんだ一体？答える」

「…我ら信ずる神とお前らの信じる神は違う。お前らはそれだけの理由で我らを排除しようとした。我らは怒りに燃え、復讐の時をずっと待っていた。それこそ狂わんばかりの月日を…今、こうしてやっと異種族に復讐を果たす事ができる」

「……」

異種族。

初めは人間達のほうが異種族と言われていた。

この異端の姿ではなく。もっと今、変わろうとしている世界の人間達が。

「…ふざけるな」

ホープが動師に斬りかかった。

「俺達はそれよりもひどい事を受けてきた。種族を滅ぼされ、家族を殺され、故郷さえ失った…：それなのに行く所がない。一步外に出れば途端に人間達に捕まって殺されてしまう」

「それは全部、お前達がやってきた事だ！」

動師が結界を張り、ホープが弾き飛ばされた。

「ホープ！」

「ピュア来るな！」

「全部お前達がやってきた事だろう？人間を見るとまるで化け物のような目をする。それなのに自分達はどつなのだ？お前達のほうがよっぽど化け物ではないか…！」

「………ホープ」

ホープは剣を支えにして立った。

「…それでも」

ホープは剣を動師に向けた。

「お前達のやって来た事は間違えている」

「何を!？」

動師の動きが止まった。

「神はあんな姿になつてもお前達人間との共存を望んでいる。この星を愛しているんだ!」

術が放たれホープが避けようとしたが、それよりも早く次の術が放たれた。

ホープは剣でその攻撃を薙ぎ払った。

「…ふん!ここで死ぬる事を幸運だと思いが良いわ…!」

男がまた呪文を唱えると、動師が両手を上げた所に光が集まって来た。

「……!」

「あの世で一生彷徨うがいい」

ドオツと音が聞こえ、光に目を焼かれた。

あれ?

ここはどこだろう。

さっき、あの動師が放った光によって私達死んだのだろうか…あ、

あそこに光が見える。

私、本当に死んじゃったんだ。

これから、人間達が信じてるあの世と言う所に行くのね。

ふらふらとまるで、自分の体じゃないみたいなもの。

結局最後までシアンに会えなかった。

シアン。

本当はなんて名前なんだろう。記憶が戻ったら訊こうと思ってたのに…

「ねえ、おじいちゃん。これ…」

突然、声が聞こえた。

子供の声…？と、いきなり風景が変わった。

「なんだ…またこんなもん作ってたのか。もういいと言っただろう」「老人と子供…？

でも、見て。髪が、

白銀の色。

子供がしゅんとしたように、老人の前から立ち去る。

あの子供…シアンに似てる。

シアンを小さくしたらあんなのかな？

と、また辺りの景色が変わった。

「お義父さん。なんであの子に冷たくあたるんですか」

「ふん。甘えかすところくな大人にならんわ」

「お義父さん」

「まあシゼラ。お父さんはいつもこんな感じなのよ」

「だけど…」

「いいの…お父さんもいつか分かってくれるでしょう」

あのシアンに似た子供が現れた。

「おじいちゃん…ぼくのこときらいなのかな」

一人で木の切り株に座っていた。

やっぱりシアンに似てる。もしかしてこれは…

「もうあれ、作らないほうがいいのかな」

「どうしたの？おじいちゃんに何を作ったの？」

「お母さん。おじいちゃんにね、おもいをこめた木のちようこくをあげたんだ。でもおじいちゃん…いらないって」

「おもい？」

「うん…お父さんがその人の幸せをねがいがらものを作ったらおもいがこもる。幸せをねがうことはうれしいことじゃないかって。

だからぼく…」

「そう。じゃあ、お母さんがおじいちゃんに渡してきてあげるわ」

「ほんと？」

「ええ」

突然、真つ暗になった。

え？

声が… なに…なんて？

よく聞こえない。

(…ればよかった)

え…

(僕なんか生まれなければよかった…！)

その時、目が覚めた。

(あれ…私死んだんじゃないの？)

辺りを見回した。

そこは氷壁がある所だった。

あの動師がいない。

ティアは立ち上がると、皆が倒れている事に気がついた。

さっきのは一体何だったんだろうか。

「セクト、起きて」

しかし、いくら揺すってもセクトは目を覚まさない。

「ネオ？」

息をしていないのかと思ったら、息はしていた。でも、何故起きないのだろう。

「ホープどうしたの？」

頬を叩いてみたがしかし、起きない。

ホープの頬が赤くなる程強めに叩いてみたが、一向に起きない。

(これってもしかしてさっきの動師が放った術のせい…？でもなんで私だけ起きたのかしら？)

皆も一応起こしてみたが、起きなかった。

このままじゃ、凍え死んでしまう。

(どうしたらいいの？)

これがあの男の力？

「どうして目を覚まさないの？」

ティアは不安に駆られてこれは、さっきの夢の続きかと思った。けれど、待っても夢は覚めない。

(私だけ？私だけ助かったの…？)

そんなの…

どうして？

けれど、いくら待っても誰も起き出さない。

そのうち、体が冷たくなっていく。

「皆…」

ティアは立ち上がった。

「待つてて。今、術を解きに行くから」

氷壁をぐるりと回ると、小さな入り口があった。どうやら人間達が入り込んだらしい。

でも、どうやって入ったのだろうか？

そんな簡単に開くのなら、ティア達を持っている筈は無い。

中は暗く冷たかった。でも、外よりかはまだ中のほうが暖かい。

中は狭い洞窟みたいになっていて、他には何も無かった。

ティアは雪を掻き分け、色が一部違う床石を見つけた。それを押してみると、地下へと続く階段が現れる。

ティアは真つ暗なその階段に向かって、足を踏み出した。

(皆死なないで…)

どのくらい時間が経ったのか分からない程、ティアは一人暗闇を歩いていた。

明かりなどなく自分の今まで鍛えた神経だけが、唯一安心できるものだった。

術が発動しないなんて…だから滅びの影、日のあたらない地なのか。ティアは自分が今、どうなっているのか分からなかった。ただ、暗闇を彷徨うようにして歩いて行くだけだった。

階段が終わったらしい。

突然、段差が無くなって転びそうになった。

ティアは壁を探った。そして、壁を見つけると耳をすました。

…聞こえた。

というより感じた、のほうに近いかもしれない。

人間達の気配。

ティアは壁に手をつけながら歩き出した。

と、突然壁がなくなった。ティアはバランスを崩し、思わずよろめいた。

壁が無くなったのではない。曲がり角になったただけだ。ティアは重たい足を叱咤し、再び歩き出した。

長い廊下を終えると、やがて光が見えて来た。

(明かり?)

ティアはその明かりに向かって歩き出す。

そして、思わず目を細めた。

そこには広い空間があり、その中心には、光の柱が何本か立っていた。

高い天井から滴り落ちてくる水が蓄積され、氷の柱となった物が光を放っていた。ただでさえ、暗闇に目が慣れていたティアにとって、その光はとても眩しく見えた。

しばらくその氷を見ていた。と、氷に守られるようにして、柱の中心に何か見つけた。

ティアがその柱へ近付こうとした時、足が縛れた。

(あ…)

転ぶと思ったが、体が言う事を聞かない。

だが、その体が倒れる前に誰かに肩を支えられた。

(だれ…?)

そのまま抱きしめられた。痛いほど強く。

ティアに抗う力などもう残っていなかった。しかし、その抱擁は不思議と安堵できるものだった。

「……ティアさん」

それが最後に聞いた言葉だった。

次に目が覚めると、ティアはあの狭い洞窟みたいな所にいた。

(……)

ティアが目を覚ますと、頭がぼうつとなった。今までの事は夢だったのだろうか？

膝に何か重みがあった。エフイメだ。最初、シアンかと思って動揺した。

「ん……」

エフイメが目を覚ました。

「エ……エフイメ」

「あれ……おねーちゃん？」

思わず声が上がってしまった。

しかし、寝ぼけているエフイメには気がつかれなかったらしい。

「わたし……？」

それからはつとしたように、辺りを見回す。

「みんな！」

見ると、皆がその洞窟の中にいた。エフイメが起こすと、皆目を覚ました。

今までののは本当に夢だったのだろうか？ティアは思わずにはいられなかった。

「これからどうしますか」

ホープがそう訊いてきた。

「この雪の下に、地下へ下りる入り口があったはずなんだけど」

「ないよ……？」

セクトが雪で赤くなった指に、息を吹き掛けながらそう言った。

「……」

「ティアさん、夢じゃないんですか」

夢……本当に？ ティアは首を傾げた。

「でも、ここに何かある」
オラクルがそう言った。

皆は黙り込む。確かにここの下から何か感じるのだ。
「でも、見たところ何もありません。階段らしきものも色違いの石
さえも」

ティアは今度は自分で、夢と同じ場所を探してみた。

「そこもうないよ」

ティアはそれでも雪をかき分ける。

しかし、なかった。あるはずのものが。

「ない…」

「だから言つたじゃない」

「でも…なんでここに倒れてたんだらう」

ピュアが呟いた。

確かに外で倒れていたのになぜ、ここにいるのだらうか。

「それにしても人間達はいったいどこへ？」

ティアは、夢で見たシアンそっくりの、あの子供の事が引つ掛かっ
ていた。皆にあの子供の事を言つた方がいいのだらうか。

しかし、なぜか言つるのは躊躇われた。

「とりあえずは…」

その時、ティアの脳裏にある考えが閃いた。

“光”だ。

ティアは雪をできるだけかき集め、一塊にした。

「ティアさん？」

ホープが驚いたように、ティアに声を掛けてくる。

その集めた雪を透明になるくらいに温めた。その氷を雪の上に置く
と、腰の布から光鉱石を取り出し、その石を割り氷の上にかざした。
すると一瞬だけ光が輝き、床石が光に反応し、石の色が変色した。

「…なるほど！光に反応する石ですか。ここならですね」

ホープが感心したように呟く。

石を動かすと、地下への階段が現れた。中は夢と同じ、真っ暗だっ

た。

「私が先に行くわ。皆は後から着いて来て」

そう言うと、ティアは階段を下りようとした。

「待ってください。ティアさん」

しかし、ホープが止めた。

「ここで何か食べませんか」

ティアは危うく階段から滑り落ちる所だった。

「…もう！こんな時に何言ってるのよ？」

「でも、お腹が空いてたら戦えないでしょう」
確かにそうだ。

そう考え、ティアは上に戻った。

携帯食を食べてから、しばしの休息を取った。

「携帯食なんて久しぶり…おいしい」

「この地では何かあるか分かりませんから」

ティアは立ち上がった。

「ホープ、蠟燭とか持って無い？」

「あ…蠟燭は2本だけ」

2本。持つだろうか。

ホープは火打ち石も貸してくれた。

「それじゃあ、準備はいい？」

ティアが蠟燭に火をつけて振り返ると、皆が頷いた。
そして階段へと足を踏み出した。

ずっと階段を下りていくと、やがて地下に着いた。

(夢と同じだ)

その廊下をしばらく進み、曲がり角にきた。

そして痛む足を引きずるようにして進むと、そこに光が見えてきた。

「ひかり…?」

エフイメが呟いた。

そして、走り出していく。

「エフイメ!」

ティアが追いかけてようとしたが、エフイメは先に行ってしまった。

と、エフイメの感嘆の音が聞こえて来た。

ティア達も後から、光のある部屋に着いた。

やっぱり同じ…夢と。

ここで誰かに抱きしめられた。

あれはやっぱり…

その時ホープが声をあげた。

「すごい…天然の氷光鉱だ。初めて見た」

「氷光鉱?」

「ええ…この氷は普通の氷と違って光を何年も溜めておくんです。

それに、その光は太陽の光では溜まらないんです。太陽の光だと解けてしまう筈だから、どこかに光源がある筈です」

ホープが氷の下を覗き込んだり、裏から覗き込んだりした。

「それに触るな」

突然声が辺りに響き、皆ははっとしたように、声のした方へと顔を向けた。

「その場から離れる」

いつの間に現れたのか、魔動師がいた。

それも何十人と。

「お前達はここで死ぬ運命だ。わざわざこんな所まで来なくていいものを」

「……」

「無駄な抵抗は止めるんだ。どうせ死ぬのだからな」

「死ぬ前に一つ聞きたい。これがお前達の封印したものが」

ホープが口を開いた。

「……そうだ」

「じゃあ、これが世界の掛け金なんだな。これを潰せばどうなる？」

「……お前、何が言いたい」

「いや、ただ訊いてるだけさ。どのみち俺達は死ぬんだからな」

「まあいい。教えてやろう。その封印は、風の民以外の者は解く

事もできない代物だ。どんな高等な術使いでさえも扱えない」

「じゃあ、なぜそんな封印を作った」

「我らは知らない。すべてあのお方がお決めになった事だからな」

「あのお方？」

動師が腕を構えた。ホープが咄嗟に構える。

動師は呪を紡ぎ、発動させた。

「エフイメ!?」

途端、エフイメが走り出していた。

エフイメが氷の柱に触れようとした瞬間

「それに触るな!」

声が聞こえた。動師達が思わず声のした方へ目を向ける。

「シアン……?」

「……シアンさんが怒鳴った」

ホープが啞然としたように呟く。というより驚いているらしい。

シアンが呪を紡ぐ。

「古希紋よ。その身に浮かばせるならば我が身にその憎き爪の血痕を遺せ……」

シアンの声が響く。

「ブラッド・シーダー!」

洞内に爆発音が響くと同時に、紅い雨が動師達に降り注いだ。

「うわあああ…！」

紅い雨が結界を破り、動師達が悲鳴をあげた。

シアンはそのうちに、エフイメの所に下りてきた。その体を抱き上げると、また上がった。

「シアンさん！」

ホープがエフイメを受け取る。

「シアンさん、待つてください。私達にも術が使えますか？」

「無理です。ここでは…あなたたちの術は封じられてしまいます」
最後まで待たず、シアンは人間達に向かって行った。

「さ、ティアさん…」

しかし、ティアは動かなかった。

「ティアさん？」

ティアはシアンを見たまま動かない。

「おねえちゃん？」

エフイメもティアに話しかける。

「私ここにいるわ」

「ティアさん？」

「おねえちゃん？」

しかし、ティアは向こうを向いたままこつちを見ようともしない。

「でもティアさん。このままじゃ危険ですよ」

「私は逃げたくないの」

ホープは思わず、ティアの掴んだ腕に力を込めた。

「なに言ってるんですか。あなたがここにいると足手まといなんですよ」

ティアがはつとしたようにホープを見た。

「本当は私だって…さあ早く！」

ティアはつられるように走り出した。

(シアン…)

「風の民…ここがお前の墓場にはちょうどいい」

人間達が倒れた中でただ一人、立ち上がった者がいた。

シアンの呼吸が乱れている。

「ちょうど」

動師が腕を構え、術を放つ。

「ネタ切れみたいだしな…！」

しかし、その術はシアンにはあたらず、周囲の壁を崩しただけだ。

「どこだ？」

「ここです」

シアンは上空からまた術を放った。

「…！」

しかし、今回は阻まれた。

「やっぱり術封じは続けて使えないようだな…」

動師が、天上へ向かって術を放ってきた。シアンはそれが自分にあたるぎりぎりの所で避けた。

「この死にぞこないめ！」

動師が蛇の形をしたいくつかの術を放ってきた。しかし、蛇がシアンを捕らえられず、天井に当たった。

天井が崩れ落ちてくる。

「……！」

動師が術を組みなおそうとするが、間に合わず雪石の下敷きになった。

シアンは降り立った。

そして、氷の柱に近づく。

皆さんごめんなさい…

シアンはそれに手を触れようとした。

「ほう、自分の身を呈してまでこの世界を救うのか」

シアンはそれに驚きもせず、前を向いたまま言った。

「あなたはこの事を分かっているながらこういう事をしたんでしょっ」

「いい事ではないか。身を滅ぼしてまで本当の記憶を手に入れる」

シアンはその声のした方へと、振り返った。

「あなたは僕を止めなくていいのですか」

静かに、静か過ぎるほどの声でそう問いた。

「なぜ？私にはこの世界がどうなるかと構いやしない」

その人間 黄紫色の瞳をした男は、唇を酷薄に歪めた。

「いや…お前達、異種族がこの世界を救った事でこれから先、どうなっていくのかに興味があるかな」

「……………」

「少しは異種族に対する見方が変わってくるかもしれないな。しかし」

男は柱をじつと見つめた。

「大抵の人間達は異種族を知らないし、愚かにも自らの星が滅びに向かっている事さえ知らない。お前達がやっている事はすべて無意味なのだ」

「……………」

シアンはその氷の柱を見た。

氷の柱が光を放つ。寂しく、誰にも見られる事の無かった天然の光が。

「それでも」

シアンは独り言のように言葉を放った。

「明日を夢見て…今を生きている人たちの為に、この世界が存続するなら」

シアンは顔を上げる。

「偽善かもしれないけどこの世界が未来を望むなら。僕は ……」

光に手を伸ばした。指先が触れようとした瞬間、

「待って！」

子供の声が響いて、白銀の髪の少女が現れた。少女はシアンに駆け寄ると、氷の柱に触れようとしていたその手を掴む。

「やめて…こんなのおかしいよ」

シアンはその少女を驚いたように見た。

「どうして？」

「だっておにいちゃんが死んじゃったらみんな悲しむよ……だから」
「……………」

シアンは首を振った。

「でも、僕がこの記憶を解かないとどうしようも無い……」

「じゃあ、みんなどうするの？みんなおにいちゃんの為にがんばってきたんだよ？それなのに……おにいちゃんが死んじゃったら意味ないよ」

エフイメはその濃い青色の瞳に涙を浮かべ、必死にシアンにしがみついた。

「じゃあ、エフイメはこのまま世界が滅んでいくのを見ているの？何もせずにこの世界が死んでいくのを」

「……違う！そうじゃない」

エフイメは懸命に首を振った。

「おにいちゃん何にも分かってない。何も……………」

シアンは哀しげに笑った。

「うん……そうかもしれないね。記憶と共に無くしたんだと思うよ」

シアンはエフイメの髪に手を触れた。

「お別れだね……僕と同じ血を持つ風」

シアンはエフイメをそっと抱きしめた。まるで、愛しい兄妹のように。

「君は人間達に……負けないで。異種族だろうと、この世界に生きてるんだから」

そう言うと、シアンは立ち上がった。

「……………さようなら」

だが、エフイメはシアンの体を突いた。そして自分でその氷の柱に手を触れたのだ。

「……！？エフイメ」

その途端天然の光が弾け、氷の柱が砕け散った。辺りが眩しく輝きだす。

それと共に、シアンの中に何かが起こった。

「エ…ファイメ」

辺りの光がエファイメの最後の姿を映し出した。

「ごめんね…」

さらに急激に光が辺りに満ちた。

長い間記憶を探していた。

それは自分の過去を知るため。

羽翼神の助言に従い、この世界を救うため
だけ。

それは建前で。

本当は…淋しかったのかもしれない。

過去を持っている事が、羨ましかったのかもしれない。

目が覚めると、砕けた氷柱の前に倒れていた。

「……………」

頭がひどく痛い。

なぜか、体がすごく重たく感じた。

手を動かしてみた。

顔に手をやる。それから驚いたように掌を見た。

(泣いている…?)

その事がさらに涙を流させた。

そうか。

これが欲しかったのか…

「シアン！」

その時、よく聞き慣れた声が聞こえた。

ティアだ。

「どうしたの…エファイメは？」

シアンは体を起こした。それだけで頭に激痛が走った。

「……………」

「大丈夫？」

「シアンさん？」

ホープがはっとしたように、シアンを呼んだ。

「…何かあったのですか？」

その声に皆がシアンを見る。

「シアン」

「にーちゃん」

セクトがシアンに飛びついてきた。

「大丈夫です」

そのいつもと変わらない口調に、皆はなぜか不思議と安堵した。

「ここでいったい何があったのですか？」

「…！」

シアンははっとしたように辺りを見回した。

(…いない)

「あ！氷の柱が…エフイメ？」

セクトがはっとしたように、その崩れた氷を見た。

「エフイメ！」

ティアがその白銀の少女を見て駆け寄る。セクトもエフイメに恐る恐る近付いた。

「エフイメ？」

ティアがエフイメを抱え起こした。

「どうしたの？エフイメ…」

ティアが体を揺すってみる。しかし、エフイメは動かない。

「なんで」

「ティアさん」

シアンが声をかけてきた。

「エフイメは…その封印を僕の代わりに解いたんです」

「…どうして」

「僕が解こうとしたのに…代わりにエフイメが」

ティアはぎゅっと、エフイメを抱きしめた。

「もう誰かが死ぬのを見たくないのに…」

「…お姉…ちゃん」

その時、エフイメが目を開いた。

「エフイメ！」

ティアがその手を取る。

「大丈夫？何て事したの！バカ！！」

エフイメが口元を緩ませた。

「お…姉ちゃん…に初めて怒ら…れた…」

「エフイメ…」

シアンがエフイメの顔を見た。今にも泣き出しそうだ。

「お兄ちゃん…記憶は？」

「大丈夫…ちゃんとここに」

エフイメがホツとしたような表情を浮かべた。

「お姉ちゃん…ごめんね。…お兄ちゃん…生きて…風が吹いて…」

最後までエフイメの言葉を聞けなかった。腕に抱えた小さな体から力が抜けたのだ。

「エフイメ…！」

ティアが我慢出来ずに俯いた。

その時シアンは、エフイメの手に自分の首にかけてあったペンダントを握らせた。

「ラミア・デルセレデ…風のなみだよ」

（エフイメ…ほんの僅かな時間だったけど君に逢えてよかった）

「我…ここに今風に愛されし者を昇りし夢にみまたを還す…永久なる逡巡を巡らし」

風のなみだが呪に反応し、光を放った。

「この遠世を請う疎記が廻らないようにラミア・デルセレデ神の英知…このシアセアから尾季を拭え」

ペンダントが宙に浮いた。

風のなみだがエフイメを包み込むように、さらに光を放った。

光と共に、エフイメの体が空気に溶けるように消えた。

「…っ」

ティアが思わず涙を流した。

「ティアさん…ありがとう」

「……うん」

そしてシアンは顔を上げ、氷の柱があつた所を見た。

そこには、掌にのるような小さな透明の結晶石があつた。宙に浮かび、光を受けて静かに佇んでいた。

「……」

シアンは何も言わずに、それに手を触れた。

エフイメが命がけで解いた結晶石が形を無くし、中から何かが染み出してきた。見ているとそれが形を成し、やがて人の姿となつた。

《名を問ごう…風の末裔よ》

シアンはそれをじつと見つめた。

「僕…私はレシア・オイセ・フェータル」

(フェータル…)

《レシア・オイセ・フェータルよ。我の中にもお前の記憶が残っていた。今までの記憶が…》

「……」

《一度出遭たな》

「はい」

ティアが、え？という顔でシアン…フェータルを見た。

《あの時は、もうこの世界が崩れていくのを見ているだけだと思っていたが》

その若い、人のようなものはふと、表情を変えた。あの馬のように。

《もう一人の風がそなたの記憶を解いた》

「……はい」

《あの者はそなたと同じ命運を持つ者。初めはそなたが… いや、やめておごう》

「…オーセファイア様」

《我はこの世界が生まれた時から、ここで世界が変わっていくのを見ている。そして、そなたが今、この世界を変えようとしている事

も」

フェータルは目を伏せた。

《一つ問こう。そなたはこの世界を存続させたいか。今、異種族と
言われている者達が排絶しようとしているこの世界を》

フェータルは戸惑ったように、オーセファイア神を見た。

「…私は」

《人間達がこの世界の住人とさも言わんような、このシアセアを救
いたいか》

「……………」

神はじつと、フェータルの答えを待った。

「はい。それは…今から人間達が解決してくれる事だと思いますか
ら。今まで旅してきた中でそれが、不可能では無いという事が分か
りました」

オーセファイア神は目を閉じた。

《そうか。それがそなたの答えなのだな》

「…はい」

《分かった。ならば、我はそなたの願いを聞き届けよう。それが約
束であったからな》

(約束…?)

その時、当たりの景色が嵐のように流れて行くのを、フェータルは
見た。

「…あれ。ここは？」

一面の花畑？だけど風が吹いていない。

(夢?)

まさに夢で見たものと同じだった。

夢なのだろうか。

「シアン…」

その時声がした。あの声は。

「ティアさん」

ティアが、いつのまにかそこに立っていた。

「ここは？」

「ここが……“約束の地”」

「ここが？」

フェータルは驚いたように辺りを見回した。

（じゃあ、あの老人がもしかしてバレス・ハリツテス？）

「私……シアン。あ、もうシアンじゃないか」

「……シアンでいいです。ティアさんがつけてくれた名前ですから
すると、ティアが照れたように後ろを向いた。

「……私、シアンの小さい頃を見たわ」

「え？」

「多分そうだったと思う。シアンはすごく小さくて。気難しい自分の祖父に、木で作った彫刻を渡そうとしてたわ」

「……………」

フェータルは照れたように頭をかいた。

「……ええ、そうです。僕もあの頃の事は少し覚えてます」

「なんだか、それ見て私……いいなって思ったの」

「……………」

「私には家族と……祖父にそんな事できなかったから」

ティアはしゃがみこんで、花に手を伸ばした。

「私、家族の顔さえ覚えていないもの……シアンが少し羨ましいかな」

「ティアさん……」

ティアが立ち上がってフェータルを見る。

「私はもう少し時間が必要みたい。自分が誰なのか。だからシアン」

「はい？」

「約束して」

「え？」

「いつかまた、本当の自分を見つけたらここに帰ってくるって
シアンは目を見開いた。

「ティアさん？」

だけどティアは笑った。

その笑顔がすごく綺麗だったから、フェータルには何も言えなかった。フェータルは只頷いた。

「シアン…」

ティアが名を呼んだ。そして、二つの影が重なった。

時はずっと昔…まだこの世界が滅びに向かう前に逆戻りした。

すべてが、何もなかった頃に戻った。

ただし、人間達と異種族の記憶も。

それから旅をした仲間達の事も。

だが、それ以来神はこの世界から姿を消した。

まるで、この世界に初めから存在などしていなかったかのように。

だけど、知っている。

この大地はどんなに記憶が消えても、その出来事は忘れない。この世界が生きているかぎり。

（そつだ、確かに）

忘れていた。こんなにも大切な事を。

ここに置いていこう。この大切なものを。もう私には必要ない。だから。

記憶の中にこの欠片を遺していく。

還る前に一度風が囁いた。

私は決して…忘れないと。

19・道証（後書き）

これは五、六年前に書いた物に改稿、修正したものです。：何か恥ずかしい程駄文ですね（逝）書いてる時、恥ずかしさと共に懐かしさも味わってました。この小説を読んだ方、もしいらっしゃいましたら本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9470b/>

風の幻

2010年10月11日18時11分発行